

45-437

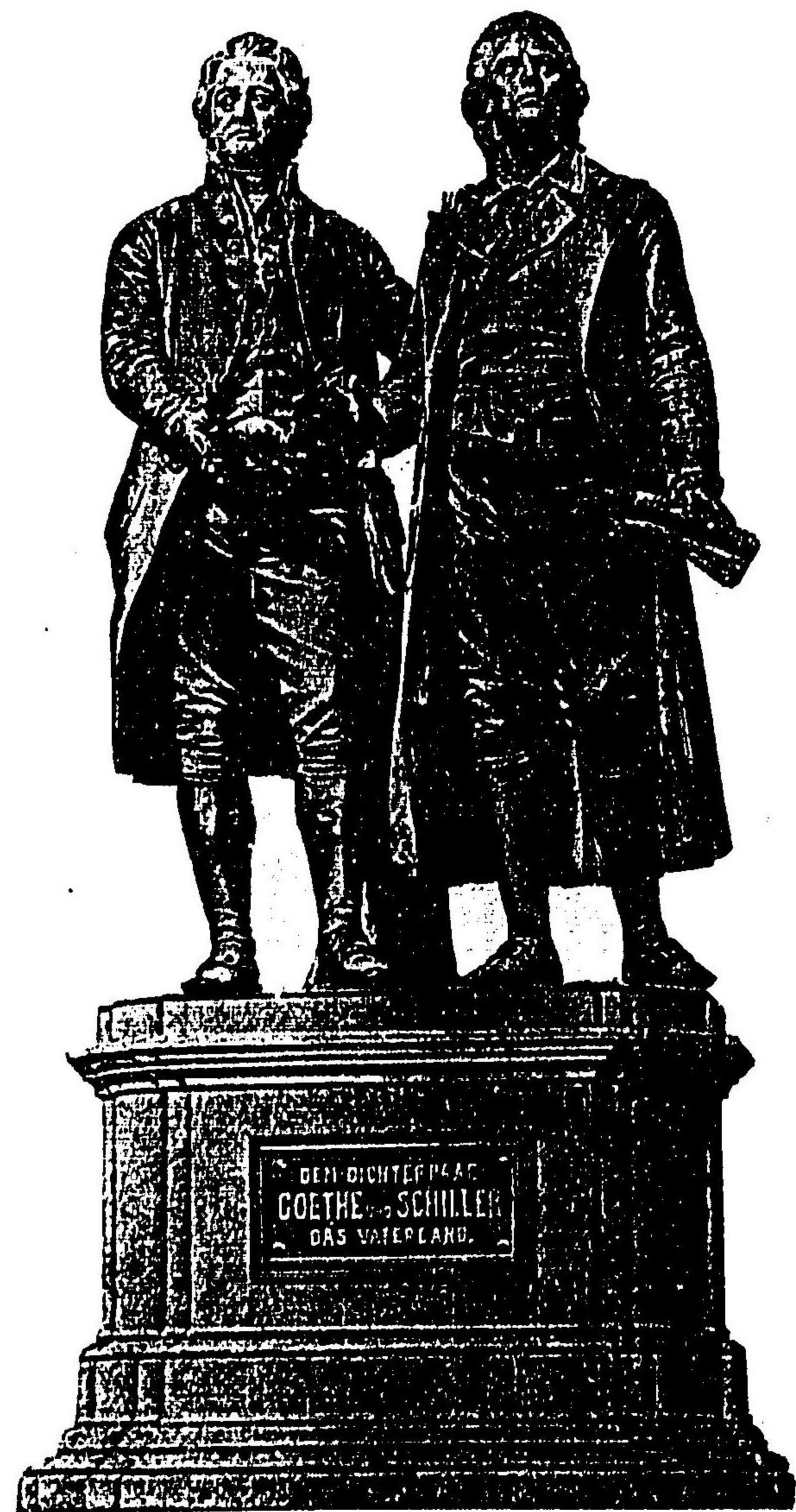
文學士葉山萬次郎著

獨逸國民文學史全

明治 27 9 22 内交

東京 合資 會社 富山房發行

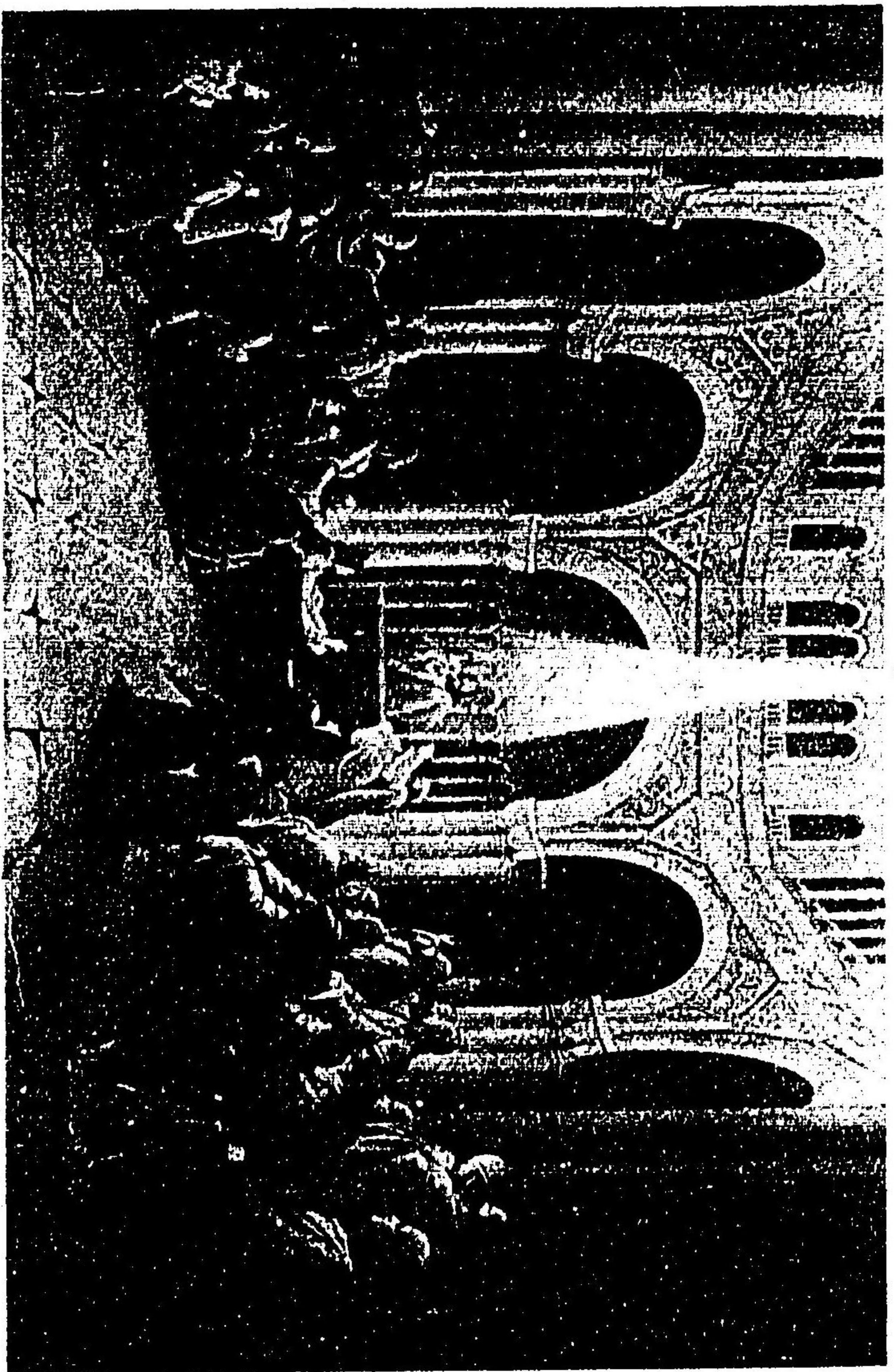




ルンレン(右)テ1ケ左)  
像立之傑詩兩  
(リ在ニル1マイロ)



切大の「ルナ」の彫刻のルナ





### 卷頭に序す。

本書を著すに至りたる理由及び本書の目的、性質等は、既に凡例と叙説とに於て言ひ盡したれば、これらの事に就いては、又何をか言ふを要せん。

記事の散漫にして、所論の未だ至らざる所多きは、著者が大に遺憾とする所なりと雖も、今更之を如何とも爲し難ければ、他日の成功を待たんのみされど、ゲーテ、シルレル以後殊にロマンティスム以下即ち十九世紀の文藝思潮を叙すること頗る簡單にして、シュレーゲル、ノワリス、テイク等の評傳と、ゲーテ、シルレル等の評論とは、其細粗繁簡殆んど比較するに足らざるなり。此事實は、著者が本書を短日月を以て書き終りしとの遁辭を以てしては、到底免る能はざる大欠點なり。

然りと雖も近世文學は材料頗る多方面に亘り、之を著者の欲する所に従うて叙述せんとせば、少なくとも更に數百頁を増加して、猶盡くさざる所多かる可く、紙幅限ある小冊子の能く爲し能はざる所なり。依つて本書に於ては、大膽にも之を簡約して、僅かに生年月と著書の概要とを擧ぐるに止まれり。著者の



研究進み造詣する所深きに及んでは別に一卷として十九世紀獨逸文學史を世に公にすることあらん。

次いで一言す可きは、本書出版の遷延したる理由なり。されど此理由は今の時が悠然として、他國の文學を鼓吹するに必須なるや否やを考ふれば、又何の疑か之あらん。

著者は東洋平和克復の曉には、戰勝國の文藝大に勃興するあらんことを渴望して已まざるなり。獨逸國民文學史を出版するに際し、卷頭に序すること斯の如し。

明治三十七年五月金州半島封鎖令發布せられたるの日。

葉山萬次郎識

### 凡例

- 一 本書は名づけて獨逸國民文學史と云ふ。我國の學術界と最も親密の關係ある獨逸國の文學史が、廣く吾人に紹介されざるは、我現時の文壇に於ける一大欠點なり。敢て小冊子を編述せし所以は、一に聊此欠を補はんとするにあり。
- 一 本書は倉卒の際に脱稿せしものにして、材料の杜撰、記事の散漫なる可きは、著者の期する所。此等の點は、後日を経て逐次改訂増補する所ある可し。
- 一 本書を著すに當りては、主として第一編第一章の終に列擧したる文學史數種と此外ヘルデル、グロッツ、シュトック、ゲーテ、ノヴリス、シュレーゲル等の各文豪の評傳とを參考したり。
- 一 本書中書名及び人名は、原語を各頁の上註となせり。されど時として書名は或は譯語或は原語の假名書或は双方を以て示したり。
- 一 外國語の音を假名に寫すに際して、Wの音にはッ行を用ゐ、Vの音にはフ、フ、フ、フを用ゐ、Hの音にはハ行を用ゐたり。



一 人名を假名にて記する時、全一人には其間に(、)を用ゐ(例へば、ヨハン、クリストフ、フリードリッヒ、シルレル)二人には其間に(○)を用ゐたり(例へば、ゲルテ、シルレル)但し兩人名の間に接續詞を用ゐたる時は(○)點を省く。

一 卷末に人名索引を附し、アルファベット順に文豪の名を並列し且つ其年代をも示せり。

明治三十六仲秋

追分の假寓にありし時

葉山萬次郎識

### 獨逸國民文學史 目次

#### 第一編 叙 説

第一章	文學史とは何ぞや。獨逸國民文學史の意義……………	一
第二章	インドゲルマニッシュ語系……………	二一
第三章	ゲルマニッシュ語系の方言……………	一四
第四章	南獨逸語……………	一七
第五章	獨逸最古の律語……………	二〇
第六章	ウルフィラ。聖書の翻譯……………	二三
第七章	人民移轉時代の俗語……………	二六
第二編	古南獨逸語時代の文學(フランク王國 の建國より十字軍の始迄。凡そ紀元 六百年より千百年迄)	
第一章	ヒルデブラントの歌……………	二九



第二章 カール大帝時代の文學……………三四

第三章 九世紀の宗教的詩歌……………三九

第四章 十世紀の宗教的羅旬詩歌……………四四

第三編 中南獨逸語時代の文學(十字軍より宗教改革迄。千百年より千五百年迄)

十字軍時代の中南獨逸詩歌の隆興。千百年より千三百年迄。

第一章 獨逸詩歌の開發……………五二

第二章 新詩歌の萌芽……………六一

第三章 武士的詩歌と民間詩歌との關係……………七四

第四章 ニーベルンゲンの歌……………七九

第五章 グードルンの歌及び其他の民間叙事詩……………九八

第六章 武士的叙事詩の材料……………一〇七

第七章 武士的叙事詩の四大家……………一一一

第八章 武士的抒情詩の材料及び詩形……………一二三

第九章 著名なる武士的抒情詩人……………一二九

第十章 戀愛詩歌の衰頽……………一三二

中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頽。千三百年より千五百年迄。

第一章 詩歌の衰頽及び其原因……………一三五

第二章 叙事詩……………一三八

第三章 抒情詩……………一三八

第四章 教訓詩……………一四二

第五章 劇詩……………一四四

第六章 散文……………一五二

第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)



ルテルよりオービッツ迄。千五百年より千六百二十四年迄。

第一章	マルティン、ルテル。……………	一五四
第二章	ウルリッヒ、フォン、フッテン。トーマス、ムルナル。……………	一六三
第三章	ハンス、ザックス。……………	一六五
第四章	ヨハン、フィッシャルト。……………	一六九
第五章	其他文藝上の作品。……………	一七二
	オービッツよりクroppシュトック迄。千六百二十四年より千七百四十八年迄。	
第一章	提要(附言語學會の設立)。……………	一七七
第二章	第一シレシア詩社。マルティン、オービッツ及び其一派。……………	一八二
第三章	第二シレシア詩社。……………	一九三
第四章	シレシア詩社と對立せる一派。……………	一九八

第五章	小説及び諷刺物語。……………	二〇三
第六章	萊府學派と瑞西學派との論争。……………	二〇九
第七章	南方詩人ハルレル及び北方詩人ハーゲドルン。……………	二一七
第八章	普魯西亞詩社。……………	二二〇
第九章	萊府詩社。……………	二二三
	クラシチスムス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。	
○	クラシチスムス。……………	

第一章	クroppシュトック。……………	二二七
第二章	ホーラント。……………	二三七
第三章	ゲッティンゲン詩社。……………	二四五
第四章	レッシンク。……………	二五一
第五章	ヘルデル。……………	三二五



第六章 天才時代……………三三〇

第七章 ゲーテ……………三三六

第八章 シルレル……………四三八

第九章 散文家……………四九〇

第十章 シアン、パウエル、フリードリッヒ、ヘルデルリン……………四九八

○ロマンティスムス。

第一章 緒論……………五〇八

第二章 ノゾリス、シュレーゲル兄弟、ルードヴィッヒ、テイク……………五二二

第三章 其他のロマンティスムス派の詩人……………五一九

第四章 埃太利詩人……………五二四

第五章 ロマンティスムス派の後継者及び対立せる一派……………五三二

第六章 自由戦争時代の詩人……………五三九

第七章 シュワーブ派詩人……………五四八

第八章 ダス、ユング、ドイッチェラント……………五五四

第九章 千八百四十年代に於けるロマンティスムス派の詩人……………五五七

千八百四十八年以後の文學。

第一章 過渡時期の詩人……………五六一

第二章 寫實派……………五六七

第三章 最近獨逸文壇……………五七七

附 録

○人名索引



獨逸國民文學史 挿書目次

一、	ゲーテ・シルレル兩詩傑之立像	……	卷首
二、	ワグネルの歌劇『バルシファル』の大切	……	全前
三、	グリム兄弟 <small>(此節は近世の部に載す可かりし、獨逸言語學の關係上茲に載す)</small>	……	一四
四、	ウルフィラ譯聖書中所謂『銀典』の一節	……	二四
五、	ヒルデブランドの歌の第一頁	……	三〇
六、	ニーベルンゲンの歌 <small>(ホーテムス、イオンヘン記録)</small> の一節	……	八〇
七、	マルティン、ルテル	……	一五四
八、	マルティン、オービッツ	……	一八二
九、	ゴットシェツド、ホードメル、ブライティンゲル	……	二二二
十、	クロツプシュトックの叙事詩『メシアス』の題書	……	二三三
十一、	十八世紀の四文豪 <small>(クロツプシュトック、ヘルダー、ル、レツシナク、ホーランド)</small>	……	二五〇
十二、	レツシナクの『ラオコオン』の一節	……	二七四
十三、	レツシナクに論駁せられたるホンケルマン	……	二八〇



十四、	青年のゲーテ	三三六
十五、	ゲーテの筆蹟	三六四
十六、	余が敬愛する詩人シルレル	四三八
十七、	シルレルの筆蹟 <small>(フランクフルト、フォン、メッジナ、曲初、興行の折一友に與へたる書簡)</small>	四五六
十八、	『ロイベル』曲初興行の廣告文 <small>(其一、曲名、役割、時代、日附等、其二、作者が公衆に告ぐる辭)</small>	四六四
十九、	フォッス、ジアン、パウエル <small>(此兩人を同一紙面に載せたる、は印刷の都合上已むなきなり)</small>	四九八
二十、	ロマンティスムスの四文豪 <small>(シムス、グライク、)</small>	五一二
廿一、	グリルバルチェル、ガイベル	五二四
廿二、	シヤミツソ、リツケルト、イムメルマン、ウーランド	五三三
廿三、	ケルチル、アルント	五四〇
廿四、	ユンゲ、ドイッチュランド中の六文豪	五五四
廿五、	ワグネル、ヘッベル	五六四
廿六、	フライターク、ケルレル	五七〇
廿七、	バイロイトの歌劇座	卷尾

# 獨逸國民文學史

文學士 葉山萬次郎著

## 第一編 敘 説

### 第一章

文學史とは何ぞや、獨逸國民文學史の意義

文學史とは、精神的、生活の發展の記録なり、而して文藝作品は此生活の發展を吾人に示すものなり。

文藝作品の其時代の精神、氣風、習慣に感化せらるゝことの多大なるは、勿論なりと雖も、又逆に作品の時代に及ぼす影響も、更に甚だ大なるものあり、これ大文豪の場合に於て殊に其然るを觀るなり、此間の消息を明かにし、時代と作家、作家と時代との相互の關係を述べ、單に表面上

文學史とは何ぞや



の事實年月の正確のみを事とせず、深く裏面に入りて、國民の精神的生活を研究するは、將にこれ文學史家の任なり。

さて文學史研究に二法あり、此二法は獨り文學史のみならず、既に哲學史に於ても用ゐられたる方法にして、敢て嶄新なるものに非ずと雖も、從來の文學史家及び哲學史家は主として此二法の一によらざるなく、近時に及んで、二法各其欠點あることを發見し、折衷法行はるゝに至れり。

此二法とは一は作家及び作品を中心とするの法にして、作家の傳を敘述し、作品の内容如何を説明するに、時代の順序を逐ひて進むなり、他の一は思潮の變遷、時勢の傾向を根據とするの法にして、全く作家及び作品を評論せざるに非ずと雖も、主として思潮及び時代の傾向を論述するものなり。

第一法は作家と作品とに就きて確實なる智識を得るには、極めて便利なるものなりと雖も、これ只各作家及び各作品に就いて得たる斷片

的の智識に過ぎずして、其間更に統一を認めざるなり、茲に於て此法は一方に大なる便利あると共に、他方に於て甚だしき欠點あるなり。

第二法は時勢の傾向、思潮の變遷を土臺とするを以て、其説述する所終始一貫して、これより得る所の智識は概念的なり、されど又此法も此長所あると共に他の短所を有す、即ち此法による時は余りに理論的なるが爲めに、往々空論に馳するの弊を免れざるなり。

謂ふに二法は各一長一短ありて、孰を是なりと云ふ能はざると全時に、二者共に非とし難し。

若し夫れ單に作家と作品とを研究して、時代の思潮如何を顧みざる時は、文學史は文學者年表と擇ぶ所なかる可く、さりとて時勢の傾向を主として、作家及び作品を詳述せざるに於ては、文學史は徒に空理空論に馳せて、極めて無趣味なるものとならん。

文學の主腦たるものは詩歌なり、詩歌に現れたる情緒の發展を叙する文學史は、まかく乾燥無味なる可きものにあらざるなり、此目的を以



て前に挙げたる二法を検するに孰も其欠點を有す。茲に於てか折衷法  
 出で、思潮の變遷に伴うて作家及び作品を評論し、時代と作家との關係  
 を叙述するに至れり。

文學史は或點に於て批評の學なり、甲作家と乙作家とを箇々獨立し  
 て論評するに止まらずして、時として兩々相對して評論することあり、  
 又全一作家の作品に就いても、互に前作と後作との人物の描寫、文體の  
 如何等を批判することあり。

此批評の場合に於ける文學史家の態度に於ても大別二種あるなり、  
 一は文學に對して自己の一定せる主義を有し、此主義に基いて批評を  
 下すものにして、此態度を取れる批評家は、自己の主義に合せざる作は、  
 全く之を度外視するか、或は偏頗の批評を下すものなり、他の一は、確乎  
 たる主義主張なく漫然あらゆる作品を網羅し評論を試むるものなり、  
 さて又此態度に於ても、研究法の場合に於けると全じく各優劣ある  
 なり、前者は一定の主義に依れるを以て、所論一貫せりと雖も、其評論は

一方に偏し、公平を欠くと云はざる可からず、後者は之に反して不偏不  
 黨なりと雖も、其議論は散漫たるを免れざるなり。

かく批評に際して自己の主義を標榜し、其立脚點より論ずる時は評  
 論偏狹に陥り、又無主義を以て文藝に對する時は、所論漫然たらざるを  
 得ざるなり。

されど翻て考ふるに文學者及び文學史家たるものは、研究の度進む  
 につれて、自ら或一詩人若しくは或一派の作を尊崇するに至るは、數の  
 免れざる所にして、從て其感化を受くること甚大なり、此感化は次第に  
 増長して、遂に知らず／＼其人の主義となり、又は、少くとも文藝に對す  
 る一種の趣味を養成するに至る、此時に際して文藝の批評が不偏不黨  
 にして、絶對的公平を保たんことは云ふ可くして行ふ可からざるなり、  
 要するに此二者の區別は其程度如何に在るものにして、二者孰も極端  
 に走る時は、一は偏狹となり、一は散漫となるなり。

ロマンティスム派の人がクラシチスム派を非難し、又寫實派の人



がロマンティスム派を論駁するが如く、其作品の是非善悪を第二として、先づ其作家が何派何主義に屬するやを問ふに至つては、余が容易に首肯する能はざる所なり。されど主義なく標準なくして、漫りに甲を是とし乙を非とするに至つては、又如何ともすべからず。

かく論じ來る時は、兩者の得失は遂に判明し難しと雖も、余は之をシレーゲルに學べり、批評に於ける第一の要件は、作品を中心として、其特性を發揮せしむるに在り、文學史家たるものは常に此要件を充たす可きことを念頭より去らしむ可からず、然る時は評論散漫ならずして、公平を保つことを得んか。

文學史の性質、研究法及び文學史家の態度夫れ斯の如し、此小冊子が果して此等の要求を充たすや否や、著者自ら之を知らず、宜しく讀者の判断に一任すと云はんのみ。

此書題して獨逸國民文學史と云ふ、單に獨逸文學史と稱せずして、文

獨逸國民  
文學史の  
意義

學史に冠するに更に國民の二字を以てしたるは、蓋し故なきにあらずるなり。

獨逸國民文學とは、廣義に云ふ獨逸文學の一部を形作るものなり、廣義に云ふ獨逸文學とは、獨逸國民の精神的作物の總稱なれども、國民文學とは、其國民によりて作り出されたる總ての作物の謂に非ずして、其國特有の印象を刻したる文藝を云ふなり。

凡そ一國の文明は其國民に因つて作り出さる、依て其國民の思想、感情を記したる文學史には、其國民の特殊なる歴史を認む可きなり。

さてあらゆる國民の最も古く、且つ最も特有なる文學は律語に在り、就中獨逸國民の心性生活は、律語によりて、最も能く表現せられたり、吾人は主として此律語的文學の研究により、自ら獨逸國民に特有なる思想、氣風、習慣を觀るを得可きなり、余が特に名けて獨逸國民文學史と稱する所以のもの亦實に此點に在て存す。



左に最も廣く世に行はるゝ文學史十數種を擧げん。

一、アウグスト、コリンズ、ルシタイン著

獨逸國民文學史要

August Koberstein: Grundriss der Geschichte der deutschen Nationalliteratur.

二、ゲオルグ、ゲルギョヌス著

獨逸詩歌史

Georg Gerwius: Geschichte der deutschen Dichtung.

三、カール、ホルム、シヨーニン著

獨逸文學史

Wilhelm Schäfer: Handbuch der Geschichte der deutschen Litteratur.

四、アウグスト、カール、マール著

獨逸國民文學史

August Vilmar: Geschichte der deutschen Nationalliteratur.

五、カール、ホルム、リンデマン著

獨逸文學史

Wilhelm Lindemann: Geschichte der deutschen Litteratur.

六、エルキル、ハーン著

獨逸詩文學史

Venerer Hahn: Geschichte der poetischen Litteratur der Deutschen.

七、ローネルト、ケローニコ著

獨逸文學史

Robert Koenig: Deutsche Litteraturgeschichte.

八、カール、ホルム、シヨーニン著

獨逸文學史

Wilhelm Scherer: Geschichte der deutschen Litteratur.

九、ゴットホルド、クレー著

獨逸文學史要

Gotthold Klee: Grundzüge der deutschen Litteraturgeschichte.



十、ヘルマン・クルーゲ著

獨逸國民文學史

Hermann Kluge: Geschichte der deutschen National-Litteratur.

十一、ハートマン著

十八世紀文學史(英、佛、獨三國の文學)

クラッセ著

ハートマン著文學史索引

Hettner: Litteraturgeschichte des 18. Jahrhunderts.

Grasse: Register zu Hettners Litteraturgeschichte.

十二、ユリアン・シュミット著

獨逸文學史(ライプニッツ以後現代に至る)

Julian Schmidt: Geschichte der deutschen Litteratur von Leibnitz bis auf unsere

Zeit.

十三、ソヒャルト・マイエル著

十九世紀獨逸文學史

Richard Meyer: Die deutsche Litteratur des 19. Jahrhunderts.

十四、フーグト・コホ共著

獨逸文學史

Vogt und Koch: Geschichte der deutschen Litteratur.

十五、ブロードルン、バルテルス著

獨逸文學史

Adolf Bartels: Geschichte der deutschen Litteratur.

十六、カール・ワイトブレヒト著

十九世紀獨逸文學史

Carl Weibrecht: Deutsche Litteraturgeschichte des 19. Jahrhunderts.

第二章 インド・ゲルマニク語系

ゲルマン民族は、往古中央亞細亞の高原に住したるアリアと稱す



る戦闘を好みたる民族より分離したるなり、數千年前アリア人は、祖先墳墓の地を去つて漂泊せり、而して漂泊の道すがら、種々の民族に分かれたり、ヒンヅクシの北方に移轉したる其一民族をイラニアンと稱す、イラニアンは、再び東西イラニアンの二民族に分かれたり、西イラニアン民族は、進んで南方に向ひ、峻峻なる山路を越へて、遠くイングス河畔の沃野に移れり、依つてインド人の名起れり、移轉を好めるアリアの他の一部は、漸次西方に突進し、遂に分かれて、希臘人、羅馬人、ケルト人、ゲルマン人、リタウエル人及びスラッ人となれり。

此等の民族が、同一民族より出で、其間に親密なる關係あることは、其言語に徴して容易に知ることを得るなり。

此等民族の言語を、吾人はインドゲルマニッシュと名づく、されど正しくは、インド、オイロペイッシュ又はアフリッシュと稱す可きなり。

此言語に屬するもの、亞細亞にては、サンスクリット(エダは此語にて書かる)ツェンド語及びアルトヘルシッシュなり。

歐羅巴にて之に屬するものは、

一、希臘語、

二、羅甸語、これより出でたるロマニッシュ語(伊太利語、西班牙語、葡萄牙語、佛蘭西語、クールエルシ語、ルメーニッシュ語等)

三、スラッ語、之に屬するは、露西亞語、スロエーニッシュ語、セルビッシュ語、

ブルガリーリッシュ語、波蘭語、チェツヒッシュ語、エンディッシュ語の七語あり。

四、リタウイッシュ語、

五、ケルティッシュ語、此語は、イルランド、北蘇格蘭、エールス及びブレタ

ラッ語と稱するものにして、チュリルスとメトデイスとの二人が、聖書を翻譯せしは此語なりき。

六、リタウイッシュ語、

七、ケルティッシュ語、

八、ゲルマニッシュ語、

九、インドゲルマニッシュ語の諸語が、全一語系を有することは、原初の語根に

一ニに殘存せり。

一ニに殘存せり。



よつて考ふる時は、直に知ることを得るなり。  
其相類する點は、

第一、語尾が全一の原則によること。

第二、主母音の變化が、全一原則によること等なり。

此關係を詳説するは、言語學の範圍に屬す。今は此類を避けて、只其密接の關係あることを述ぶるのみ。フランツ、ポップが創設したる比較文法は、此關係を詳述するものなり。ポップに次いで、グリム兄弟が獨逸語に關する研究の功績は偉大なるものなり。

第三章　ゲルマニシ語系の方言

ゲルマニシ語は、早くより諸種の方言となりて分かれたり。

一、ゴートイシ語。

二、アルトノルディシ語。之に屬するは、諾威、イスラント、瑞典、丁抹等の方言に於て發展したるものなり。アルトノルディシ語の記録は、獨逸神學上に特色を放てり。依つて謂ふに、神話は、ゲルマン民族が分離せざ





よつて考ふる時は、直に知ることを得るなり。  
其相類する點は、

第一、語尾が全一の原則によること。

第二、主母音の變化が全一原則によること等なり。

此關係を詳説するは、言語學の範圍に屬す。今は此煩を避けて、只其密接の關係あることを述ぶるのみ。フランチ、ポップが創設したる比較文法は、此關係を詳述するものなり。ポップに次いで、グリム兄弟が獨逸語に關する研究の功績は偉大なるものなり。

### 第三章　ゲルマニッシュ語系の方言。

ゲルマニッシュ語は、早くより諸種の方言となりて分かれたり。

一、ゴートイッシュ語。

二、アルトノルディッシュ語。之に屬するは、諾威、イスラント、瑞典、丁抹等の方言に於て發展したるものなり。アルトノルディッシュ語の記録は、獨逸神學上に特色を放てり。依つて謂ふに、神話は、ゲルマン民族が分離せざ





る以前に於て既に存せしなり。上述せる如く、其全の言語を有するの事實より、ゲルマン種族は、互に親しき關係を有することを知れり。然るに又神學は、第二の連鎖として、ゲルマン民族を連結するものなり。のみならず、言語と神學との端緒は、又實にゲルマン民族と印度人、波斯人及び希臘人等との密接なる關係を示すものなり。

獨逸に於ては、耶穌教の傳播によつて、異教を排斥したる爲め、神話の記録に存するもの甚だ罕なり。之に反して、イスラランドに於けるスカンディナヴィヤ人中には、耶穌教の傳來も、漸く紀元一千年頃にして、且つはスカルデと稱する世襲の歌人ありて、神話を歌ひしを以て、神話は永く傳はれり。

イスラランドには、古代の歌集二卷あり、これゲルマン神話の最も古きものなり。二卷の中一を、古又は律語エツダ、他を新又は散文エツダと稱す。(エツダなる語は、アルトノルディッシュ語にては、曾祖母の意を有するものなり) 律語エツダは、イスラランドの學者ゼームンド、ジグフソンが集録したるも



のなり。此書は、王典の名を以て、現今コーベンハーゲンに存せり。

散文エッダは、イスランドの歴史家スノルリ、スツルレゾンが著はしたるものにして、律語エッダより餘程新しきものなり。

イスランドの文學は、エッダ二大歌集によりて、吾人に傳はるも、此時代に於ける他のゲルマン民族の言語は、多く世人に知られず。そはバンダリシ語、ランゴバルディシ語、原始獨逸語等には、一の文學的紀念の存せざるを以てなり。

三、獨逸語、獨逸語はカール大帝時代に於て始めて其記録を有す。此言語は子音變化第二の法則によりて、七世紀の頃三部に分かれたり。此法則は、次章南獨逸語の條下に述べ可し。

イ、南獨逸語、南方獨逸の山岳地方の語にして、之に屬する方言は、アレマーニシ語、シエービシ語(上ライン兩岸の語)、オーベルフレンキッシ語(ラインの左岸の語)、バイエリシ語及びエヌテルライヒシ語等なり。

ロ、中獨逸語、ミッテルフレンキッシ語(マインツ、コーブレンツ地方の

語)、ヘッシシ語、チュリンギシ語及びオーベルゼックシシ語等之に屬す。

ハ、北獨逸語、北方獨逸の平原地方の語にして、ニーデルフレンキッシ語、フリージシ語、ゼックシシ語等之に屬す。

ロマーニシ語と混合して、英語を生じたるアングルゼックシシ語には、叙事詩「ベオウルフ」あり。此詩は、後に出でたる「グロドルン」と全じく、北海岸に起りたる物語詩なり。

#### 第四章 南獨逸語

前章に述べたる如く、ゲルマニシ語は、インドゲルマニシ語系に屬す。而して全語系に屬する他の語例へば希臘語、梵語等とゲルマニシ語との相異なる特質は、一定の子音に關して起りたる音の變化なり。之を第一變化と云ふ。此關係を發見したるは、言語學の大家グリムなり。依つて、之をグリムの法則とも稱す。此法則に従へば、希臘語、羅旬語等の子音は、ゲルマニシ語に於て、メディア(a, b, g)は、テヌイス(t, p, k)となり、テヌイスは、アスピラタ(th, f, ch)となり、アスピラタは、再びメディアなる。かく循環



してテヌイスよりアスピラタ、アスピラタよりメディアと變化するにより、又之を單に「タム」と通稱す。之を名づけたるは、テヌイス、アスピラタ、メディアの原語の三頭字を以てせるなり。グリンは、彼の著書「獨逸語の歴史」に於て、此關係を詳述せり。此法則は獨逸言語學上に於ける大發明と云ふ可きなり。

第一變化の起りしは、歴史以前の時代なり。さて紀元六世紀頃獨逸語に於て、再び子音に關して、音の變化起りたり。之を第一變化に對して、第二變化と云ふ。第二變化は齒音に關して完全に行はれ、唇音及び喉音には不完全なり。此點に於て、第二變化は、第一變化と異れり。即ち第一變化は全體に關し、第二變化は一部分なり。第二變化によりて生じたるものを、南獨逸語と稱し、以て北獨逸語と相區別す。南北と稱するは、地理學上より、其方位によつて名づけたるなり。

第一變化によりて、ゲルマニシ語が、他のインドゲルマニシ語と相區別する如く、南獨逸語は、第二變化によりて、他のゲルマニシ語と相區別するなり。

第二變化は、獨逸の南方、山岳地方にのみ起り、北獨逸の平原地方には起らざりき。これ或は氣候風土の影響にはあらざるか、何故に土地の高低により、南方と北方とが、聲音學上差別を生じたるかは、言語學者の疑問に屬し、今日に於て、尙確たる説明を得ざるなり。

往古に於ける獨逸文化の發展は、南方に始まりて、漸次北方に及べり。茲に於て、南獨逸語は、獨逸文學に於て、偉大なる勢力を有す。獨逸國民の精神的な生活が特色を發揮したるは、實に南獨逸語なり。吾人は南獨逸語を其發達の順序により、左の三期に區分す。

- 第一 古南獨逸語時代。凡そ紀元六百年より千百年迄。
- 第二 中南獨逸語時代。千百年より千五百年迄。
- 第三 新南獨逸語時代。千五百年より現代に至る迄。

第一第二時代には、地方により各種の方言に分かれ、廣く行はるゝ文章語はなかりき。第三時代に於ては、オムベルゼックシ方言に基ける文



章語出來たり。まかし此時代にも、南中北獨逸語の三方言は、依然として  
残存したり。

### 第五章 獨逸最古の律語

豪放磊落なるゲルマン人は、往古既に歌を有したり。羅馬歴史家クテ  
ツス(紀元後百年頃の人)は、其著書「ゲルマニア」に於て、ゲルマン人の當時  
の風俗習慣を記せり。「ゲルマニア」によれば、ゲルマン人は、戰場に臨む時、  
又は歡樂の宴席に於て歌を歌ひたるなり。

タチツスが、歴史上最も古く、且つ唯一の紀念として、傳ふる歌中に、ゲ  
ルマン人が諸神及び勇者の徳を讚美せしものあり、勇者としては、彼等  
は、就中其祖先たるツイスコト、又はツイスト、及び其子マンヌスを歌  
へり(ゲルマニア第二章、獨逸人は、古歌に於て、ツイスコトを地神として、  
其子マンヌスを人民の祖先及び創造者として尊崇せり云々)。彼等は、ヘ  
ルクレスを歌へり(ゲルマニア第三章、獨逸人は、希臘の勇者ヘルクレス  
を歌ひたり云々)。彼等は、又獨逸をして、羅馬の羈絆を脱せしめたるアル

ミニウスを歌ひたり。後世獨逸人は、アルミニウスの功勳を表彰せんと  
て、千八百七十五年紀念碑を建立せり。獨逸人が、かく尊敬せし勇者なれ  
ど、希臘人、羅馬人には、殆んど知られざりき(アンナレーヌ、第二卷、八十九  
節、野蠻人、羅馬人は、獨逸人を、かく呼べり)は、アルミニウスを歌へり。希臘  
人は、元來排外自尊の民なれば、希臘の年代記には、アルミニウスの名全  
く記されず。羅馬人中にも、アルミニウスは、著名ならざりき。

歌を歌ひつゝ、戰場に臨むは、獨逸人特有の習慣なりき。彼等は、軍歌を  
歌ふに當り、其聲を大にせんが爲め、楯を口にあて、聲を反響せしめた  
り。かくして、先づ聲を以て、敵を威服し、勝利を得んことを望みたるなり。  
かく歌ふ事を、彼等は、バルディッスと名づけたり(バルディッスとは、アル  
トナルディッシ語にて、楯の意を有する故かく名づけしか。又は、ミルレン  
ホッフの説の如く、バルト、ゲザング(鬚歌の意なるべし)(ゲルマニア第三  
章、獨逸人は、其歌ひ方をバルディッスと名づくる一種の歌を有したり。之  
を歌ふ目的は、勇氣を鼓舞し、且つ戰爭の勝敗を豫知するにありき。軍歌



一たび、戰場に歌はれて、軍氣鼓舞せる時は勝ち、之に反して、沮喪せる時は、敗るゝなり。其妻まじき叫は、人聲とは思へぬ程なりき云々。

さて、バルディッスと云ふ語の爲に、後世に至り、古代の獨逸人中には、バルデンと稱する専門の歌人ありと云ふ誤解を招けり。此誤解は、クロップシトックの時代に廣く行はれたり。クロップシトックが、「バルディエーテ」と名づけし戯曲は、古代のバルデン歌を摸倣せしなり。此後デーニス、クレッチマン等も、クロップシトックの例に倣へり。

されどケルト種族には、専門の歌人あり、此一族をバルデンと稱したり。又イスラントには、スカルデンと稱する歌人ありき。

獨逸の古代に於て、歌は専門歌人の専有物にあらずして、全人民之を歌ひたるなり。これによつて察するに、當時の獨逸人は、歌謠の嗜好に富みたる民族なりしなり。

さて此等の歌は、暗誦により口傳したるものなれば、人民移轉の騒動により多く忘却されたりき。

#### 第六章 ウルフイラ、聖書の翻譯

ゲルマン種族中ゴート人は最も教化に適したる民族なりき。さればゴート人は、他民族に先んじて耶蘇教に入り、聖書をも當時の俗語に翻譯したりき。此翻譯は、ゲルマニシ語の記録中最古の紀念物なり。西ゴートの僧正ウルフイラ(紀元三百十一年に生まれ、三百八十一年に、コンスタンチノーベルに於て死す)は、實に此翻譯を企て、完成せしなり。ウルフイラは、新舊聖書を悉く翻譯せしが、舊約書中の「クローニッゲ」の卷丈は、省略したり。そは當時の人民の殺伐なる精神に、更に刺戟を與ふるを欲せざりしを以てなり。彼は翻譯するに際し、舊約には、ヘブレイ原書の希臘、セプトアギンタを、而して新約には、希の原書を参考したりき。傳ふる所によれば、「セプトアギンタ」は、埃及王プトレメウスの命を奉じて、猶太の七十二人の學者が、當時繁華なりし都アレキサンドリアに於て翻譯せるなりと、「セプトアギンタ」とは、羅句語にて七十の意なり。學者の數が七十人なる故、かく名づけしなり。



ウルフイラが用ゐたる文字は、獨逸最古の文字ルーナンなりき。此文字の起源は到底知る可らず、イヌランドの古詩エッダによれば、此文字を作り出せしは、人民が最上神として尊崇せしオーディンなりと云ふ。古代の獨逸人は、此文字を用ゐて、神意を探り、又は種々の魔術を行へり。されど語の本意に従へば、ルーナンとは綴りたる文字の意なり。彼等が豫言せんとする時は、菓實を結べる木(通常山毛櫨)にて杖を造り、其尖頭にルーナンを刻み、かくして數本の杖を作り、之を振り廻はしたる後、廣き布の上に投げ出せり。而して後、僧侶又は家父が恭しく此等を神前に捧げ、祈禱をなし、謹んで其内より三本の杖を取り出し、之に書かれたる文字により、吉凶禍福を判断せり。之に類する風習は、未開時代に於て、何れの國にも見る所なり。ウルフイラは、ルーナンに加ふるに、羅甸及び希臘文字を以てし、三者を合一して、一のゴートイシエ、アルフヘートを作りたり。惜い哉、此貴重なる翻譯は、完全に保存されず、幾かに断片として残存するのみ。

НААІК. ІФІІАНЗНАЕІАНЗ.СІІАФ  
 ЗІІН. ФАТЕІУАІАНАКІАЕТІІА  
 ЕІАІКІВІІЗУІІФІАІІКІІІТІАІІ  
 СУЕІАМЕАІФІІТ. СХНАІАТЕІ  
 УАІКІАХНІКІСІУЕКІАФ. ІФНАІК  
 ТРІЗЕФАІККАНАВАУСІКІАІІІФ  
 СУАКЕНІКВАХТІАІІ. ААІІСІАІІЗІІ



幸にも四福音は、所謂「銀典」と稱して、完全に保存さる。此書は十六世紀に至り、デュツセルドルフの寺院エルデンに於て発見され、現今瑞典のウプサラ大學に在り、「銀典」の名を得たる所以は、紫色の革紙に銀字を以て書かれたるによる。後マルシャル、ラガルディエは、之に銀の表装をなせり。各編の第一行は見分け易き爲めに金字を以て書かる。依つて詳しく云へば「銀典」は銀字にして、一部は金字にて書かれたるなり。

十八世紀に、僧侶クニッテルが、ブラウンシュヴァイヒに於て発見したる「コ  
ーデックス、カロリヌス」と稱する記録は、現今ヲルフ、ミン、ビュッテルに在  
り。此記録中に羅馬人の二三の手簡あり。

マイランドにも、記録の断片あり。これはロンバルダイの寺院ボッピオ  
に於て発見されたり。発見者は、管長アンゼロにして、カステリオーチ伯  
と協同して出版せり。此内には馬太傳、保羅の書簡、エストラ及びマヘミア  
等の断片あり。



匈奴一たび歐洲に襲來して、四世紀の中葉以來人民の大移轉始まり、ゴート、フランク、アレマン、サクセン、ランゴバルド、ブルグンド等數十種族に分れしゲルマン民族は、其居所を去つて、東西南北に漂泊し、當時衰微せし羅馬帝國領内に侵入せり。これ單に歷史上著るしき事件たるのみならず、文學上に大影響を及ぼせり。トロイ戰爭の勇者が希臘詩人に歌はれし如く、此騒動中に出てし勇者は、獨逸詩人に、好題目を與へたり。實に獨逸勇者物語詩の端緒は、此騒動時代にありとす。當時各種族の人民は、盛に各其勇者を歌へり、依つて各種族に勇者物語詩起れり。かく歌はれたる勇者の中には、詩人の想像に任せて、諸種の物語より新に作り出されたるもあり、又半神半人の勇者もありき。各種族にて歌はれし勇者を擧ぐれば、左の如し。

一、東ゴート人の勇者は、エルマンリッヒ(一名ヘルマンリッヒ)王なり。此王は、紀元三百七十五年匈奴襲來したる時、自國の滅亡を座視する



に忍びずして、百歳の高齡に達しながら、自殺して悲惨なる最後を遂げたり。次いで有名なる勇者は、西羅馬を亡ぼして伊太利王となりしオドアールを排して、伊太利に東ゴート王國を建てしテオドールヒ大王なり。王は居をラベンナにトせしも、時として、ベロナに住せしを以て、物語にては、ベロナの君主の意にて、ディトリッヒ、フン、ベルンと稱せらる。

- 二、フランク人の勇者は、半神の勇者ジグフリードなり。
- 三、ブルグンド人の勇者は、其諸王グンテル(四百三十七年に、匈奴に其軍を全滅せる)ゲルノート及びギゼルヘル等にして、其部下にて、ハーゲン、フォルケルの二人と、王妹クリームヒルデ等は、特に著名なり。
- 四、匈奴の勇者は、アタイラ王なり。物語にては、エツェルと呼ぶる。其後をヘルヘー」と云ふ。其部下にて、リューディゲル、フォン、ベヒラルムは著名なり。
- 五、ランゴバルド人の勇者は、ロイタル王、オルトニート王、フーグディ



トトリヒ王及び其子ラルフ、ディートリヒ等著名なり。

六、アレマン人の勇者は、ワルテル、フォン、ワスゲンシュタイン及びヒルデグンデ等なり。

七、フリスマ人(現今のフリースランド人)はこの後裔なり(傳説の中心は、著名なるグロドルンなり)。「グロドルンの歌」は、後章に於て詳説すべし。

以上各種族の勇者は、數世紀間盛に歌はれたり、されど此等の歌は、口頭には傳はりしものなれば、今は多く残存せず。



第二編 古南獨逸語時代の文學(フランクン

王國の建國より十字軍の始迄。凡そ

紀元六百年より千百年迄)

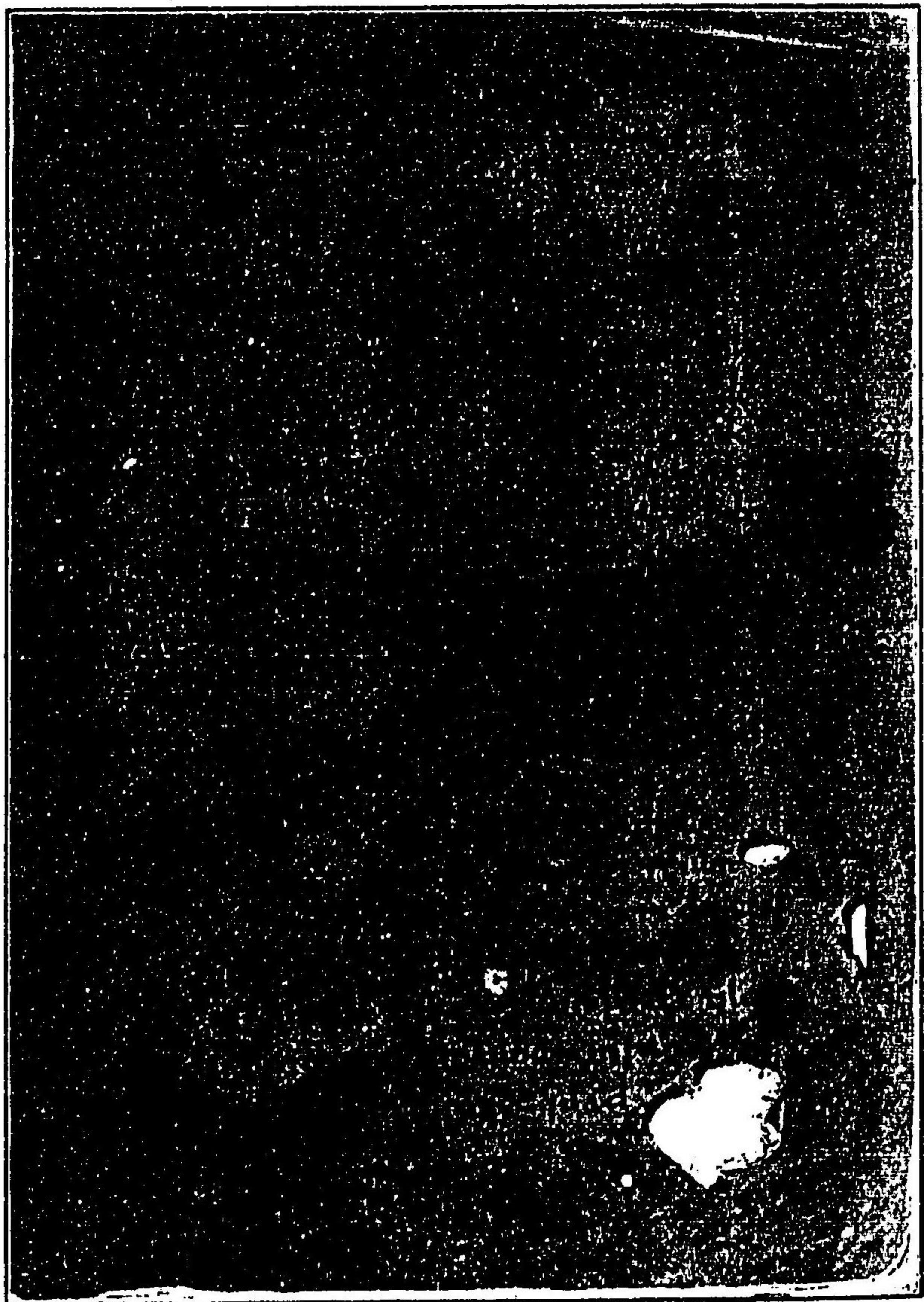
第一章 ヒルデブランドの歌。

此時代には、夥多の俗話出てしも、今日に傳はれるは、東ゴット王テオ  
ドローリヒを歌へる「デイトロツヒ物語」前章に述べたる如く、物語にては「デ  
イトロツヒ」と稱せらるる中の一部「ヒルデブランド」なり。此詩は、八世  
紀に出てたるものにて、歴史上の事實に基くと雖も、亦全く相戻れる所  
もあり。假へば、四百五十三年に死したる匈奴王エツセル(アッティラ王のこ  
とに、四百五十五年に生れたるテオドローリヒが、救を乞へる如き、又オド  
アーケルを追うて、伊太利に建國せしは、テオドローリヒなるに、却つてテ  
オドローリヒが、オドアーケルを恐れて逃げしと云ふが如き、皆正史と相  
反す。されどこれ所謂詩的大膽の叙述法にして、詩としては、事實を狂げ



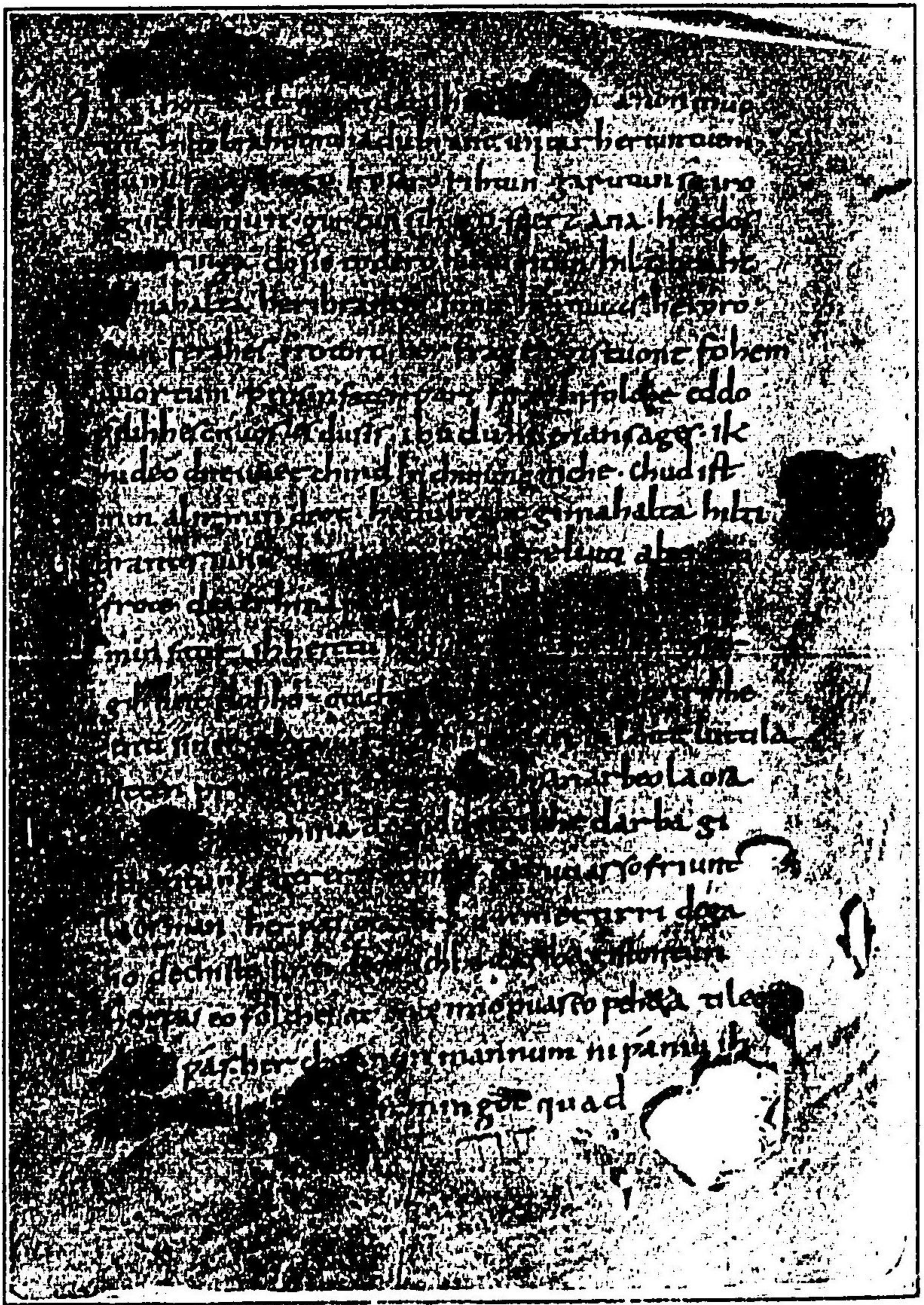
たる丈趣味多き心地するなり。

「ヒルデブランド」とは、ドイツリヒ王の軍事奉行ヒルデブランドの物語なれば、かく名づけたるなり。此英雄詩の筋は、大略左の如し。物語によれば、ヒルデブランドは、ドイツリヒ王と共に、オドアーケルを恐れ、逃げて難を匈奴王ニツェルの許に避けたり。ヒルデブランドは、家を出づる時、當年三歳の幼児ハツブランドを残し置きたり。數十年を経て、彼は再び故國伊太利に歸り來れり。さるに國境には、一人の勇ましき武士軍勢を率ゐて、關門を警衛せり。彼は故國に入らんとして入る能はざるなり。白刃將に相交らんとせしが、ヒルデブランドは、之に先つて敵手の名を問へり。圖らざりき。此武士は、ヒルデブランドが故國を出づる時、残し置きたる一子ハツブランドならんとは、父は其子たるを知りて驚き、自ら其父たるとを述べて、争鬪をやめんとし、且つ當時獨逸戰士が、最も愛玩せし飾にて、然かも、匈奴王アッテイヤより贈物として貰ひたる腕輪を與へんとせり。されど勇氣に誇れる若武者は、黙して之を受くるの理な



頁一第の歌のドンラブアルロ





頁一第の歌のドンリアアキヒ

たる丈趣味多き心地するなり。

「ヒルデブランツリド」とは、ドイツリッヒ王の軍事奉行ヒルデブラン  
ドの物語なれば、かく名づけたるなり。此英雄詩の筋は、大略左の如し。

物語によれば、ヒルデブランドは、ドイツリッヒ王と共に、オドアーケル  
を恐れ、逃げて難を匈奴王エツェルの許に避けたり。ヒルデブランドは、家  
出づる時、當年三歳の幼児ハツブランドを残し置きたり。數十年を経て、  
彼は再び故國伊太利に歸り來れり。さるに國境には、一人の勇ましき武  
士軍勢を率ゐて、關門を警衛せり。彼は故國に入らんとして入る能はざ  
るなり。白刃將に相交らんとせしが、ヒルデブランドは、之に先つて敵手  
の名を問へり。圖らざりき。此武士は、ヒルデブランドが、故國を出づる時  
残し置きたる一子ハツブランドならんとは、父は其子たるを知りて驚き、  
自ら其父たるを述べて、争鬪をやめんとし、且つ當時獨逸戰士が、最も  
愛玩せし飾にて、然かも、匈奴王アッテラより贈物として貰ひたる腕輪を  
與へんとせり。されど勇氣に誇れる若武者は、黙して之を受くるの理な



く、揚言して曰く、「然らば、劍にかけて頂戴せん、いざ向ひ來れ、汝は狹狹なる匈奴なり、汝我を欺いて、命を全ふせんと欲するか、我が父は、過ぐる年匈奴の戦争に赴いて既に死せり、されど欺かんと欲せば欺け、我が刀の斬味を試めずは此時なり」と、ハツブランドは、父を、もはや此世の人にあらずと信じて、かくはヒルデブランドを嘲けりたるなり、父は深く愛情に動かされたり、さりとて武士の名は汚がす可からず、かくして、遂に父子は、刃を交へぬ、烈しき争闘の最中にて詩終る、断篇なれば、終局は知る能はず、されど他の記録により察するに、父は遂に子を組み伏せしも殺さず、無理に父たることを承諾せしむるが如し、十五世紀に出てたる散文小説『カール・ナザーグ』には、父が子に手を負はせ、子は遂に降参して、劍を父に渡すとあり、十五世紀に出てシカスバル、フォン、ロエーンが改作せし物語にては、子は父の白刃に斃る。

『ヒルデブランド』は、フルダの寺院に保存されたる羅匈文の祈禱書中に発見され、現今カッセルに在り、始めて此英雄詩を出版せしは、グ



リム兄弟なり。

この詩の言辭は、主として古北獨逸語なれど、古南獨逸語をも含めり、而して詩形は頭韻なり。頭韻とは、一定の規則により、語の頭に同子音を置くことなり。各句は、八高音を有する長き句なり、而して毎句を一の劃線によつて二分し、前半後半共に四高音を有す。さて此四高音は、必ずしも幹綴にあらざして、却て語尾綴にあることあり。まかし幹綴の高音は、常に主高音にして、語尾綴の高音は副高音なり。低音は、時として全く無きことあり。

アンゲル、ゼック、シシニ、アルトノル、ディシ、及び獨逸最古の律語に於ては、當時脚韻なかりしを以て、多く頭韻を用ゐたり。

各長句は、通常四頭韻少くとも二頭韻を有せざる可からず。規則上前半句に於て二語が、後半句に於て、一語が頭韻をなさざる可からず。常に語の始の子韻が、頭韻をなさずして、時として幹綴の子音が頭韻をなすことあり。又子音の外母音の頭韻もあり。

九世紀に至りては、脚韻が頭韻に代りて、用ゐられしも、尙格言等には、多く頭韻を用ゐたりき。

後世に至りて、頭韻を用ゐたる詩人少しとせず。就中有名なるは、リュックルトの「ローランド」、イン、ブレーメン「ラッベの「フロストナハト」フリーケの「シグアルド、デル、ジュランゲンテーター」シヤミッソーが、イストランドの古詩を翻譯したる「リーデ、フォン、ツリユム」等なり。されど頭韻詩として、最も著名なるは、ホルヘルム、ヨルダンの叙事詩「ニーベルンゲン」なり。

英雄詩の外に、シブルップホエジ（格言詩）と稱するものあり。其例はメルゼブルクの呪文中に二篇ありて、一は戦時の捕虜を解放する効力を有し、他の一は、馬の足をくじかざる爲めの呪文なり。メルゼブルグの名を附する所以は、ゲオルグ、ワイツが、メルゼブルグに於て、發見したるを以てなり。此詩形は頭韻なり。此外近時に至りて、テオドール、フォン、ガラヤンが發見したる、「ヒルテンゼーゲン」『牧羊人祈禱』及びフランツ、プファイエルが出版せる「ピーチンゼーゲン」『蜜蜂祈禱』と云ふ二詩あり。されど此二詩



は、前者に比して、餘程後世のものにして、其思想も異教的にあらずして、耶穌教的なり、又韻の如きも、一部は脚韻なり。

「ベオルフ物語の詩」は、英文學に名高き叙事詩にして、八世紀の始に出でたるなり、アングルゼックシシ方言を以て書きたるものにして、詩形は頭韻なり、ベオルフとは人名にて、瑞典國中のゲアータンの王なり、海の怪物グレンデル及び其怪物の母と闘ひて、此等の怪物を殺るせしも、遂には大蛇と闘ひて死せり。

此詩は、言語上英文學に屬するものなれど、其話の源は獨逸にして、獨逸最古の詩及び習慣に重大なる關係を有するを以て、獨逸文學史に於ても、其名を擧ぐるの必要あるなり。

レオの如きは、此詩を勇者を歌へる獨逸最古の詩と云へり、ジムロック、グライン等は、此詩を獨逸語に翻譯したり。

## 第二章 カール大帝時代の文學

カール大帝時代(七百六十八年フランク王となり、八百年より八百十

四年迄羅馬皇帝)は、獨逸國民の精神上及び文學上に、大革命を來したる時期なり、カールの天下經營の大企畫は、ゲルマン全種族を合同して、耶穌教國民となし、以て文化を擴めんとするにありき、さればカールは、外方に向つては、領土を擴張せんとして、サクセン人を壓し、北獨逸全軀に耶穌教を布かん事を努めたり、内部に於ても、勵精して、治を圖かり、新宗教の基礎を固め、人民の教化を進めんことに盡力し、先づ人民の指導者たる可き僧侶に、學問を獎勵し、最も教育あるものとなさんとせり。

元來フランク人中には、學者なかりしを以て、カールは、盛に外國の學者を招聘せり、アングル、サクセン人の學者アルクイン、ランゴバルド人のパウル、ワルチフリード及び伊太利人のベーター、フオン、ピサ等は、就中著名なり。

カールは、アルクインが創設せし學校を模範として、國中に夥多の僧侶學校を建設したり、中にも、アルクインの高弟フラバィヌス、マウルスが、八百四年以來管理せしフルダの學校は、最も盛にして、後にサンクト、



ガルレン校の勃興せる迄は第一流に位したりき。

カールは、人民に學問を奨励せしのみならず、自からも、大に勉勵せり。老成の齡に達して、羅甸語を學ぶを恥ぢず、白髮を戴きながら、手習をなせり。又宮中に一の學校を設け、王子及び宮内官吏子弟の教育に充てたり。

カールは、深く獨逸の國風を重んじ、獨逸文法の編纂をなし、又歴史家エギンハルドの話に基き、獨逸古代の俗語を集めたり。僧侶には、獨逸語にて祈禱せしめ、獨逸語にて教授せしめたり。

カールは、英明の君主なりしも、嗣子ルドヴィヒ、デルフロムメは、溫良の君子にして、群臣を統御し、國政を整理するの敏腕を有せざりき。されば、先王の時、畏服せし僧侶も、漸次專横を極め、大に跋扈するに至れり。先王の時、集められたる俗語も、此王の時、遺失し、終に再び發見されざりき。古代の異教趣味を帯びたる俗語は、獨逸人が耶蘇教に改宗せし以來、日を追うて消滅せり。當時文字を能くせしは、僧侶のみなりしが、僧侶は

改宗者が、昔日の神を尊ぶの念を起さんことを憂ひ、且つ異教の昔を想ひ起すことを妨げんとして、在來の俗語を絶滅せんとせり。

寺院會議と、フランク諸王の契約とにより、古代の異教的歌謠を歌ふことを嚴禁し、之に代りて、耶蘇教の歌出で、寺院に於て之を歌へり。元來フランク國は、國語東西二部に分かれ、東部は、ゲルマニシ語にして、西部は、ロマロニシ語なりき。カール大帝は、能く之を合同せしも、嗣子ルドヴィヒは、統御の才なく、其三子相争ひ、長子ロルクールは、獨裁の君たらんとして、却つてフランク本國を二弟に奪はれ、繼かに伊太利を保つて、帝と稱したり。茲に於て二弟は、帝國を分割し、東西フランク二國に分かれたり。

既に八百四十二年に、ルドヴィヒ、デルドイツとカール、デルカールとが同盟條約をなすに當り、ルドヴィヒの誓の語は、獨逸語にして、カールは佛語にて誓へり。然るに、翌八百四十三年、歴史上著名なるエルダンの條約により、前述せる如く、カールの大帝國は、三分され、三王鼎立の姿



となれり。

フランス國の分裂は、茲に於て、形式上のみならず、精神上の分裂となり、此時を以て、國語、國體共に東西全く相異なるに至り、遂に現今の獨佛二國となれり。

今日のドイツチ(獨逸語)なる語は、當時ドイツカと稱したり。これより先、人民移轉の騒動起りし時、ゲルマーチン及びゲルマニシ等の語は消失せり。依て獨人は、自國語を呼ぶにドイツカを以てし、寺院にて用ゐる羅旬語及び西方のローマニシ語と相區別せしなり。然るにエルダンの條約により、東西フランス兩國對立するに至りては、兩國國民とも、自己の國體、國風を重んずるの念を起し、従つてドイツカなる語には、自國を尊ぶの意を含むに至れり。當時は、此語尙廣く用ゐられざりしも、十一世紀の中葉に至り、一般に用ゐられたり。

エルダンの條約は、政治上のみならず、言語學上特に獨逸人の國家的思想の上に大影響を及ぼせり。依つて此條約は、文學史上特に注意すべき

ものなりとす。

### 第三章 九世紀の宗教的詩歌

此時代の著名なる詩歌は、左の數種なり。

一、『エッソトブルンの祈禱』(ゲス、エッソトブルンナル、ゲベート)

此詩はバイエルンの寺院エッソトブルンに於て、發見されしを以て、かく名づく、現今ミンヘンの王立圖書館に在り。詩形は頭韻にして、内容は全智全能の神が天使と共に住したる天地開闢以前の事を記せるなり。

二、『世界火災』(ムスピリ) イスランドの古詩『エグダ』によれば、地獄の亡

魂は、頻りに最終の裁判を待てり、最終の裁判始まると共に、地球上大火災起り、人畜の別なく、萬物を焼き盡すと云ふ。此時も亦世界の最後及び最終の裁判の事を記するものにして、迷信深き當時の人民の思想は、自から此詩に現はる。詩形は頭韻なり。ムスピリとは、元來萬物破壊の意にして、獨逸古代の神話にては、世界火災の意に用ゐられたり。此詩の命名者は、出版者シメルレルなり。獨逸の神話にては、人類の郷土たる地球を

第二編 古南獨逸語時代の文學(フリンケン王國の建國より十字軍の始迄) 凡そ紀元六百年より千百年迄) 第三章 九世紀の宗教的詩歌。



ミッテイルガルと云ふ、これ中庭の義にて、イーンハイム(巨人の世界)と、萬の神の居城アスガルト(城廓)との中間に存するものとなせり、「エッダ」にては神の裁判始まる時は神の番兵ハイムダル角笛を吹きて之を報ず、此詩に於ても亦然り、「エッダ」には、ワルハルラの勇者アーゼン及びアインヘリールとスルツールとの争あり、此詩にても、エリーアスとアンテックリストとの争あり、エリーアスの血流れて中庭(地球)に落ち、而して世界の大火起り、萬物を焼き拂ふなり。

かくの如く此詩は「エッダ」と相類する點多し、されど思想は、異教を脱して、耶蘇教的となれり、されば獨逸人の精神は、耶蘇教により、大に開發されたるなり。

惜むべきは、此詩も全からずして断片なり、此詩は、ルードホヒ、デルンロムメの書籍中に見出されたるものにして、多分王が其肥懣せしものを書きつけしものならん、エムメラン寺院に於て發見され、現今ミュンヘン王立圖書館に保存さる。

## 3. Heland.

三、「救世主」(ヘーリアンド) ヘーリアンドとは、アルトゼックシシ語にして、南獨逸語にては、ハイランドなり、此詩の命名者は出版者シメルンルなり、此詩は救世主の傳記にして、アルトゼックシシ語の四福音に基き、詩形は頭韻にして、殆んど六千句より成れり、ルードホヒ、デルンロムメの命を奉じて、當時有名なる詩人が作りたるなり、傳説によれば、天使が荒野に於て詩作の命を傳へたりと云ふ。

當時の人民は、新に異教を脱して、耶蘇教に改宗せしものなれば、人民の腦中より舊信仰は、全く去らざりき、依て詩人は、往々舊信仰に應ずる語句を採用せざるを得ず、無形なる死を人化して、過去、現在、未來を司る三女神中の過去の女神ウルドの名を付せること、惡魔サータンが、ヘリドヘルム(隠れ兜)を持つこと等は、異教の物語より出てたるなり、又聖靈が、鳩の形となりて耶蘇の肩にとまると云ふは、アルトノルド人が最上神として尊崇せしオーディンの肩に全智の標號たる鳥のとまりしと云ふと相類する話なり、されど根本の思想は、異教的に非ずして、耶蘇的な



り。前章に述べたる如く、サクセン人と、フランク人とは、久しき間主權の争をなせり、英明なるカール大帝出でて、遂にサクセン人を壓するに、帝の威權を以てし、且つ耶蘇教に改宗せしめたり、此詩はこの長き宗教戦争に於けるカールの勝利は、又實に救世主の勝利なることを述ぶるものにして、救世主の徳を讚美すると共に、大帝の功を稱し、耶蘇の傳記を修飾するに、大帝の事蹟を以てせり、依て此詩に於て、耶蘇は天帝として神たるの威光を有し、且つ恩威並び行はるゝ、獨逸君主の如し、従つて物語の仕組が、一般に獨逸化せられたり、例へば猶太國王ヘロデスが、祝宴を開く大廣間は、石造にあらで、ゲルマン風の木造なり、救世主が、ガリラヤの湖を渡る船は、古代北方のゲルマン種族が用ゐたるホーホボルドシップ(船體の聳へし船)となり、神の御子に臣下の誓をなすは、東國の賢者にあらで、強健なる獨逸勇者なり、耶蘇は帝王の如く、徒弟は其臣下の如し、山上の教訓は、恰も帝王が軍勢を率ゐる、人民を集めて侯伯と會合せる

4. Das Evangelienbuch.

が如し、新約留加傳にて聖主の降誕を記する所(第二章第八節)に「全地方に羊の牧人あり」とあるを、獨逸風に改めて、「此地方に馬の番人あり」となせり、かく聖書の事實を、獨逸化したるは、當時の人民の思想に適應せんが爲めなりき。

此詩は、グライン、ラップ、ジムロック等により、南獨逸語に翻譯されたり、されど、ホルマールの論文は、此詩を研究するに、最も便利なるものなり。

四、『福音書』マテ、エファンゲリー、エンブーフ、此詩は、フランク人の僧オットフリードが、古南獨逸語にて書けり、オットフリードは、かの有名なフタバヌース、マウルスが管理せしフルダの僧侶學校の學生にして、後エルザス州のワイセンブルグの僧侶學校の學監となれり、此時代の詩歌は、其作者不明なりしが、此歌に至りて、始めて其作者の名現はる、此詩は八百六十八年に出で、オットフリードは、之をルードホヒ、デルドイツチ、主に献じたり、詩形は、頭韻にあらで、脚韻なり、これ脚韻詩中最も古き大作なり、全詩は、節に分かれたれ、各節は、二長句より成り、各句は、八高音と

第二編 古南獨逸語時代の文學(フランク王国の建國より十字軍の始迄) 凡そ紀元六百年より千百年迄) 第三章 九世紀の宗教的詩歌。



若干の低音とより成れり。オットフリートは、此詩を五卷に分てり。これ、此詩を讀まば能く五官を清淨潔白にすとの意に出でたるなり。さればにや、詩中往々理路に流れ道學に泥む所あり。『ヘーリアンド』が、全く叙事的なるに反して、此詩は抒情詩的分子を含むこと多し。

此詩は、もと歌ふ爲めに作りたるものにて、全詩を數多の小節に分ち、以て暗誦に便にせり。されど上述せる如く、此詩はあまり、道德的格言に類するを以て、當時の人民の嗜好に適せずして、其目的は、達せられざりき。

五、『ゲスル、ルード非ヒスリード』。此詩は、西フランク王ルード非ヒ三世(カール、デル、カールの孫)が、八百八十一年に、ソークールの戦に於て、ノルマン人に勝ちし勝利を歌ふものなり。此詩の作家は、僧フクバルドなるべしと云ふ。此詩は所謂ライヒと稱する詩の種類に属す。ライヒに就いては、後篇に於て詳述すべければ、今は之を畧す。

#### 第四章 十世紀の宗教的羅句詩歌

紀元九百年以後獨逸詩歌は、一時中絶せり、而して之に代つて、羅句詩歌出でたり。オットー一世が、伊太利を平げて、遂に神聖羅馬皇帝となり、續いてオットー二世、三世出で、獨逸王は伊太利王を兼ね、展朝力を伊太利に用ゐしが、其結果として、此朝には羅句詩歌出でたり。宮廷に於て、かく羅句詩歌が賞玩されしを以て、僧侶も亦羅句の古文を學び、羅句語を以て詩歌を咏するに至れり。宗教的羅句詩歌の出でたるは、偶然にあらざるなり。此時代の詩歌を稱して、吾人は、十世紀の宗教的羅句詩歌と云ふ。其著名なるものを擧ぐれば左の如し。

##### 一、『アルテル、フオン、アクタニエン』

サンクト、ガルレン校は、カール大帝の時建立され、爾來人才輩出して、名聲噴々たりしが、此詩も亦此校の僧侶によつて作られたり。詩の題號は詩中の主人公の名に基くものなり。

詩形は羅句六脚韻にして、言辭は多く羅馬詩人カルギルの詩「エチイス」を摸倣すと雖も、内容に至りては、獨逸の眞髓を現はせる英雄物語詩な



り。かの匈奴王アッティラが、歐洲諸國を蹂躪して暴威を逞ふせし時、人質となりし二人の王子王女の濃かなる戀愛を歌ひたるものは、此詩なり。左に其梗概を記せん。

匈奴王アッティラは、西方の人民を鎮壓して、租税を徴せんとし、軍を率ゐて、パンノニエンを發す。ライン川に沿うて、フランク國の都ワルムスを攻め、ロイン川に沿うて、ブルグンド國の都シャロンを攻め、進んで遠くアクホタニエン國に攻入せり。匈奴王の向ふ所、敵なく、諸國風を望んで降り、人質を送つて和を乞へり。フランク王ギービヒは、其子クンテル尙幼弱なりしかば、其代りとして、夥多の財寶を添へて、ハーゲン、フオン、ツロンエーを人質として送り、ブルグンド王ヘルリヒは、王女ヒルデグンデを質となし、アクホタニエン王アルファリスは、其子ワルテルを送れり。此ワルテルは、本編の主人公なり。さてワルテルは、まだ幼年の頃より、ヒルデグンデと行末親しき契を結びたりき。此相愛せる二人が、共に人質となりしは、兩人に取りては、天與の奇遇にして、交情は益々密となりき。

かく三大國の王子王女を質に得たるアッティラ王は、凱歌を唱へて、パンノニエンに引き還へせり。人質となりし王子王女は、アッティラ王及び王后オスピリンの優遇を受けたり。されどなつかしきは故郷にて、雨の夕風の晨萬につけて、懷郷の念抑へ難かりき。されば如何にもして、逃れ出でんと、日夜苦心焦慮せしが、ハーゲンは、フランク王ギービヒ死したりとの風説を聞き、先づ逃げて國に歸る。次いで又ワルテル、ヒルデグンデの二人も相携へて逃亡せり。パンノニエンを出て、より山を越へ、谷を涉り、漸くにして、十四日目にワルムスに程近き、ライン河畔に到着せり。渡守は此二人の逃亡者が、財寶を有するを見て、領主グンテル王に密告せり。父王ギービヒは既に死せり。茲に於て、王は其寶を奪ひ取らんと決し、十二人の勇士を選べり。ハーゲンも亦其一人なり。十二人の勇士は、ヲゲーゼンと云ふ狹路に於て、二人に追及せり。ワルテルは、ヒルデグンデを、木蔭に隠くし、十二人の勇士と、一人々々果たし合ひて、十一人を斃せり。ワルテルの刃にかゝりし勇士の内には、ハーゲンの甥もありき。茲



に於て王に諫争して、ワルテルを助けんとせしハーゲンも、遂に已むを得ずして、グンテル王と共に、昔日の親友と闘ふに至れり。且より午に至り、勝負決せず、グンデル王を始めとし、ハーゲン、ワルテルも、皆重傷を負ひ、戦はんの勇氣も失せて、終に三人和睦せり。かくして、ワルテルは、ヒルデグンデを伴うて、無事故國に歸り、芽出度華燭の典を擧げ、父王の死後三十年間、國を治めしと云ふ。

二、『ルオードリーブ』 羅句六脚韻の詩にて断片として存せり。前詩『ワルテル』には、人民移轉時代の精神現はるゝと雖も、此詩は騎士制度の濫觴を叙述する者なり。詩人は、バイエルンの僧フロムンドなりと云ふ。

三、『動物物語断片(ティールサーゲ)』 グリムの説によれば、動物物語は、古代既に發達したり。動物中の傑物と稱せらるゝは、當時獨逸森林に在りて、最も恐れられし熊、次いで暴戾なる狼及び狡猾なる狐なりき。中にも、熊は當時動物の王と稱せられき。されど後に獅子出で、熊は其の王位を奪はれたり。さて物語にては、此等の動物に、各人名を付與せり。熊はプ

ルノ(毛色褐色なる故に、此名あり)狼は、イザングリム、鐵兜の意、其猛威を示すなり。狐は、レヤンハルド(狡猾、伶俐の意)と稱せられたり。このレギンハルドなる語より、後世ラインハルド又はライネツケの語出でたり。詩聖ゲーテの作『ライネツケ、フックス』は、此物語に基けり。

動物物語は、十世紀より、十二世紀に至る間、僧侶が羅句詩に作れり。そが中にて、最古と稱せらるゝは、『イゼングリムス』なりしが、近頃發見されたる『エクバシス、カプティ』は、尙一層古きものなりと云ふ。此等の物語は、言辭が羅句語なるのみならず、其材料も外國のものを取り來れり。

此傳説は、後世の動物物語と異なり、グリムの作『二人兄弟』の如く、人類と動物とを滑稽的に結合したるものに非ずして、教訓的諷刺的なり。されば、僧侶團體の關係、寺院管理の事のみならず、法王及び當時の政治問題をも、暗に諷せる所あり。動物物語研究に便なる書は、グリム、シメレンル共著『十世紀十一世紀羅句詩歌』なり。

四、『宗教的材料』(ガイストリアー) 厄ロスカーターが書ける羅句詩は







## 第三編 中南獨逸語時代の文學(十字軍の始

より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。)

十字軍時代の中南獨逸詩歌の隆興。  
千百年より千三百年迄。

## 第一章 獨逸詩歌の開發

既往に溯つて考ふるに、人民の大移轉、フランク國の建國及び分裂、耶蘇教の傳來は、前時代文學思潮の原動力なりき。人民の移轉ありて、各民族に勇者現はれ、勇者物語詩の濫觴となり、フランク國の統一によつて、國語、國民の合同となり、分裂するに及んでは、獨佛二國體の純然たる區別を生じ、耶蘇教傳來して、獨逸人民の思想を一變し、異教を脱して精神上大に開發したり、其結果アルトノルディシ語の異教的文學廢たれ、之に代つて、古南獨逸語の耶蘇教的文學出てたり、されど前編に述べたる如

く此時代には、一般に文章語よりは、方言が勢力あり、且つ普通人民には、異教の夢全く覺めざるの時なりしかば、詩歌の數多きに比しては、思想聲調共に幼稚なるが如し、十世紀に至り、オットー一世が神聖羅馬皇帝となるに及んで、宮廷の官人及び僧侶は、羅句語を學び、羅句語にて詩歌を作れり、そが爲めに、十世紀より十一世紀に至る凡そ百年間は、獨逸詩歌跡を絶てり、然るに十二世紀に至りては、僧侶も羅句語を廢し、獨逸語は一般に用ゐらるゝに至り、純然たる獨逸詩歌盛に續出せり。

中南獨逸語時代の文學は、十二世紀の中葉に於ける詩歌の開發を以て始まる、而して開發の原因五あり。

第一、十字軍、兩大宗教の軋轢として、東西二人種の衝突として、歴史上著名なる十字軍は、其影響頗る大にして、歐洲の精神界に著大なる變動を來し、中世以降の文化の大原因となれり、さてかゝる顯著なる前後七回、殆んど三世紀に跨がれる宗教戰爭は、歐洲各國の文學、政治、學術に、尠からざる影響を及ぼせしが、第二十十字軍には、コンラード三世が率先

## 第三編

中南獨逸語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。)  
第一章 獨逸詩歌の開發。



して、從軍せしを以て、殊に獨逸の文化に及ぼせし影響は大なりき。十字軍中東方に於ける觀察は、西人の腦裏に新智識を注入し、東方の詩歌、物語、傳説等の歐洲に傳來せしもの甚だ多かりき。思想は東方化して、智識は更に進み、見聞は廣くなりて、文學上に豊富なる材料を得たるの時、何人か詩歌の開發せることを疑ふものあらん。

第二、ホーヘンスタウフン家の興隆。千百三十八年より千二百五十四年に至る百十餘年の間、獨逸の帝位にありたるホーヘンスタウフン家は、コンラード三世を始とし、次いでフリードリヒ一世其他歴代の帝王皆文學を奨勵し、詩歌の發達を計れり。されば十字軍によりて、開發されし獨逸國民の思想は、文學的の方面に向つて、一層發展するに至れり。

第三、武士の全盛。此時代に於ては、帝王侯伯競うて、武士を優遇せしかば、武士は其眷顧に安んじて、一般に風流閑雅の嗜好を有するに至り、詩を賦し歌を咏ずるを以て、武士の娛樂となせり。されば武士的詩歌の物興故なきに非ざるなり。

第四、佛蘭西人との交通。十字軍に於て、獨逸人は、一層深く佛人と相交はるの機會を得たり。元來佛蘭西武士は、氣品高尚にして、宮廷に於て優遇され、且つ文事にも長じたり。疎暴なる獨逸人は、此風を視て、大に欽慕の念を起せり。當時佛蘭西には南部にツルパドール、北部にツルベールと云ふ詩派ありき。此二詩派は、獨逸詩歌に大なる影響を及ぼせり。

第五、世間想と出世間想との争。神聖羅馬皇帝と法王とは久しき間相軋轢し、法王は日の如く、皇帝は月の如しと、揚言して憚からざる。レゴリウス七世出づるに及んでは、法王の權威盛大となり、ハインリヒ四世の如きは、嚴冬跳足の儘、雪中に立ち、破門の謝罪をなせり。かくの如き政治と宗教との衝突は、國民一般の精神に活氣を添へ、國民の活動的精神は、文學上大に發展したり。

此時代の詩歌は、左の三種に分かれ、内容、詩形及び詩材に於て、判然たる區別ありとす。

## 第三編

中世獨逸時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 十字軍時代の中世獨逸詩歌の興隆、千百年より千三百年迄。

## 第一章 獨逸詩歌の開發。



一 武士的詩歌 武士的詩歌は、此時代に於て、最も華やかに、且つ後世に及ぼす影響も亦大なりき。かく名づくる所以は、此詩歌の作者は、多く武士なりしを以てなり。當時帝王侯伯殊に、煥太利侯が發ひし武士には、詩文を弄ぶもの多かりき。宮廷にては、儀式其他外觀に關する事多く、從つて萬事華美を尊びしかば、其精神は自ら詩歌にも現はれ、武士的詩歌は、詩形の美聲調の佳を主としたり。而して此朝の武人は、好んで詩材を外國に求め、詩形は、節に分かたずして、對韻を用ゐたり。此對韻は、古南獨逸詩歌の長句を分ちて出來たるなり。各句は、三又は四高音より成れり。對韻は時として調子よしと雖も、長く續く時は、單調となるなり。依つて之を避けんが爲め、往々對韻の法則を亂し、又高音と低音とを不規則に排列せり。

二 民間詩歌 侯伯の宮廷に、武士的詩歌隆盛を極めし時に當つて、街道市場に於ても、民衆をして傾聴せしむ可き民間詩歌ありき。此詩人は都市、村邑の別なく、各所を遍歴して、當時の人民が平素聞き馴れたる

勇者物語を歌へり。されば遍歴詩人の名出づるに至れり。武士的詩歌と民間詩歌とは、後漸次相接近せること第三章に述ぶるが如し。詩形は前者と異なり、對韻に非ずして、ニールンゲンシトロロフエなり。此シトロロフエに就いては、後章に述ぶ可し。

三 宗教的詩歌 其名の示す如く、僧侶の作又は宗教的趣味を帶ぶるものなり。

此時代の詩歌を、内容に基き分類する時は、三種となる。第一抒情詩、第二叙事詩、第三劇詩なり。中にも劇詩は、漸く此時代の終頃に然かも極めて幼稚なる姿にて現はれたるものなれば、散文と共に此時代の主要なる作品と稱す可からず。最も著るしく且つ最も特徴を發揮せるは、抒情詩及び叙事詩なりとす。さて此編にては、叙事詩と共に章を設けて、教訓詩を述ぶる事とせり。されど茲に注意す可きは、教訓詩は元來詩の種類と相並んで、詩の四種の一として數ふ可きものに非ず。詩の目的は、教訓



に非ず、教訓を標識とする詩の種類は有らざるなり。固より總ての叙事詩、抒情詩、劇詩は、或は感情に訴へ、或は理智に訴へて、教訓となるものあり。されど其詩の目的が教訓なりと云ふの故を以て、教訓詩を詩の第四種となすは大誤謬なり。教訓詩は以上の三種の内に含まるゝものにして、外に獨立したる詩の種類には非ざるなり。

普通世に教訓詩と稱せらるゝものは、想に乏しき抒情詩か、又は乾燥無味なる比喩的叙事詩なり。

詩の種類等を詳述するは、文學史のなす可き事に非ずと雖も、往々混同され、従つて誤用さるゝこと多きを以て、少しく述べ置くの必要あるなり。上述せし如く詩に三種あり、かく分類するには、原則なかる可からず。此原則は、明白なる標識となつて、區別をなすなり。詩の最も重大なる標識は其内容なり、而してあらゆる詩の主たる内容は、人生なり。依つて吾人は、詩の主たる内容即ち人生に基いて、詩を分類せんとす。

人生に二方面あり、内外之なり。内とは、永久内に止まつて、決して外に

現はれざるもの、即ち精神なり。此精神は、折に觸れ、時に應じ、感情、思想及び意志として現はる。されど此等は、空間的實在のものに非ずして、吾人は、只活動の状態にありとして知覺するのみなり。外とは、行爲となつて、現はる可き意志なり、換言すれば、外形となつて現はるゝ動作なり、而して此動作により、外界の事情を動かすことあるなり。

抒情詩は、主として、思想、感情を云ひ現はし、叙事詩及び劇詩は、動作を叙述す、而して叙事詩に於ては、事を叙述するに、之を過去の出來事とし、劇詩は、之に反して、現在吾人の眼前に見る如く、又は吾人の想像に明白なる様に、叙述せざる可からず。

内的人生即ち思想感情にあれ、外的人生即ち外界に向つて現はるゝ動作にあれ、詩に於て描き出さんとするものは、人生なり。内的及び外的人生に基づき、詩は二種に分かる。第一種は抒情詩にして、第二種は叙事詩及び劇詩なり。抒情詩は、其内容により、小分して、思想抒情詩及び感情抒情詩となる。通常詩の三種と稱するは、抒情詩、叙事詩及び劇詩なり。



さて複雑なる説明をやめて、簡單明瞭に、以上三種の詩の性質を述べ、抒情詩とは、主觀的敘述即ち詩家自身の思想感情を云ひ現はすなり、往時の出來事を述べずして現在の心情を云ふなり、シルレルの「ディ、イデ」の如く、昔日の心情を抒ぶる抒情詩もあれど、此詩の主とする處は、現在の感情にして、昔日の感情は單に其實たるなり、詳言すれば、昔日の心情は、只に現在の心情の對照として、敘せらるゝものにして、昔日の心情を述べたる爲め、現在の心情は、更に活動するなり。

敘事詩とは、客觀的敘述なり、即ち過去の事實を、其儘に敘述するなり、而して敘述に際しては、毫も作家自身の思想感情を交へざるなり。

劇詩とは、希臘の原語にて動作の意を有するにて知るべきが如く、主觀、客觀双方を兼有するものにして、動作を敘述するものなり、而して主觀的なる點に於て抒情詩に類し、客觀的なる點に於て、敘事詩に類す、されど若し主觀的なる點に於て抒情詩と全一にして、客觀的なる點に於て、敘事詩と全一ならば、劇詩は抒情詩にして、全時に敘事詩たるの不合

理を來すなり、さらば如何に相異なるかと云ふに、劇詩は動作を敘する點に於て、敘事詩に全じと雖も、動作を過去の事實とせず、觀者も共に其時其場所にあるものゝ如く敘する點に於て、敘事詩と異なれり、又劇詩は、思想感情を敘する點に於て、抒情詩に全じと雖も、之を詩人自身の思想感情とせず、舞臺に現はれたる人々のものとして敘する點に於て、抒情詩と異なれり。

詩歌の歴史的發達を見るに、何の國にても、先づ起るは、敘事詩次いで感情抒情詩、最後に劇詩なり、獨逸文學上に於ても、劇詩の出でしは、中南獨逸語時代の終頃なり。

此時代の言語は、所謂中南獨逸語にして、古南獨逸語の鋭き語尾漸次和らかになり、且つ主母音一部の變化によりて、發達せしものなり、されど中南獨逸語方言も、依然文學上に用ゐられたりき。

## 第二章 新詩歌の萌芽

前時代に於て、一時隆盛なりし羅句詩歌衰へ、之に代つて、再び獨逸詩



歌現はれたり。此詩歌が文學上に光彩を放つに先つて、過渡時代文學と稱すべきものあり。吾人は之を新詩歌の萌芽と名づく。そは、語辭尙ほ純粹なる中南獨逸語にあらず、句の構成不完全にして、韻律調はざる所あればなり。此時期に於ける詩人は、多く僧侶なること、前時代と異なるなきも、又中には普通人民にして、詩歌の道に長じたるもありき。此時代に於ける最も著名なる詩歌は、左の數種なり。

一、「アンノーリッド。」此詩は、千七十五年に死せしケルンの大僧正アンノーの傳記なり。而して之を潤飾するに、宗教上の事實を以てし、救世主の徳を讚美せり。マルティン、オービッツは、千六百三十九年に此詩を出版せり。其梗概を記せんに、左の如し。

詩人は、此詩を書くに、聖書を基とせしも、希臘羅馬に起りたる物語傳説等をも集録し、古來有名なる都市の起源及び其歴史的の發達を述べたり。中にもケルン市は、古代羅馬時代に於ける首都にして、皇帝アウグスツスの命を奉じて、アグリッパが建設せしと云ふ。神はアウグスツスの世

に始めて、天より地上を見下ろし、下萬民を救はんとせり。茲に於て、天上天下に王たる可き救世主の降誕ありき。主の使徒聖ペーテルは、羅馬に於て、惡魔を降伏せしめ、神聖なる十字架を安置し、羅馬府を聖主の有となせり。かくして他の使徒を、フランク國に送り、人民を改宗せしめんとす。派遣されし使徒は、先づケルンに至る。此使徒に従うて、教を受くるものアンノーと共に、三十三人ありき。ハインリヒ王は、使徒の盛徳を傳へ聞き、威儀堂々百官を隨へて、ケルンに至り、歡呼を以て迎へられたり。僧正アンノーは、人々を遇するに、人の意表に出て、以て己を「賢者の父」と呼ばしめんとせり。即ち彼は、侯伯列座の前を過ぐる時は、少しも憚る事なく、獅子の群獸の前を歩するが如く、之に反して、民衆の面前に立つ時は、恐懼、從順なること狼の前に於ける羊の如くなりき。群衆中に、病める一婦人の子供を伴へるものあり、されど何人も、之を助けんとせず。ざるに、アンノーは、自ら赴いて、丁寧に婦人及び子供に挨拶し、以て盛徳の君子たることを公衆に示せり。されば、アンノーは、國人の尊敬を受け、神の如



く考へられたり、されどアンノーは、國中擾亂して治まらざるは己の徳望の足らざるなりと思ひ、此世を厭ふの念を起せり、或日車に乗りて、テューリングゲンのセーワルドに赴かんとする途中遽かに天開き、神は信仰あるものを助くと告げ玉へり、此間アンノーは、車上にありて、一心に祈禱せしが、神意彼に通じ、忽ち非常なる力と、未來を豫知するの才を得たり、彼は、此時深く感動せり、其後何となく身軀衰弱し始めしが、或夜夢に天上の帝王の宮殿に赴けり、他の僧正は、悉く椅子に座せり、アンノー一人は、胸の上の汚點を取り去る迄は、座に就く能はざるなり、かく夢み、覺めて後、アンノーは、始めて前夜の夢に於ける胸上の汚點とは、何の意なるかを察し、厭忌せしケルン人に再び恩恵を施せり、其後間もなく、彼は天國に行けり。

2. Kaiserchronik.

二、「カイゼルクロニク」此詩は、千百四十七年頃の僧侶の作にして、一萬八千五百七十八句より成れり、内容は前詩と殆んど異なる所なく、獨逸の歴史を飾るに、羅馬市の建設及び羅馬帝王に關する物語を以て

3. Alexanderlied.

せり。

三、「アレキサンデルリード」此詩の作家は、舊教の僧ランプレヒトなり、詩形は對韻にして、アレキサンデル大帝の生涯を歌ひたるものなり、十二世紀前半に出づ。

アレキサンデル大帝の事蹟は、當時詩歌の好題目となれり、當時の武者及び十字軍の騎士は、此世界征服家を理想的人物として、之に模倣せんことを努めたり。

梗概、大帝は、波斯王ダリウスの大軍を撃ち破りて後、軍隊を率ゐて一日森に入れり、此森は、樹木密に生ひ茂りて、晝尚ほ暗く、日光も通ぜざるに、玉音を弄する歌聲は、森の中より響けり、木の下影には、美しき花咲き亂れ、緑の草生ひ榮へ、清き泉は密樹の間より湧き出でたり、大帝及び部下の將士は、闇黒の中にかゝる不思議なるものを發見して、甚だ驚けり、美しき歌ひ聲に誘はれて、彼等は、泉をたどり、尙も深く森林に入り込み、幾千萬とも數知れぬ少女は、清泉の傍に座し、首宿の葉を持ちて、樂

第三編 中世文學の概観 十字軍の始り 宗教改革 千百年より千五  
百年迄の十字軍時代の中南歐詩歌の概観 千百年より千三百年迄  
第二章 新詩歌の萌芽 六五



を奏せり、歌ひ且つ舞ひて、樂しげに遊び戯むる、少女の群を見ては、世界を併合せんとの大望を抱ける大帝も、恍惚として、酔へるが如く、満々たる覇氣は、何時しか消え失せたり。

此森に於て、大帝及び軍隊は、美しき少女と共に夏を過ごせり。秋風一たび吹いて、木葉凋落し、泉の流絶へ、鳥は歌はず、花は枯れ、歡樂盡きて、少女は其隻影をだに止めざるに至れり。茲に於て、大帝は軍隊を率ゐて、森を出て、諸處を遍歴して、遂に極樂の門に達す。一老人出て來り、手づから一奇石を大帝に與へ、且つ告げて曰はく、大帝は、此地を去れ、其去らざるべからざる所以は、此石によりて、知ることを得べしと。大帝は、全世界を蹂躙せんとして、向ふ所敵なかりしも、極樂の門へは、入ることを得ず、止むなく、軍を率ゐて、本國に歸り、賢者を集めて、携へ歸りし石を示して、之を判斷せしむ。されど一人として、之を判ずるものなし。一猶太人あり、大王の前に、進み出て、曰はく、此石は、高慢の塊なり、極樂の門は、力及び慾を以てしては、到底開く可からず。されど清淨無慾なる者に對しては、此

4. Rolandslied.

門自ら開く可しと。大王は、此言を聞いて、深く感動し、前非を悔ひて、改心し、大に謹慎謙讓の徳を養ひ、國を治めたりと云ふ。

此詩は佛國の詩を、改作せしものなれど、戦争の勇壯なる叙述は、獨逸在來の勇者物語の詩に類せり。デイメルの著「十一世紀十二世紀獨逸詩歌」には、此詩を詳述せり。

四、「ローランヅリード」此詩は、千百三十年ハインリヒ、デル、ストルツ侯爵夫人の需に應じ、僧コンラードが、佛の詩「シャンソン、デイユ、ローラ」に倣ひて、作りたるなり、梗概を擧ぐれば、

カール大帝は、神の命を奉じ、軍を率ゐて、十二人の侯伯「ローランド、オリカール、ツルビン等」と共に、當時西班牙を領せし異教徒サラセン人を征伐したり。其目的は、國土を侵畧し、國民を殺戮するに非ずして、人民を耶蘇教に改宗せしむるにありき。大王の軍進んで、ザラゴツサに至る。マルジリー王は、自ら進んで、洗禮を受く可しとて、媾和を求めたり。大王は、尙ほ其言を信ずる能はず、眞意を探らんが爲め、使者を送れり。大王は、此

第三編 中世獨逸詩時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 第二章 新詩歌の萌芽 六七



使者を選定するに際して、甥ローランドに譲れり、而して、ローランドの繼父ゲテルンを送れり。ゲテルンに従ふ武者七百人なりき。ゲテルンは命を受けて、謂へらく、此度の使命は、身命を賭せざる可からず、多くは生還を期し難し、恐らくは、これ養子ローランドの奸策にして、己を死地に苦め、早く家を相續せんと、の計なりと。ゲテルンは、憤怒の餘り、ローランドに、怨を報せんと企てたり。ゲテルンは、マルジリー王の許に至り、王に謁して、來意を告げ、遂に王を説服して、表面上降参せしめ、偽の使者を送りて、大帝の軍を退かしめ、且つ大帝に告げて、若干の守備兵を残し、ローランドをして、守備兵を監督せしむ。大帝の軍、西班牙を去るや否や、ローランドは、繼父ゲテルンの術に陥り、ロンヌワールの谷に於て、異教徒の大軍に追ひ攻められ、衆寡敵せず、全軍塵殺されんとす。依つて、角笛オワフアントを吹き鳴らして、大帝を呼び歸へし。救を乞はんとせり。大帝は、角笛を聞き、打ち驚き、急ぎ軍を率ゐて、來り救はんとせしも、時已に遅し。ローランドは、忠實なる將士と共に斃れたりき。ローランド死に臨んで、

佩劍デュランダルトを抜き、敵に奪はれんを恐れて、岩にて打ち砕かんとせしも、鍛錬せし名刀は、決して碎けず。茲に於て、ローランドも、今は力なく、之を地上に横へ、右の手袋を脱ぎ、神に祈りて、之を天に捧ぐ。天使來りて、之を受け取れり。大帝は、勇士が、枕を並べて、戦死せるを見て、悲憤に堪へず、血涙を垂れて泣き悲めり。其座せし石は、今も尙ほ涙痕乾かずと云ふ。マルジリー王は大軍を以て、大帝の軍を逃へ撃ちしも、天より光輝き、異教徒の軍勢は、眩暈して、戦ふ能はず。遂に撃ち破らる。王は失望の餘りに、遂に死せり。王后プレヒムンダは、勝利者に門を開いて降り、洗禮を受けたり。大帝は、反問者ゲテルンを、本國に伴ひ歸り、裁判に於て、大逆無道と宣告し、猛獸をして、其肺を引き裂かしむ。

此詩は、カール大帝物語中の一部に屬し、大帝を耶蘇教の保護者として、其功勳を歌ひたるものなり。西班牙に於ける大帝の軍と、マルジリーの軍との戦は、耶蘇教徒と異教徒との闘争に外ならず。耶蘇の十二人の使徒中一人の猶太人ありしと全じく、大帝の十二人の勇士中に、反問者



ゲチルンあり、これ大帝の事蹟を潤飾するに、聖史の事實を以てしたるなり。此詩を始めて獨逸に翻譯せしは、エドアルド、オットマンなり。キルヘルム、グリムは、千八百三十八年に、此詩を出版せり。フェルディナンド、ベスレルは、其著「中古勇者物語詩」中に、此詩を詳述せり。

五、「ケーニヒ、ローテル。」所謂遍歴歌人の作なり。此作者は、千百四十七年の十字軍に従軍し、伊太利、コンスタンティノール等を目撃せるものゝ如し。此詩は、イスラントの古詩「キルティナザーグ」を土臺として、之を點綴するに、中古の物詩を以てせるなり。左に梗概を擧げん。

アブーリエン國のバリに都せるローテル王は、羅馬皇帝コンスタンティンの王女美なりと聞き、迎へて、妻となさんと欲すれども能はず。依つて遠く、河を渡りて、十二人の勇士を送り、王女を奪ひ取らしめんとす。勇士は、コンスタンティノールに赴きしも、守備嚴重にして、近づく能はず。其間に、密計露顯して、皆捕はれて、牢獄に繋がる。ローテルは、茲に於て、變名し、自からコンスタンティンの許に至り、ローテル王に罪を得んことを

恐れて、逃げ來れりとして帝を欺けり、かくして、勇士を救ひ、且つ奇計を以て、王女を誘ひ出して本國に伴ひ歸れり。然るに、コンスタンティン帝は、人を送り、王女を一の舟に隠し、再びコンスタンティノールに連れ來れり。茲に於て、ローテルは、大軍を率ゐて來り、都市を屠り、帝に迫つて、王女を取り戻せり。

六、「ヘルツォグ、エルンスト。」バイエルン公の寡婦アーデルハイドは、獨逸帝オットーより、後妻となさんとの要求を受く、依つて、其子息エルンストを、旅中より呼び返へし、如何にすべきかを相談せり。アーデルハイドは、エルンストの全意を得て、遂に婚を結ぶ。繼父オットーは、始めエルンストを優遇し、嗣子となさんとせり。されどエルンストの妹の子、ハインリヒの讒言により、帝と隙を生じ、帝は漸くエルンストを疎んじ、遂にハインリヒをして、バイエルン侯國を繼承せしむ。エルンストは、大に怒り、エツェル伯と共に、ハインリヒの居城ニルンベルクを攻めて、遂にハインリヒを追ひ拂へり。其後國內擾亂して、五年の久しき間平定せず。エルン



ストは、難の已に及ばん事を恐れ、身を寄するに所なく、エツェルと共に、聖墓に詣てんと決心し、千餘の騎士を随へて、パレストーナに向へり、途中匈牙利、ブルガリアを過ぎ、コンスタンテノールに出で、二十二艘の船に乗り込み、これより、エルンストの冒險談始まる。此冒險談は、ホメールの叙事詩「オヂセイ」に類似せるものなり。港を出帆して、五日目に大風起り、十二艘の船は沈没し、残りの船は、諸方に吹き流されたり。エルンストとエツェルとは、二ヶ月間漂流し、キブリア國に著せり。彼等は、此國に上陸せしが、寂寞無人の郷なり。されど城市は、華美にして、廣堂王宮等建造の美、人目を驚かせり。食堂に入れば、山海の珍味食卓の上に連れり。彼等は、人なきを幸に、葡萄酒を飲み、美肉を食ひ、銀管にて水を注げる金槽の湯に浴せり。かくして、勝手に遊びつゝある時、突然凄まじき叫聲起れり。其響恰かも、無数の鶴群一時に飛び來れるが如し。二人は、驚いて外を眺めたるに、鶴の如き首を持てる強大なる人の一群が、尺餘の嘴を差し延べて、白絹の衣を纏ひ、中央に印度の皇女を取り圍みつゝ、進み來れり。皇女

は、餘まりの恐ろしさに、泣く事さへ出來ず、露を帯びたる薔薇の花の如く、潸然涙を垂るゝのみ。先きに聞えし叫聲は、此巨人の王が、長き嘴を出して、皇女の小さき口に寄せ、やさしき情話をなしたるなりき。エルンストは、皇女を救はんと欲し、巨人と激しき戰爭をなし、而して部下五百人を失へり。かくて奮戦せしも、皇女は、遂に嘴にて刺し殺されしを以て、救ふ能はざりき。エルンストは、此國を去りて、諸方を彷徨せり。磁石山に至りて、鐵具は、悉く引き附けられ、或は打碎かれ、部下生き残れるもの僅かに七人となれり。エルンストは、漸くにして、此山を出で、カールフンケルベルグを過ぎ、寶石を發見し、獨帝の帝冠を飾らんとて持ち歸る。遂にアリマンペンと稱する一目人種の國に至り、又足の底平らかにして、湖沼を自由に渡ることを得る人種と取ひ、巨人族矮人族を討ちて、此等を敗り、最後に聖墓に達す。エルンストは、十數年間國を出で、茲に芽出度耶蘇降誕祭の夕、故國の都に歸著せり。帝は喜んで、之を迎へ、帝位を譲り、エツェルを



の如く、國に封じたり傳へ云ふ、今日獨帝の帝冠に輝く寶石は、エルンストが、カールフンケルベルグより持ち來れるなりと。

七、「ラインハルト、フックス。」此詩は、エルザスの詩人ハインリヒ、デルグリヒ、ゼーレの作なり。これ獨逸動物物語詩の端緒なり。佛詩を模倣せしものにて、狼狐等に關する十物語より成れり。千百七十年頃に出でたるものなり。

八、「ローブゲデ、ヒト。」此詩はもと、聖母の讚美歌と稱すれど、原語ゆりに長きに失するを以て、簡單に「ローブゲデ、ヒト」と名づく。僧侶エルンヘルが羅句詩に倣ひて、千百七十二年頃作りしものなり。聖母マリアの徳を讚美したるものなりとす。

第三章 武士的詩歌と民間詩歌との關係

十世紀十一世紀に於て、夥多の詩歌出でしも、詩形韻律共に單純粗野なるものなりき。然るに十二世紀以後、從來の詩歌は、舊態を一新して、非常なる發達をなせり。これ主として、外國文學の影響なりとす。外國文學

中獨逸詩歌に最も影響を及ぼせしは、羅馬及び中古羅句詩歌と、北佛蘭西の詩文學なりとす。されど中南獨逸語時代の詩歌は、獨り外國文學の模倣によつてのみ、發達せしにあらざして、既に早くより漸次進歩の域に達しつゝありしなり。當時俗間に行はるゝ詩歌は、樂器に伴ひて歌はれ、人民の詩歌の技術を學ばんとするもの多く、詩歌修業は、一種の職業と見做されたり。少壯なる熱心家は、老練なる詩人に就いて、詩歌學の教授を受け、又音樂師に就いて、音樂を學べり。かの抒情詩家中最も著名なるワルテル、フォン、デル、フォーゲルワイデの如きは、詩學及び音樂の教授を受けたりと云ふ。

當時多くの詩人中には、讀書寫字を知らず、詩の法則を示さるゝも、自ら讀む能はざるものありき。有名なるワルフラムの如き詩人すら、文字を寫する能はざりしと云ふ。されば詩歌は、主として暗誦によりて、口々に傳へられたり。

さて師弟の關係は、十二世紀中葉頃の僧侶詩人に就いては、詳言する

第三編

中南獨逸語時代の文學(十字軍の始り宗教改革迄。千百年より千五百年迄) 十字軍時代の中南獨逸語時代の文學(十字軍の始り宗教改革迄。千百年より千五百年迄) 第三章 武士的詩歌と民間詩歌との關係



こと難しと雖も、少壯なるものが、経験ある詩人を求めて、之に師事せしことは、明かなる事實なりとす。

當時代には、詩歌を職業とせずして、一箇の娛樂として學びたるものもありき。此等の人は、詩歌を嗜める僧侶に就いて、修業したり。詩歌學盛大に赴き、遂に私塾發達して、詩歌學校起るに至れり。十三世紀の始頃は、ヘルマン、フォン、テューリングン伯が、詩人を保護すと聞き、遠近より武士及び民間詩人多く、其宮廷に集まれり。其他當時の侯伯は、大に風流韻事に嗜好を有する人多く、競うて文士を養ひ、以て互に其數の多きに誇れり。されば、各侯伯の官廷には、夥多の詩社起れり。此詩社に於ては、武士が武藝を闘はす如く、盛に詩歌の技を競ひ、我が奈良平安朝に於ける歌合の如きものをなせり。後には、此等夥多の詩社合併して、一の大なる詩社となれり。

詩社には、始め儀式法則なかりしが、武士的詩歌が漸次市民の手に移りては、秩序ある學校起るに至れり。十四世紀の始に於て、マインツの歌

人ハインリッヒ、フォン、マイセンは、詩歌學校を創立せり。

當時詩人は、自家に少年を養ひ、學僕となせり。學僕となる時は、詩人は、一の詩を與へたり。此詩は、固く封ぜられ、師弟の約束の證書として、長く保存されたり。又詩人は、學僕に歌を書きたる楯を與へ、以て古代詩社の武士的精神を追想せしめたり。これ入門の儀式にして、敢て怪むに足らずと雖も、茲に最も奇妙なる習慣あり。詩人は、學僕を戀人の許に遣はし、教へ置きたる歌を歌はしめ、以て己の意を通じ、艶書に代用したり。詩社には、頭領あり、始め頭領は、詩歌の術に長じたるものとして、尊敬されしに過ぎざりしも、後には、詩社の長と仰がれ、教師として尊敬を受くるに至れり。詩社夥多出で、頭領輩出して、遂には頭領詩人出づるに至り、皇帝オットー一世、法王レオ八世の時代には、頭領詩人の作、別に頭領詩歌の名を以て現はれたり。

双方詩人生活の一般は、上説の如し。以下兩者の關係に就いて、少しく述べんとす。武士的詩歌と民間詩歌との著るしき區別は、詩形、韻律及び

### 第三編

中兩國遠征時代の文學、十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。十字軍時代の中南國遠征の歴史。千百年より千三百年迄。武士的詩歌と民間詩歌との關係。



詞章に於てよりは、寧ろ詩の題目及び内容に於て存するが如し、武士的詩歌は外國に起りたる事實、主として新奇、華美、空想的なる題目を撰び、箇人的の觀察及び思想即ち主觀的の心情及び情緒を描がき、當時上等社會に行はれ、殊に武士道の涵養を受けて發達せし精神、觀念、意向を寫せり。民間詩歌は、之に反して、其材料は、自國古代の勇者物語にして、叙述法は、民俗的、自然的なりき、殊に叙事詩に於て然りとす、されど抒情詩に於ても、同様の傾向ありたり。韻律も、民間詩歌は漸次單純より複雑となりしも、武士的詩歌に比すれば、巧妙を缺きたるが如し。

双方詩歌の最も完全なるものを取りて、其語辭及び詩體を比較する時は、一の區別を認むるなり。武士的詩歌に於ては、用語制限され、一定の規律を守らざる可からず、されど民間詩歌には、かゝる拘束なく、自由なりき、されど双方の懸隔は、甚だ大なりと云ふ可からず、民間詩人も、其詩才を揮ふに及んでは、古を棄て、新を用ゐ、流麗なる聲調を以て、歌詞を飾るに至りたり。

最後に双方詩人が、一般社會に對し、及び各自相互に如何なる關係ありしやを云はん。武士的詩人は、教育ある高貴の人と交際し、民間詩人は民間に於ける詩人の群に入りて、大に尊敬を受けたり。依つて前者は、上等社會に交はり、後者は中以下の社會にもてはやされたり。單に此事實のみを以て判斷する時は、武士的詩人は、民間詩人を、思想庸劣なるものとして、度外視したるが如しと雖も、決して然らず、兩者は、互に來往して、詩歌に關する議論を上下せり。されば兩者は、互に孤立したるに非ずして、却つて親密なる交際をなせり。其相隔離せざりし事は、兩者の作を對照する時は、容易に知ることを得るなり。兩者の關係に就いては、尙云ふ可きこと多からんも、今は只大略について述ぶるのみ。

#### 第四章 ニーベルングンの歌。

民間叙事詩の最大傑作ニーベルングンの歌は、十三世紀の始に出づ。此詩は、内容によつて、二篇に分かつ。第一篇は、ジーンリートの最後にして、第二篇はクリームヒルデの復讐なり。

#### 第三編

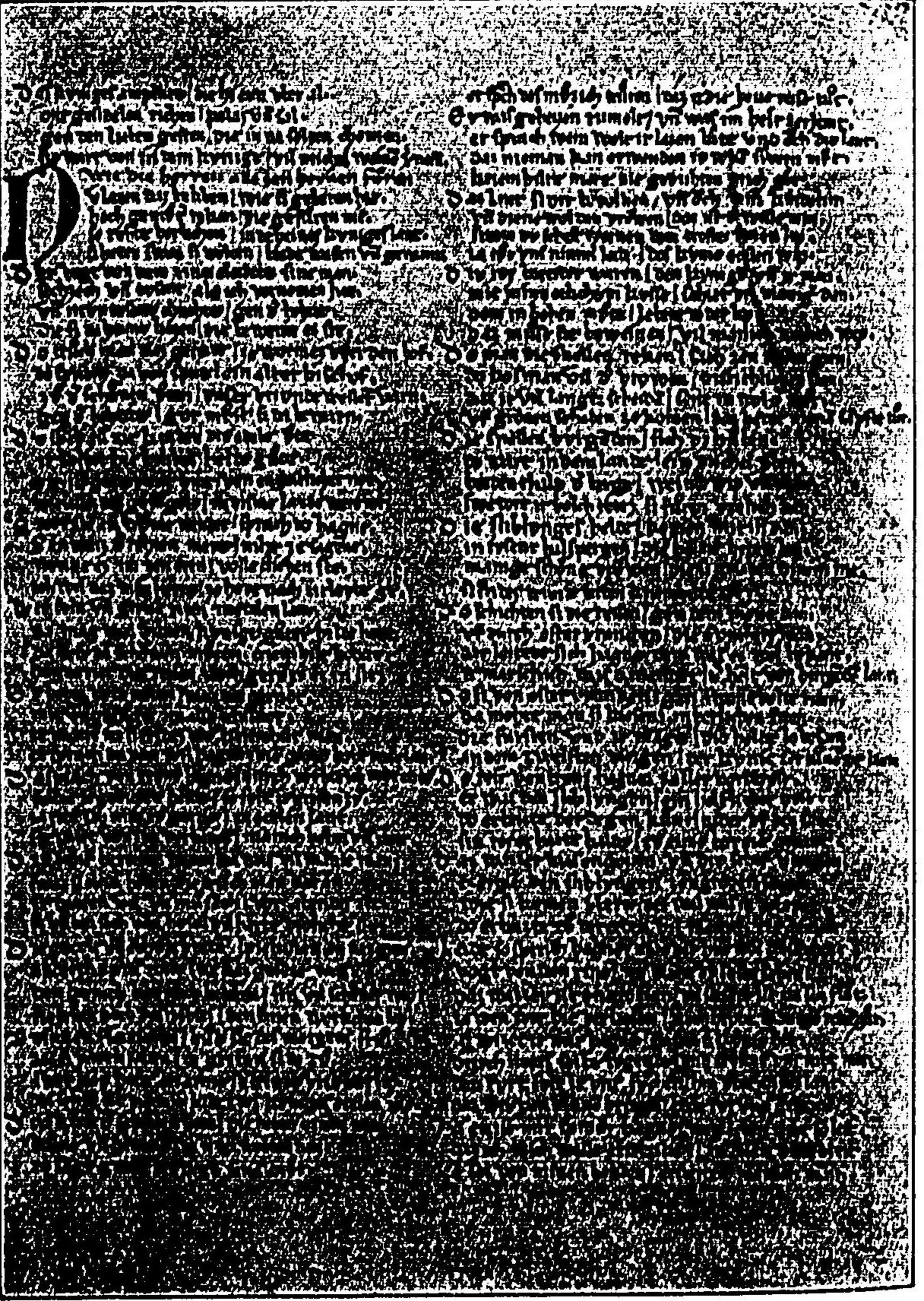
中南國邊野時代の文學（十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄）  
 第四編 十字軍時代の中南國邊野時代の文學（十字軍の終りより千五百年迄）  
 第四章 ニーベルングンの歌。



梗概 第一篇ジークフリートの最後。ブルグンド國王グンテルは二人の兄弟ゲルノリト及びギゼルヘルと共に、首府アルムスに住せり、而して王の左右には、功名心に富めるハーゲン、フン、ツロンエー及びフルケル、フン、アルツァイの二人ありき。

さて王城には、王の妹なる絶世の美人クリムヒルデあり、父王は、居世せしかば、母后ウテに養育され、兄弟の保護を受けたり、花にも譬ふ可き此王女は、容色の美なるが爲め、却つて此世を幸福に送ること能はざるなり、或夜王女は、自から心を盡くして、飼養せし鷹を、三つの大なる鷲來りて、鋭き爪をもて、絞め殺るすと夢む、此不吉なる夢は、王女に取りて恐ろしき前兆なりき。

當時下ライン地方のクサンテンを領せしジークムンド王と、王后ジグリンデとの間に、王子ジークフリードありき、此王子は、早くよりクリムヒルデに思を寄せしが、遂に意を決し、盛装せる従者を伴ひて、アルムスに赴けり、ジークフリードは、昔てニーベルングの種族を討ち亡



第一の『英雄』ヘンリヒ・フォン・マインヘイムの『ニベルンゲン』







ぼし、此國の珍寶を奪ひ取り、且つ侏儒アルペリヒより隠れ鏡を奪ひ、而して身軀には、大蛇の血を塗りて、兩肩間の一箇所を除いては、如何なる利劍を以てしても、負傷することなかりき。此事早くも、慧眼なるハーゲンによつて看破されたり。

ラルムスに至るや、王子は、有力なる武士として、大に歓迎を受けたり。而して一年の久しき間、此地に滞在せしが、遂にクリームヒルデを見る能はざりき。王子は、日々機会を待ちつゝありしが、グンテル王の戦友として、軍に赴き、ザクセン、デーチンの諸王を討ち敗れり。此凱旋の祝宴會に於て、始めて王子は、クリームヒルデと相會せり。

さて此頃、イーゼンランドに、ブルンヒルデと云ふ王女ありき。美貌類なきの故を以て、婚を求むるもの頗る多かりき。されど此王女は力飽迄強くして、求婚者ある毎に、投鎗、投石、飛躍等の競技をなせり。而して此勝負に負けしものは、即座に殺されしを以て、多くの求婚者中、未だ嘗て成功せしものあらざりき。



此報一たびアルムスに傳はるや、グンテル王は、此王女を己が物とせんと思ひ、ジীগフリードに助力を乞ふ。ジীগフリードは、事成らば、クリムヒルデを娶るの約を以て、王の依頼に應じたり。グンテル王は、直にジীগフリードと共にイーゼンランドに赴けり。ジীগフリードは、ブルンヒルデと嘗て相知りしかば、發覺されんことを恐れて、姿をかへ、グンテル王の従者の如く装へり。グンテル王が、ブルンヒルデに、來意を告ぐるや、例によつて競技をなすこととなれり。競技始まりし時、ジীগフリードは、隠れ蓑を被りて、グルテル王の側に侍し、ブルンヒルデと争ひ終に勝てり。ジীগフリードは、歸途ニールンゲン國に立寄りたる後、アルムスに歸れり。

アルムスに於ては、宿望を遂げし二王が、盛大なる華燭の典を擧げたり。さるにブルンヒルデは、元來ジীগフリードに意ありしかば、クリムヒルデが、ジীগフリードと相親めるを見て、心中穩かならざりき。此二王の結婚は、悲劇の原因となり、嫉妬、怨恨相集まつて、二王は、恐ろしき

最後を遂ぐるに至れり。

ジীগフリードは、クリムヒルデと結婚し、一旦故國に歸り、父王に代つて政を執り、夫婦の間睦まじく十年を過ぎたり。然るにグンテル王は、ジীগフリード王及び王后を、父王ジীগムンドと共に、再びアルムスに招けり。アルムスに於ては、彼等を國賓として饗應し、盛大なる宴會ありしが、賓客接待の餘興として、勝負事の遊戯を演じたり。此遊戯には、グンテル王及びジীগフリード王も加はれり。遊戯を觀覽せし二女后は、各夫王の技術を賞めんとして、圖らずも口論を起せり。怒りたるクリムヒルデは、嫉妬の餘り、ブルンヒルデが、グンテル王に意なくして、却てジীগフリードを慕へるなりと公言せり。ブルンヒルデも、茲に於て侮辱を忍ぶ能はず、深くクリムヒルデを怨みしが、グンテルの臣ハーゲンと語らひ、ジীগフリードを殺ろし、以てクリムヒルデに怨を報ぜん。と決せり。グンテル王は、此密計を聞いて、始は逆ひしも、遂に最愛なるブルンヒルデの甘言に欺かれて、之に全意せり。陰謀に富めるハーゲ



ンは、クリームヒルデを欺きて、ジークフリード王の身軀中唯一の負傷す可き箇所あることを聞き、ザクセン征討の軍中彼を保護せん爲めに赤き十字を衣につけ、目印とせよと告げたり。依つてクリームヒルデは其言を信じて之に従へり。

クリームヒルデは、其夜再び二つの山落ち來り、ジークフリードは、其山崩れの中に埋没されると夢みて、深く心を惱ませり。直にジークフリードに事の由を告げて、從軍を止めしめんとせしも、勇氣に勝れるジークフリードは、其言を聞きてあざ笑ひ、少しも意とせざりき。神ならぬ彼は、己が運命の旦夕に迫れるを知らざりき。出陣に際してのジークフリードと、クリームヒルデとの別離は、實に悲哀の極なり。

出征の準備調へる時、オーデンワルドといへる森に於て、狩をなせりこれハークンの悪計にして、彼は始めよりザクセンを征せんの意はなかりしも、かくして、ジークフリードを欺き、且つクリームヒルデをして、夫の急所を配さしめんとしたるなりき。ジークフリードは、深く山に分

け入りて、從者と分かれ、谷に下り、湯をいやさんとして、湧き出づる泉を掬ばんとせり。此時始めより追跡し來れるハークンは、ジークフリードの脊の赤十字を目がけて、鎗を投げて刺し殺るせり。死體は、夜に乗じてクリームヒルデの部屋の前に持ち來りて横へたり。此を見たるクリームヒルデの悲歎こそ、察するに餘りあれ。これにて、第一篇終る。

第二篇、クリームヒルデの復讐。クリームヒルデは、夫の悲惨なる最後を見て、精神忽ち狂亂せり。忿怒の念抑へ難く、終生の怨を、ハークンに報ぜんとす。父王、ジークムンドは、變事後間もなく、ラルムスを去れり。されどクリームヒルデは、獨留まりて、日夜復讐を企てたり。二人の兄弟は、妹を慰めんとして、ジークフリードが、妻にとて残し置きし、ニーベルンゲンの寶物を、ラルムスに持ち來らしむ。ざるにクリームヒルデは、此貴重なる寶物を、少しづつ、貧民に分かち與へたり。ハークンは、之を見て、心穩かならず、かく貧民に寶物を與ふるは、復讐せんが爲め、徒黨を集めんとするなりと考へ、其寶物を奪ひて、ライン川に沈め、以て後日の厄難を



免かれんとしたり。クリムヒルデは再度の恥辱を受け、如何にもして怨を報ぜんと思へど、女の方途方なく、早や十三年を過ぎぬ。

匈奴王エツツェルは、后ヘルヒエを失ひ、後妻を求めんとし得ず、遂にリューディゲル、フオン、ベッヒラルン伯を介して、クリムヒルデに其意を告げしむ。クリムヒルデは、悲歎に沈める折柄、夷の王の后となり、榮華の夢を食らんとは、露思はされど、エツツェルの力を借りて、積年の怨を報ぜんと考へ、其要求を承諾したり。リューディゲルと共に、多くの従者を伴ひ、當時匈奴王の居城キーンに向へり、而して此處にて、結婚の式を擧ぐ、キーンより、舟に乗り、ドナウ川を下り、エツツェンブルグに到着せり。此處に住すること十三年、エツツェルの寵を受け、群臣に敬愛されたり。老かも復讐の念は、一日も止まず、日を経るに従つて、益強くなれり。

或時クリムヒルデは、王に勧め、其兄弟親戚及びハーゲンを招いて、饗應せんとせしが、此時母ウテは、悪夢に驚かされたり。クリムヒルデは、母の忠言を用ゐずして、宴會を開けり。ハーゲンは、危難の身に及ぶと

知りながら、臆することなく、此會に臨めり。招かれし一行ドナウ川を下る時、二人の海女現はれて、船中の人は生還するを得ずと告ぐ。其他數多の難を冒して、遂に船はベッヒラルンに到着せり。一行はリューディゲル伯夫妻の優遇を受け、伯の娘ディーテリンデは、ギーゼルヘルの風姿を見て、戀情禁ずる能はず。結婚の約束をなせり。又ゲルノートは、名劍を得たり。さて此劍こそ、後にリューディゲルの頭上に加へらるゝものなりけれ。

ハーゲンは、來らんとする禍を慮りて、フルケルと生死を共にせんことを誓へり。而して替て奪ひ取りしジグフリードの劍ハルムシグを帯びて、饗宴に臨めり。彼の意蓋し之を以てクリムヒルデを徒らせしめんとしたるなり。ハーゲンは、又手づからクリムヒルデの年若き王子を殺せり。茲に於てクリムヒルデは、憤怨一時に發して、狂亂し、魔女の如くなれり。

匈奴と、ブルグンド人との一騎打の闘争始まり、多くの人殺さる。リューディゲル及びゲルノートも相闘うて、遂に斃る。今迄夥多の人と立ち合ひ

## 第三編

中南國遠征時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄)十字軍時代の中南國遠征歌の隆興。千百年より千三百年迄。

## 第四章

ニーヘルンゲンの歌。



て不覺を取らざりし、ディートリッヒ、フオン、ベルンは、勝ち誇れるグンテル王及びハーゲンを生捕りて、クリームヒルデの面前に連れ來れり。クリームヒルデは、ニーベルングンの寶物の所在を教へなば、ハーゲンの命を救はんとす。されどハーゲンは、ブルグンド王族一人にても、生き残れる間は、寶物の隠くし場所を教へずとの誓を立てたりとの口實を以て之を言はず。茲に於て、クリームヒルデは、意を決し、遂に骨肉たるグンテルの首を斬らし、之を持して、ハーゲンに示せり。ハーゲンは、猶逡巡して答へず。依つて、クリームヒルデは、亡夫ジークフリートの劍を以て、ハーゲンを殺せり。

クリームヒルデは、夫の仇を討ち、積年の怨を報ぜり。されど母后ウテが、不吉の夢は、虚ならずして、クリームヒルデは、遂に死の運命を免がるゝ能はざりき。即ちクリームヒルデは、ディートリッヒが兩人の勇士に誓ひたる平和を破れるの故を以て、遂に老いたるヒルデブランドの刃にかゝりて死す。

かく多くの勇者死せしも、エッツェル王、ディートリッヒ王及びヒルデブランドは、無事に生き残り、而して痛く諸勇者及び諸王の死を悲めり。

此悲を敍して、此詩に附加したる詩を、其内容に基づき、「クラーゲ」悲歎の意と名づく。

詩中人物の性格、先づ男主人公ジークフリードは、容貌秀麗にして力逞ましく、大膽にして、勇敢の氣象に富み、然かも人物高潔にして、克己の念強し。されば謀反人の術に陥つて、遂に其犠牲となるも、之を知らず、死に至る迄謀殺者を怨むことなし。

クリームヒルデは、第一篇に於て、温順にして柔和、且つ愛嬌ある少女の如く、又愛らしき妻の如し。然るに第二篇に於ては、全く別物の如く、思想、感情共に一變して、魔女の如し、王后の性格は、更に認むること能はず、只恐ろしき狂奔せる復讐者の如し。

ハーゲンは、殘忍、大膽、剛愎なる當時の武士の標本なり、而してグンテルの部下中、經驗に富み、且つ才幹並びなく、言語に訥にして、行に敏なり。

## 第三編

中南國遷葬時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。十字軍時代の中南國遷葬歌の隆興。千百年より千三百年迄。)

## 第四章 ニーベルングンの歌



さればジークフリートを暗殺し、残酷なる暴行を以て、クリームヒルデを苦め、運命免かれ難きを見ては、驚かず恐れず、自ら進んで死に就けり。グンテルは、外觀高慢なれど、内心頗る温和なり。獨立して事をなす能はず、助勢を他に求むるなくしては、大事を企つるの勇なし。

フォルケルは、獨り戦場の勇者に非ずして、糸竹の道に長ず、風流なる武士なり。

ディートリッヒ、フォン、ベルンは、獨逸武士の好模型なり。深謀遠慮事に處して、容易に手を下さず。されど一旦機を見ては、之を逸せず、大事業を遂行するの勇あり。

ヒルデブンドは、矍鑠たる老将なり。老いて益壯、經驗あり、才畧あり。

リューティゲルは、本詩中最も著目す可き人物なり。ハーゲンは、異教的勇者の俤を存し、之に反して、リューティゲルは、耶穌教的勇者の性格を有す。即ち武士の美德を備へ、節義を重んじ、廉恥を尊び、賓客を遇すること、最も巧なり。彼が悲劇的最後は、總ての勇者をして悲ましめ、ブルグンドの猛

き武夫も、彼の死を見ては、落涙鎧の袖を濡せり。

「ニーベルングンの歌」一篇中には、多趣多様の人物現はれ、獨逸國民の性格は、自から此等の人物に反映せり。高慢心、堅忍なる勇氣、死を見て恐れざること、人情に厚きこと等は、獨逸國民の特色なり。此詩に一貫せる道徳的理想は、信實なり。例へば君臣の信、グンテルとハーゲン、夫婦の愛（ジークフリードとクリームヒルデ）、朋友の信（フォルケルとハーゲン）及び兄弟の信（ケルノットとギゼルヘル）之れなり。

クリームヒルデは、夫の愛の爲めに、兄弟の友情を忘れ、慈悲深き心は失せて、魔女の如くなれり。夫の爲めに、仇を報ひんとて、ブルグンド全族を滅亡せしめたり。此詩に於て、信實は、絶對の權力を有するものとして、總ての拘束を打破せり。信實は、種々なる形式となつて、互に衝突し、悲劇の大破綻を惹起せり。リューティゲルは、君に忠を盡さんが爲め、朋友の信義を破り、ハーゲンは、單にクリームヒルデに對する行を以て見る時は、殘忍、酷薄なる大悪人なり。されどブルグンド王家に對しては、他迄信實を

## 第三編

中南國邊野時代の文學（十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄）  
十字軍時代の中南國邊野時代の文學、千百年より千三百年迄。

## 第四章 ニーベルングンの歌



守れり。彼は死して主君に忠節を盡し、王も亦死に至る迄、彼に對して信實なり。然り若し、ハーゲンにして、此信實無かりせば、獨逸武士の人格を保つ能はざるなり。此兩立し難き信實の二方面を描かせる「ニーベルンゲン」の歌は、獨逸人の勇氣、信實、及び性情、約言すれば、獨逸國民の心性生活の反映と見る可きなり。

上述せる如く、此詩に於ける道德的理想は信實なり。されど描寫の主眼とする處は、悲哀なり。歡樂極まつて、悲哀生ずとの痛ましき眞理は、此詩を終始貫徹せるものなり。クリムヒルデが、ジークフリードと、鷲の契淺からぬ時、誰かかゝる悲劇的終局を豫想せんや。さるに人生最大の歡樂は、一場の夢と消へ、恐ろしき痛歎、憂苦は、之に代つて來る。外面やさしき、美しくしき女には、内心恐るべき嫉妬の念あり。國を傾け、身を亡ぼす基は、一に此嫉妬なり。此詩は、叙事詩なれば、人物の心情は、動作、態度、及び簡單なる語を以て客觀的に叙述さるゝと雖も、能く讀む者をして感動せしむ。女主人公クリムヒルデ及び敵役ハーゲンの性格の描寫は、

巧にして、人物躍動す。動作の統一せる事も、亦此詩の長所なり。詩人は、女主人公の三情緒、戀愛、悲哀、及び復讐を描がくことを努め、其他に起る可き事柄を悉く此三情緒に復歸せしめんとせり。概して云はゞ詩全體の結構、人物の描寫は、此詩の最も長所なり。此詩には、餘り多くの人物出て、従つて事實上の矛盾を免かれず、且つ材料の選擇煩雜にして、諸所に不明の點あり。又半ば異教的の物語を、武士的耶蘇教的の潤飾をなし、却て其短所を露はすが如し。されど高尚なる道德的精神に充ちたる叙述と、全篇をして悲哀ならしむる動作の巧なる描寫は、其欠を補うて餘りあるなり。

詩材、此詩は、遠く人民移轉時代に發展せしフランク、ブルグンド、東ゴート及び匈奴の四種族の古勇者物語に基けり。而して人民移轉時代のゲルマン異教の原素と、ゲルマン古代の神話の原素と相混ぜり。抑ニ「ヘルンゲン」とは「死の國」の意なり。此國の住民は無論死人にして「闇黒」の子孫なり。此住民は、黄金を有せり。傳へ云ふ何人にてても、此黄金を得る



ときは、忽ち「死の國」の住民となると、ジグフリード一たび此寶物を得て、ハーゲンに暗殺され、寶物はブルグンド國の有となれり。然るにグンテル王を始めとして、ブルグンド全王族は、滅亡せり。アルベの君主侏儒アルベリヒは、死の國に於けるかの寶物の守護者なり。ドナツ川の海女も神秘的なり、鶴の如き羽毛生じ、水禽の如く、河上を飛揚し、未來を豫告するなり。ハーゲンは、惡神ロキの俤を存せり。ジグフリードは、身を隠くす衣を有し、又負傷せぬ皮膚を有す。古詩「エッダ」には、之に類する物語あり。「エッダ」に於けるジグルドの性格は、此詩のジグフリードに酷似し、大蛇フアニルを殺す。又オーディン神の戦女ワルキューレは、則ち此詩のブルンヒルデなり。オーディン神の催眠薬によりて、眠らせられ、火の壁に圍まる。ジグルド之を助けしが、ワルキューレに慕はれ、遂に行末親しき約を結べり。「エッダ」に於けるグールドルンは、此詩に於けるクリームヒルデと性格相似たり、而してアトリに恐ろしき復讐をなせり。

以上相對照せし如く、「エッダ」と此詩とは、人物及び性格に於て、頗る相類

する所あるなり。されど、「エッダ」は、此詩より、其叙述法鋭く、一層殘酷なり。情を抒ぶるも、極端に馳せて激烈なり。要するに「ニールンゲンの歌」は、「エッダ」中の過激なる物語を改作して、穩かなる物語となせしものなり。而して歴史的及び神話的原素に、耶蘇教的武士的原素を含めり。されば吾人は、此詩に於いて、獨逸教化發展の三時期を認むるなり。即ち第一歴史的教化、第二神話的教化、第三武士的及び耶蘇教的教化之なり。

詩の記録、「ニールンゲンの歌」は、完全なる記録として傳はるもの十種あり。其他断片は、夥多あり。就中著名なるは、三種にして、十三世紀の革紙の記録なり。其一を「ホーヘテムス、ミュンヒン記録」と云ふ。其故は、かの有名なる瑞西詩社のポードメルが、十八世紀の中葉ホーヘテム城にて發見し、千八百十年以來、ミュンヘンの博物館に保存さるゝを以て、兩地名に基づき、かく名づけたるなり。第二の記録は、「サント、ガルレン記録」と名づく。以前は、歴史家エーキディウス、チューデイが、所有せしものなり。第三は、「ホーヘテムス、ラスベレグ記録」と名づく。此記録は、もとホーヘテムス城

## 第三編

中世國運時代の文學（十字軍の始より宗教文學迄、千百年より千五百年迄）十字軍時代の中世國運時代の文學、千百年より千三百年迄。

## 第四章

ニールンゲンの歌。



にありしが、後ラス、ベルグ男爵の所有に歸し、現今ドナウエシゲン圖書館に在り。此記録によりて、ポードメルは、千七百五十七年「クリームヒルデの復讐」の題號の下に、詩の第二篇を出版せり。ハインリッヒ、ミュレルが、千七百八十二年始めて「ニーベルンゲンの歌」の全篇を出版し、名づけて「ニーベルンゲンリード」と云ふ。此名は、爾後詩全篇の題號として用ゐらる。出版後、此詩の名聲漸く高く、ハインリッヒ、フォン、デル、ハーゲンは、此詩の四種の出版をなし、註釋を附加し、以て當時の文壇に、古代の國民詩歌を紹介せり。

カール、ラッハマンに至り、此詩につき異説起れり。彼の説によれば、第一記録が最古にして、確實なるものなり。第二及び第三は、第一を増補せしものなりと。彼は、又アウグスト、ラルフが、ホメール詩の起源に關してなせし研究法を應用して、此詩は夥多の箇々獨立なる叙事詩の集録なり、而して、今日傳はれる「ニーベルンゲンの歌」は、二十の古詩より成ると云へり。又彼は、三記録中最も簡單なる第一記録二千三百十六節の中、千四

百三十七節のみが、真正のものにして、残り八百七十九節は、後に追加せしものなりと云へり。ラッハマンの死後アードルフ、ホルツマン及びフリドリッヒ、ツァルンケの二人は、「ニーベルンゲンの歌」に、新研究を開けり。此二人は、各自獨立して研究せしが、其研究の結果は、期せずして合する所あり。此説によれば、第三は最古本原の記録にして、第二は之を簡約したるものなり、而して第一は、第二を故意に節約したるものなりと、二人共に自説を發表して、此詩を出版せり。其後此詩は、多くの人によりて出版されしが、バウル、ビーベルの出版は、最近のものにして、キルシュナルの「獨逸國民文學全書」中にあり。

詩の作家、記録の眞否價值について、異論ある如く、作家に關しても、各人の説相全じからず、ハインリッヒ、フォン、オフトエルディングンは、久しき間此詩の作家を以て目せられき。されどラッハマン及其一派の人々は、前説に反對して、此詩は、一人の作に非ずして、箇々獨立せる多くの俗謡を集録せるものなり、蓋し集録者は、一人なるべしと云へり。然るに、又ホルツ

## 第三編

中南國逸詩時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄)十字軍時代の中南國逸詩歌の隆興。千百年より千三百年迄。

## 第四章

ニーベルンゲンの歌。



マン、ツァルンク及び其一派の人は、ラッハマンの説を駁して曰はく、此詩は、一詩人の作なり、何となれば、此詩は、秩序整然として統一せり、此結構上の統一は、數多の詩人の合作に於ては、到底望む可からず、依つて此統一ある以上は、此詩を一詩人の作とするが、穩當なりと、かのウィランドは、詩中の物語を、一人の手になりしとは云はざれど、詩は一人の作なりと主張せり、されど詩人が誰なるや、其名其經歷等は、容易に知る可からず、然るに又ブ、アイフェル及びバルチュは、確たる證據を擧げずと雖も、假設的の證明を以て、此詩の作家は、一人にして、キールンブルクの武士なりと云へり、其理由とする所は、此武士の作たる他の二三の戀愛歌の叙述法が、全く客觀的にして、節の構成が此詩と全一なりと云ふにあり。

詩節の構成、各節は二句づゝ韻をなせる四長句より成れり、而して各句は、一定の劃線によりて、前半後半二句に分たる、各半句は、三高音を有すれども最後の半句のみは、四高音有をす。

第五章 グードルンの歌及び其他の民間叙事詩。

1. Gudrun.

前章に述べたる「ニーベルンゲンの歌」に次いで、最も著名なるは、「グードルンの歌」なり、其著想、結構等に於て、「グードルン」が「ニーベルンゲン」の歌を模範とせるは、争ふ可からざる事實なり、此詩は千二百十年より十五年の間に成れる、埃太利詩人の傑作なり、以上二詩は、中南獨逸文學史上の二大叙事詩と稱す可きものなり。

希臘古代文學に、ホメールの二大叙事詩、「イリアス」「オディッセー」あり、而して又「マハーパラタ」及び「ラーマヤナ」は、印度叙事詩の双壁と稱せらる。製作の時代は、互に相隔つこと遠しと雖も、此等の文學は、互に相類する所あり、「ニーベルンゲンの歌」は、陸上の戦争を叙するものなり、此點に於て、「イリアス」及び「マハーパラタ」と相似たり、「グードルン」は、海上の冒險及び婦人の貞節を描寫せるものにして、「オディッセー」「ペテロペア」は、夫オディソイスが漂流せる留守中、獨り空閑を守つて婦徳を全ふせり、「ラーマヤナ」「シッタの貞節を叙す」と相類す、これ三國文學に於ける偶然の契合と見る可きものならん、されど共に文學上の傑作にして、かく共通の點を有

第三編 中南獨逸時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄)  
 第五章 グードルンの歌及び其他の民間叙事詩。  
 九九



せるは、文學研究者に取りて、最も興味あるとなり、方今我文壇に於て、『イリアス』『オディッセー』を論ずるもの漸く多くして、『ラーマヤナ』『マハーバーラタ』を説くものは、極めて罕なり、『ニーベルンゲンの歌』は、稍其名を知らるゝと雖も、『グードルン』に至りては、未だ嘗て其名を我文壇に現はさざるが如し。若し夫れ三國の文學を比較研究せば、『ラーマヤナ』『マハーバーラタ』に、深遠幽玄なる印度哲學思想の感化あるが如く、『イリヤス』『オディッセー』に於ては、希臘の優美なる藝術の美花を賞すべく、雄渾偉大の氣は、『ニーベルンゲン』及び『グードルン』二詩中に放たるゝを見ん。

『グードルン』は、北海に起りたる物語詩なり。されば北方ゲルマン人の海上生活の叙述なり。此詩の舞台は、北海海岸、デットマルシェン、フリースランド、イルランド、ゼーランド及びノルマンディー等なり。梗概は、三篇に分ちて記せん。

第一篇、イルランド王ジーゲバンドの子ハーゲンは、幼兒の頃、鷲鳥に掠められて、大洋中の小島に棄てらる。ハーゲンは、此島にて印度の王

女ヒルデと邂逅せり。渺茫たる海洋中の一孤島に、友を得たる二人の喜はいかばかり、互に其境遇、經歷を語らひしが、ハーゲンは、王女も亦己と全じ運命に遭遇せることを聞き、全情相憐むの念禁ずる能はざりき。かくて二人は、島近く過ぎ行く船に救はれ、ハーゲンは、王女を伴ひて、故國に歸り、父王の位を繼承し、芽出度結婚の式を擧ぐ。

第二篇、フリースランド王ヘッテルは、ハーゲンの王女に思をかく。此王女は、母后と全名にてヒルデと云ふ。ヘッテルは、ヒルデを迎へん爲め、三人の臣ワリーテ、ブルーテ及びホーランドをして、ハーゲンの宮に至らしむ。ホーランドは、音聲美にして、歌に巧なり、一曲の高吟遂にヒルデの心を動かし、フリースランドに伴ひ歸り、ヘッテル王の后となせり。

第三篇、ヘッテルとヒルデとの間には、花の如き王女グードルン生まる。グードルンは、早くよりゼーランドの王子ヘル非ヒと許嫁せり。さるにノルマンディー王ルードキヒの子ハルトムートは、嘗てグードルンに懸想して、思を遂げざりしかば、情を以て動かす可からずと考へ、魔力を



以て奪ひ取り國に歸る。されどグールドルンは、ヘルカヒを思ふこと切にして、固く貞節を守り、ハルトムートと婚するを肯せず。そが爲めに、グールドルンは、母后ゲルリンデに虐待され、あらゆる冷遇を忍びて、十三年の間忠實なるヒルドブルグと共に、最も賤しき婢僕の勤をなせり。

されどグールドルンは、生涯不運に悲むの人にあらざりき。母ヒルデは、モールランド王ジグフリートの助勢を得て、グールドルンを救はんとして大軍を率ゐ、數百の戦艦に乗じてノルマンディーに向ふ。全艦隊は敵の目を忍んで港灣の外に隠れしが、グールドルンの弟オルトワイン及びヘルカヒ兩人は、敵の情報を探らんとて、小舟に乗り、陸に近づけり。然るに寒風吹き荒ぶ海濱に、跣足の儘白雪の中に立ち、何物か洗ひつゝある二人の女を見出せり。ヘルカヒは、一見して賤の女の一人は、グールドルンなることを知れり。之に先つて、天使は、鳥の形となつて現はれ、グールドルンに、救助將に至る可きを告げたり。ヘルカヒは、グールドルンのやつれし姿を見て、痛く驚けり。されどグールドルンを竊かに誘ひ去らんは、武士の意

氣地立たずと思ひ、公然と戦端を開き、敵と勝敗を決せんとせり。夜の中に、彼は部下を督して、城を圍み、曉方より猛烈なる戦闘始まれり。老王ルドカヒは、衆に先んじて、城を出て、大軍に馳せ向ひしが、遂にヘルカヒに討ち取らる。殘忍なるゲルリンデは、城の没落近きにありと知り、従者を遣し、グールドルンを殺ろさしめんとす。グールドルンは、幸にして、危難を免がるゝを得たり。老いたるワータは、勇を鼓して、城を襲撃し、悪魔の如きゲルリンデを生捕りたり。資性温良、氣品高きグールドルンは、多年の虐待を更に怨むることなく、切に養母の命を救はんことを乞へり。されどワータは、容赦なく一撃の下に其首を斬れり。罪なきグールドルンを苦め、引いては兩國の子戈を動かせしゲルリンデ王后相果て、後は、兩軍和睦せり。王ハルトムート及び王の妹オルトルンとは、グールドルンの願によりて、救はれ、戦争の終局と共に世にも稀なる四組の結婚式擧げらる。グールドルンは、年來の宿望を遂げて、ヘルカヒと婚し、ハルトムート王は、ヒルドブルグと婚し、グールドルンの弟オルトワインは、ハルトムートの

## 第三編

中南國遷都時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。十字軍時代の中南國遷都時代の隆興。千百年より千三百年迄。第五卷。グールドルンの歌及び其他の民間叙事詩。



妹オルトルンと、又ヘルネヒの妹は、モールランド王ジグフリードと親しき契を結びたり、『ニーベルンゲン』の終局が、悲劇的なるに反して、此詩は芽出度喜劇的に終る。

『ニーベルンゲンの歌』と全じく、『グーデルン』にも、獨逸國民の勇敢なる氣象と、厚き人情とは、詩中の人物に著るしく反映せり。勇邁、剛健なる男子と、温順、優美なる婦人とを描けるも亦前詩と異ならず。要するに、女主人公グーデルンは、其愛情深きこと及び貞節を固く守ることに於て好箇の理想的婦人なり。母后ゲルリンデの残酷なる呵責を受けて、毫も怨むることなく、然かも節を屈して、ハルトムートに従はんとせず、一日もヘルネヒを忘れざるなり。クリームヒルデと、グーデルンとは、全然相反せる婦人の二性格を最も巧に描寫したるものと云ふ可し。クリームヒルデの愛は、既に其度を過ぎて烈しき情となり、精神狂亂して、本心を失へり。一に怨を報じ、復讐せんを目的とし、殺人に於て安心を求め、鮮血を見る迄は、胸中の不平を鎮むる能はざりき。然るにグーデルンの愛は、

激せず動かず、沈靜にして、悠久變る事なし。此尊き愛の報酬として、彼女は愛人と相會するの幸運を得たり。クリームヒルデは、一時の情に驅らるゝ時は、躍起となつて動き、グーデルンは、恒久不變の愛を持して、靜かに時の至るを待てり。されどクリームヒルデの執念深きこと、グーデルンの忍耐強きこと、は、其度に於て相劣らざるなり。

『ニーベルンゲンの歌』に、十種の記録あり。されどグーデルンの記録は、一あるのみ。此記録は、かのマキシミアン帝千四百九十三年——千五百十七年(が命じて作らしめ、テ、ロールのアムブラ城に保管せしめたるものにして、數世紀間、何人も之を知らざりき。千八百十七年に至りて、始めて世に知られ、現今維也納に在り。此記録に基き、ハインリッヒ、フォン、デル、ハーゲンは、千八百二十年に始めて此詩を出版せり。エットミルレル及びミルレンホーフは、現今傳はれる『グーデルン』の歌は、原作の儘に非ずして、後世之に追加せしものたることを主張せり。

『グーデルンの歌』の節の構成は、『ニーベルンゲンの歌』に似たり。前半句

## 第三編

中南獨逸時代の文學。十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。十字軍時代の中南獨逸詩歌の歴史。千百年より千三百年迄。第五章。グーデルンの歌及び其他の民間叙事詩。



は、前詩と全一なり、されど後半句は、男韻に非ずして、女韻なり、而して、最後の半句は、四高音に非ずして、五高音を有す。

『ニーベルンケン』及び『グールドルン』に次いで、數多の勇者物語詩出てたり、されど此等は、詞章結構共に前二詩に劣れり、此物語詩に、二種あり、一は、ディートリヒ物語に屬するものにして、他は、ロムバルド物語に屬するものなり、先づディートリヒ物語に屬するものを擧ぐれば、

- 一、『ローゼンガルテン』(此花園は、ラルムスに在り、ニーベルンケンの女主人公クリームヒルデの有せしものなり。)
- 二、『ラウリン』(侏儒の王ラウリンの物語。)
- 三、『エッケンリド』(戦争及び巨人エッケの物語。)
- 四、『ジゲノート』(粗暴なる巨人ジゲノートの物語。)
- 五、『ラーベンシュラット』(ディートリヒ王と、無道なる叔父エルメンリヒとのラベンナに於ける戦争の物語。)
- 六、『アルファルト』(ディートリヒ王の勇者アルファルトの物語。)

七、『ディートリヒ』(ディートリヒ王、嘗て救を匈奴に求めて、本國を逃げ出せることあり、此事を叙するものは、則ち此物語詩なり。)

ロムバルド物語に屬するものは、

- 一、『オルトニット』
- 二、『フーグ、ウンド、ラルフ、ディートリヒ』

此二詩は、ローテル王物語詩と、全しく冒險談なり、而して十字軍及び東方思想の影響を受くること多し。

#### 第六章 武士的叙事詩の材料

武士的叙事詩の材料は、外國就中佛蘭西より傳來せしもの多し。

一、『アルッス王及びターフルンデ物語』ブリテン王アルッスは、アングル、サクセン人來寇の時、最後の勇者として、勇敢に戦ひ、ゲルト人の國民的意識を發揚せんと努めたり、而して王の事蹟は、頗る詩的なり、王は、王后ギテブラと共に、エールスのカリドルに、宮城を構へたり、王后ギテブラは、資性温厚、順良にして、當時の貴女の模範たる可き婦人なり。

#### 第三編

中南國逸話時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄)十字軍時代の中南國逸話の隆興、千百年より千三百年迄。

#### 第六章 武士的叙事詩の材料



り宮廷には勇敢なる數百の武士と、淑徳高き夥多の美人ありき、勇士中最も秀でたるもの十二人あり、圓形の食卓を圍んで談論せしを以て、圓卓の武士と稱せられき、さて圓卓の武士となるは、當時武士の最大名譽なりき、武士優遇の此設備は、アルツス王が、魔術家メルリンの建言を採用したるなり、此優遇法は、非常に武士の獎勵となり、武士等は、競うて徳を修め、武藝を勵み、以て十二人中の一に、數へられんことを望めり。

さて武士は、自ら率先して、事を爲し、武士道の理想を民衆に示さんとて、武者修業の爲めに諸國を巡行せり、其目的とする處は、婦人を保護し、高慢なる者を制する等、凡て強を挫き、弱を扶くるにありき、圓卓の武士中最も傑出せしは、ガワイン、イワイン、ツリスタン、バルチナル、エレック、非ガロア、ランツェロート等なりき、武士等の諸國巡行中の冒險談は、武士的詩歌の題目となるもの極めて多し、アルツス王物語の端緒は、英國にして、直に佛蘭西に傳來して、茲に佛蘭西化せられ、後獨逸に傳はり、更に獨逸化されたるなり。

・二、「西班牙聖盤物語」此物語の起源は、西班牙なり、グラール(盤)とは貴重なる食器にして、深き盤なり、而してデル、ハイリ、グ、グラール(聖盤)とは、ヤスピスが寶石を以て作りたるものなりと、傳説によれば、此聖盤は、救世主が、晚餐の折用おしものにして、ヨゼーフ、フォン、アリマテアは、救世主が、磔刑に處せられし時十字架の下に跪きて、其血を、此盤に受けしと云ふ、されば、此聖盤は、最も神聖なるものとして尊重されたり、ヨゼーフの死後天使來りて聖盤を帽子の中に入れ、空中を飛翔して、西班牙の或王子アンヨ一の許に持ち來れり、アンヨ一は、踵んで聖盤を受け、モン、サルツ、チュに城廓を築きて之を奉納し、城廓を守護する爲めに、宗教的武士團體を組織せり、かくして、城廓と俗界とを、全く隔絶し、固く神聖なる寶物を警護せしむ、王は城廓を圍むに、六十里の長壁を以てし、守衛の武士は、神意によりて選抜することゝなせり、されば何人も、自力を以て、城廓内に入ること能はざりき、さて武士が神の命により、城廓に入る時は、守衛となるに先つて、聖盤の靈驗を知らざる可からず、若し神聖を汚す



が如き行ある時は、忽ち其職を免ぜられたり。されば聖盤は、靈妙なる標號にして、救世主の命に服従し、神を敬愛するものは、此世の罪を滅して、天國に行き、神に對し不敬なるものは、終生神の助を得る能はざるなりき。

此警護の武士と前に擧げたる圓卓の武士とは、此時代に於ける出世間想と世間想との代表者と見るを得可し。即ち圓卓武士は世間的武士の花にして、聖盤警護の武士は、出世間的武士の模範なり。前者は、義俠を以て、世を救ひ、後者は、謙讓と解脱とにより、天國に至らんとするなり。

グラールなる語は、ケルトの原語にして、古代佛蘭西語のグレアール、中古羅句語のグラダールニスなり。

『聖盤物語』は、其起源非常に古く、元來東洋に起りたるものなり。而してサラセン人の襲來と共に西班牙に傳はり、耶蘇教的の物語と變じ、西班牙より北方佛蘭西に傳はり、獨逸に入れり。

・三、『トロイ戦争物語』及び『歴山大帝物語』  
『歴山大帝物語』は此時代の始

於て既に存せり。

四、『カール大帝の物語』

五、『諸種の傳説』

六、『宗教的及び世間的の短かき物語』

第七章 武士的叙事詩の四大家

(1) ハインリッヒ、フォン、フェルデケ。フェルデケは、北獨逸の人なり、武士的詩歌の鼻祖と呼ばれ、中南獨逸語の父と稱せらる。彼は、千百七十五年エレーエの宮廷に於て、羅馬詩人ギルガルの著『エチアス』の佛譯を模範として、其作『エチイト』の大部を作れり。さるにハインリッヒ、フォン、シュワルツブルグ伯は、詩未だ成らざるに當りて、之を奪ひ去れり。彼は、大に當惑し、ヘルマン、フォン、ザクセン伯に懇願して、漸く原稿を取り返へせり。かく一時中絶せしかば、起稿後九年を経て、千百八十四年に至りて、完成することを得たり。彼の作は、句調、韻律共に過渡時代に出でたるものに比して、一層の進歩をなし、且つ戀愛を寫すを以て作の主眼とせしは、從來の詩歌に、

第三編 中南獨逸語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 第七章 武士的叙事詩の四大家 一一一



一新面目を開きたるものと云ふ可し。詩中伊太利王ラティヌスの王女ラ  
 ナと、其母との對話は戀愛談なれど、其語る所淡泊にして、猥褻ならず。  
 此詩はもと下ラインの方言にて、書かれしものにして、現今中及新南獨  
 逸語に翻譯されて傳はれり。

(2) ハルトマン、フォン、アウエ。ハルトマンは、シュワトプの人なり、學才を以  
 て、同人間に重んぜられ、語學の才に長じて、羅句及び佛蘭西語を能くせり。  
 彼は羅句語を僧侶學校に於て學び、佛語を少年の頃北方佛蘭西に滯留  
 中若くば十字軍に従ひし時佛人と交りて習得せり。彼が十字軍に従ひ  
 したは、千八百八十九年の役なりとも、亦千九百九十七年の軍なりとも云ふ。ハ  
 ルトマンは武士的詩人中の大家と稱せられしが、只に詩才に長ぜし  
 みならず、品性高尚なる人なりき。彼は叙事詩家たるのみならず、又抒情  
 詩家として、多くの歌及び二小冊を書けり。されど、彼の詩才は、云ふ迄も  
 なく、叙事詩に於て最も現はれたり。彼の文體は、平易にして、然かも老熟  
 なりき。而して彼は驚く可き叙述の才を有し、平凡乾燥なる材料を捕へ

來つて、能く潤飾し、大に生氣あらしめたり。彼は、北佛蘭西詩人クレチア  
 ン、デ、トロアの小説を模範として、詩材をアルツス王物語に取り、四種の  
 勇者物語詩を作れり。

一、『エレック及びエニテ物語』アウエの處女作にして、千九百九十二年  
 に出づ。

梗概、エレックは、美人エニテを娶らんとして闘争し、首尾よく勝負に  
 勝ちてエニテを手に入れたり、されど、其後彼は、エニテの側を離るゝを  
 欲せず、爲めに武藝を顧みざるに至れり。エニテは、之を見て、心竊かに憂  
 慮せり。それと察したるエレックは、己の勇氣尙衰へざるを世に示し、以て  
 エニテの疑を解かんとす。彼はエニテを伴ひて、武者修業に出で立つ。エ  
 レックは家を出づる時、身に危難の及ばんとする時は、注意せよとエニテ  
 に約束せり。赤心あるエニテは、常に夫の側に侍して、其武藝の優ぐれた  
 るを見たり。依つて、二人の交情は、一層濃かになれり。かくして、多くの冒  
 険をなしたる後、エレックは、エニテと共に、故國に歸へり、父に代りて主權



を握れり。

此叙事詩の眼目とする所は、人生の二方面即ち愛情と武士の本分との衝突を描くにあり、次の詩も亦然り。

二、『イワイン物語詩』此詩は、佛詩人クレチアン、デ、トロアの作、シエグリエ、オー、リオンに倣つて、書けるなり、年代は詳ならざれど、千二百四年以前に出でたるものなることは明かなり、梗概は、左の如し。

イワインは、前章に述べたる、アルツス王物語中の圓卓の武士の一人なり、魔泉の邊にて、一人の武士と闘ひて之に勝ち、其妻ラツデーテを奪ひて己の妻となせり、彼はエレックの如く、妻に戀々たらず、同僚ガワインの忠告に従ひ、妻に分かれて、武者修業に行けり、家を出づる時一年の後、再び歸り來る可しと約せり、然るに彼は其約を守る能はず、一年を過ぎ、て歸らざりしかば、ラツデーテは、夫につき不審を抱くに至れり、彼は諸所を巡ぐる時、獅子が大蛇に苦めらるゝを見て、之を助けたり、其他夥多の冒險を重ねて、遂に再び家に歸り來れり、ラツデーテは、久々にて夫の

恙なきを見て、平素の怨も打忘れて、舊の如く親むに至れり。

此詩はハルトマンの作中の傑作にして、中南獨逸詩歌中、詩形の最も規則正しきものなり、彼が寫し出さんとする高き理想は、此詩の始の句に於て現はる、即ち善なる目的を達せん爲め、全心を傾注するものは、幸福と名譽とを失はずと云ふにあり、此詩に摸倣せし作は、ハルント、フォン、グラーフ、エンブルグの作、ハガロイス、及びウルリッヒ、フォン、ツァチヒョーフエンの作、ランツェロート、フォン、ゼー、なり。

### 三、『岩上のグレゴリウス』

梗概、グレゴリウスは、不正の子なり、されば深く自ら慚ぢ、海中の孤岩に座し、双親の大罪を贖はんとせり、かくして過ぐることに十七年、神は其赤誠に感じて、彼を清淨の身となし、高僧の位を與へたり。

四、『ハインリヒ物語』ハルトマンは、此詩を、自國の材料によりて書けり、中古時代の詩中音調最も美なるものなり。

梗概、シュワープの貴族ハインリヒ、フォン、アツエは、國富み、兵強くして、



其名遠近に隠くれなく、此世の榮華は、永久盡くる事なきものと考へ、神を信ずるの心更になかりき、さるに彼は、病として最も忌むべき癩病に罹かり、榮華の夢去つて、忽ち悲歎の極に沈めり、國中の醫者は、皆之を不治の病となし、侍臣等は、病を恐れて、誰一人も近づかさざりき。

伊太利のサレルノに豫言者あり、ハインリヒの病を聞いて來り、此病は、汚れなき少女の心臓の血を服すれば、全治すべしと云へり、ハインリヒは、此言を信ぜず、病は回復の見込なきものとし、財寶をく、諸人に分ち、奥へ、唯一の地所を殘し置けり、彼の意蓋し、此地に於て、最後の日を待たんとせしなり、此地の管理人は、平素彼の恩顧を受けしかば、彼が一次、病を得て以來、忠實に介抱せり、管理人に、當年十二歳の少女あり、此少女は、三年の久しき間、日夜ハインリヒの枕邊を離れずして、最も親切を盡くせり、少女は、豫言者の言を聞けり、而して直に思へり、我が君ハインリヒを救ふものは、我なりと、少は、其意を兩親に告げしが、兩親は、之を幼な心、前後の分別なく云へること、思ひ、止めんとせざりき、然る

に少女は、一意ハインリヒを助けんと思ひしかば、急ぎ共にサレルノに赴けり、ハインリヒは、少女が自若として端座し、今や醫師の刀は、少女の心臓を貫かんとするを見て、慈悲心一時に起れり、彼は、病の爲めに、罪なき少女を殺すに忍びず、病を天命と思ひ、靜かに死期を待たんとて、少女を伴ひ故郷に歸れり、神は少女の誠實に感じ、且つハインリヒが善心に立ち歸りしを見て、其病を平癒せしむ、茲に於て、ハインリヒは、命の親たる此少女と結婚せり。

(3) ヲルフラム、フォン、エッシェンバハ、 ヲルフラムは、貧づしき佛蘭西の武士なり、妻子と共に、エッシェンバハに住せり、彼は、獨逸國內を巡ぐり、或時ヘルマン、フォン、ティューリングゲン伯の許に至り、滯在中當時著名なる抒情詩人ワルテル、フォン、デル、フォーゲルワイデと會合せり、彼は、同時代の詩人中思想明白にして、組織的の智識を有し、深く耶蘇教を信じ、徳義を重んぜし人なり、彼の詩中往々晦澁の語あるば、彼が多くのエピソード及び奇怪なる冒險談を引用せしによる、彼は抒情詩をも書けり、就中當時の風



俗たる夜中男女の密會を歌ひしもの多し、されど彼の傑作は、佛詩を摸倣したる三叙事詩なり。

一、『バルチナル』此詩は、ラルンラムの傑作にして、獨逸叙事詩中著名なるものなり。詩材は、『アルルス王物語』に交ふるに、『グラール物語』を以てせり。

梗概、バルチナルの父ガムレットは、十字軍中陣没せり。母ヘルツェロイデは、父が劔によりて、非命の最後を遂げしかば、バルチナルを伴ひて、閑静なる深林に入り、心を用ゐて、バルチナルを温順に育て、武士の風俗を見習はせぬ様に注意せり。されど武士の魂を遺傳せしバルチナルは、山中偶三人の武士に出會し、其勇ましき姿を見て、武士たらんと念は、禁ずる能はざるなり。彼は、多くの冒険をなし、當時ナントに住せしアルルス王の許に至れり。さるに王は、彼の功勳を賞して、圓卓の武士に採用せり。彼は、戦争に赴き、重圍の中に陥れるコンディエイラムールを助けて、圍を解き、城を完ふせり。其勇氣に感じて、コンディエイラムールは、バルチナル

と結婚するに至れり。かくて後、彼は、グラールブルグ(聖盤を奉納せる城廓)に赴きしが、グラール王アマフォルタスは、病に罹かり、且つ毒鎗によりて、負傷せり。王の病は神罰なれば、尋常の手術を以て、癒ゆ可きにあらず。只何人にて、求めざるに來りて慰問するあらば、救はる可きなり。されどバルチナルは、元來徳義を誤解し、慈悲心を卑みしかば、王の苦悶を見て、更に意とせざりき。これ甚しくグラールの王位を嘲けりたるものにして、彼は忽ち圓卓武士の資格を失へり。彼は歎き、悲み、天道の是なるを疑ふに至れり。而して五年の間半狂の姿にて、諸所を流浪せり。或時隠者トレブリツェントに遇ひしが、トレブリツェントは、彼にグラールの靈驗を説き、且つ彼にして高慢心を去り、神を信せば、グラールの王たるべしと告げたり。茲に於て、彼は前非を悔ゐて神を敬するの心を起せり。彼はアルルス王に、悔悟の由を告げて、再び武士となり、直にグラールブルグに赴き、王の病を問ひて、王を苦難より救ひ、代りて王位につけり。彼の妻女之を聞いて來り、共に幸福なる生涯を送れり。



本詩一節の真意は、蓋し神を信ぜざるものは、幸福を得ず、されど一たびは神を疑ふとも、懺悔して其行を改むる時は、神は之を捨てずと云ふにあり。

『ローヘングリーオン』此物語は、其夢幻なる點に於て、頗る我が浦島物語に髣髴たる所あり。プラバントの伯爵夫人エルゼは、グラール王バルチファルに援助を乞へり。依てバルチファルは、其子ローヘングリーオンを遣したり。此時鶴は、船を曳いて來り、ローヘングリーオンを載せて、プラバントに著す。ローヘングリーオンは、敵を追ひ退けて、エルゼと婚せり。此時彼は、エルゼに向つて、夫婦間の和樂を永續せんと欲せば、決して、彼の家系及び名を問ふ勿れと、固く約束して、再三誓はしむ。兩人睦まじき生活を遂ること數年、彼は皇帝ハインリッヒ一世の命を受けて、匈牙利人と戦ひ、大勝利を得て歸る。エルゼは、夫の名譽を誇りしが、此時侯爵夫人ツワイフェルは、猜忌心を起し、ローヘングリーオンは、賤族の子孫なりとて、大にエルゼを嘲笑セリ。エルゼは、口惜しさの余り、夫との約束を忘れ、誓を破れり。ロ

ーヘングリーオンは、己を得ず、グラール王の子たることを打明けしが、嘗て彼を竊に伴ひ來りし鶴は、再び船を曳いて現はれ、故國グラールブルグに連れ歸れり。エルゼは、夫に分かれし悲さに遂に死せり。

此物語は、かく空想的にして餘韻長ければ、後にコンラード、フォン、カールツブルグに歌はれ、又ワグネルの歌劇によりて、廣く世に傳はれり。

『ローヘングリーオン』といへる詩は、ラルフラムの作にはあらねど、『バルチファル物語』と縁故深きもの故、爰に其梗概を述べたるなり。

二、『テッレル』此詩は、グラール王物語に屬す。シ・ナツランデルとグラールの最初の王テッレルの曾孫女シグチとの戀愛を、美しく描がきたるものなり。此話は後にアルブレヒト、フォン、シャルフエンベルグによりて歌はれたり。

三、『キルレハルム』ラルフラム最後の作にして、千二百十五年に出づ。此詩は、耶蘇教徒と、回々教徒との戦に於けるキルヘルム、フォン、オランジの功業を叙述するものなり。されど詩人は、異教徒を蛇蝎視する憎惡



の情を述べずして、却つて博愛主義を鼓吹せるものゝ如し。  
(4) ゴットフリード、フォン、シトラースブルグ。ゴットフリードは、武士に非ずして、市民なりき。されば後進の詩人、彼を呼ぶにヘルと云はずして、マイステルを以てせり。彼の作は、内容及び詩形に於て、アルフラムと相反せり。其關係恰かも、近世に於けるカーランドと、クロープシュトックとの如し。詞章の絢爛、性格描寫の精細なることに於て、彼は、アルフラムに一頭地を抜くと雖も、快活輕浮にして、森嚴を欠ぐ嫌なきにあらざ。アルフラムは好んで高潔嚴正なる勇者の性格を描がさしが、佛詩を摸倣せるゴットフリードは、人生の逸樂を叙し、作中の人物淫靡艶冶の風を帶ぶ。此性格の最も能く現はれたるは、彼の作中「ツリスタンとイゾルデ」なり。イゾルデは、貞節を破り、夫の切たるツリスタンと不義の交をなせり。而して其不義の動機は、二人が知らずして、戀情を挑發する魔水を飲めるにあれば、其悖德壞倫も稍恕すべきものあるなり。ゴットフリードは、此作を完成せずして、死せしが、ウルリヒ、フォン、ティエルハイム及びハインリッヒ、フォン、フラ

イベルグが、其後を繼げり。

フェルデケ、ハルトマン、アルフラム及びゴットフリードを武士的叙事詩の四大家となす。此時代に出でし叙事詩家にて (5) コンラード、フレック、(6) ルードルフ、フォン、エムス、及び (7) コンラード、フォン、ホルツブルグ等は以上四大家に次いで著名なり。

第八章 武士的抒情詩の材料及び詩形。

民間叙事詩は、上述せる如く、十二十三世紀に於て、隆盛を極めたり。抒情詩は、叙事詩に後れて起り、千八百八十年頃に至り、漸く文華咲き始めたり。吾人は、此時代の抒情詩を呼んで、ミンチゲザングと云ひ、而して詩人を、ミンチゼンゲルと稱す。そは歌の題目が、ミンチなればなり。さてミンチとは通常戀愛の意に用ゐらるゝと雖も、本來の意義は、意中の人を靜に思慕するの謂にして、胸裏切々の戀情なり。依つてミンチは、我國萬葉集の相聞と、其意を全うし、男女の相思ふことのみならず、親子、兄弟、朋友の相思ふにも用ゐらる。而してミンチゲザングは、又祖國及び信仰をも

第三編 中世南ドイツ時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄) 千百年より千五百年迄(十字軍時代の中南ドイツ歌の隆興) 千百年より千三百年迄。  
第八章 武士的抒情詩の材料及び詩形。



歌へり。

當時佛蘭西の南方に、ツルパドールと稱する抒情詩人派あり、盛に男女の戀愛を説き、卑陋なる情的文學を推奨したり。獨逸詩人は十二世紀以來、大に佛蘭西文學の影響を受けしと雖も、其愛を歌ふや、高尚にして理想的なり、而して佛詩に見る如き肉感的熱情を以て、詩材を飾る如きことなし。

ミンテゲザングの材料は、右の三種あるを以て、此時代の抒情詩を三種に分かつ可し。

イ、戀愛の歌。獨逸人は、婦人を敬愛せり、叙事詩に於ても、武士が婦人を保護し、強を挫き、弱を扶くるの氣風は、大に現はれたり。羅馬歴史家タチツスも、彼の著「ゲルマニア」に於て、獨逸人は婦人を神聖なるものとして尊崇せり、依つて大に婦人を敬愛せりと云へり。耶穌教傳來して、益此精神は鼓舞せられたり、さて此時代の詩人が愛を歌ふや、天地陰陽の自然現象に鑒み、人生と自然との妙合一致を説けり。

ロ、神の愛の歌。主として聖母マリアを歌へり。耶穌教國に於てはマリアは、婦人の善美なる龜鑑にして、其德行、其容姿共に完全無缺なるものとし、宗教家が淑徳を述ぶるや、常にマリアを理想とし、美術家は、容貌端麗にして、氣品高潔なる婦人として、聖母を寫つせり。マリア尊崇は、則ち婦人敬愛の最高の理想を表彰するものなり。此時代の詩人は、婦人を敬愛し、マリアを尊崇するの理想を述ぶると共に、三位一體の深遠なる教理をも歌へり。

ハ、愛國の歌。戀愛の歌を、男女の關係即ち現世に於ける人生問題を寫つすものとせば、神の愛の歌は、宗教的にして、恒久不變の愛を歌ふものと云ふ可し、而して愛國の歌は、政治的趣味を帶ぶるものなり。詩人は愛國の歌に於て、侯伯の仁徳を稱揚すると共に、其非政を責め、獨逸皇帝と國家との關係、及び皇帝は、教會に對し、法王に對し如何なる地位を有するやを説き、又獨逸國が羅馬法王管轄の下に、種々の抑壓を受くるの不幸を慨歎せり。



十字軍の結果として、佛蘭西詩歌の影響は、抒情詩にも及べり、前章に略説せし如く、佛蘭西抒情詩は、獨逸抒情詩に先つて隆盛を極めたり、佛蘭西の南方プロバンスに於ては、箇々獨立せる數多の詩社起れり、そが中にも、獨逸詩歌に大影響を及ぼせしは、ツルパドールなりとす。

ツルパドール詩人は、詞章の流麗、語辭の修飾を主として、其内容を顧みざりしかば、獨逸詩歌に見る如き眞摯の氣象は、到底其作に於て窺ふ可からざるなり、佛蘭西詩人の作には、輕浮、不實、嫉妬の性格を備ふる人物多く、之に反して、獨逸詩人は、信實にして、溫順なる、深く心に思うて、敢て之を口にせざる處女的の愛を寫つせり、依つて批評家は、佛蘭西抒情詩は、其人物快活にして、男らしき性を有し、獨逸詩歌は、女らしき優美の性を有すと云へり。

當時の歌人は、始め俗謡の單純なる詩形を用ゐる節の如きは、「ニーベルンゲンの歌」に倣ひ、且つ短かき對韻を用ゐたり、然るに後には、聲調、韻律の用法巧になり、各自家特有の音律を用ゐるに至れり、内容に關して抒

情詩に三種の別ありし如く、詩形によりても、之を三つに分かつことを得るなり。

一、リード、同形の若干節より成り、各節は三部より成れり、始めの二部を上句と稱し、同句形より成れり、第三部は即ち下の句にして、第一第二部より句數多し。

上の句を、獨逸原語にてシトルレンと云ふ、此語はもと建築上の用語にして、直立せる二本の支柱を云ふ、之に冠するに、第三の横木を以てして、始めて不動の構造となる、此詩節も、上の句は二部より成り、之に第三部即ち下の句を加へて、完全なる詩形となるなり。

二、ライヒ、リードと異なる點は、句の不整一なること、韻律の多様なること等にして、概して法則に拘泥せざる詩形なり、此詩形は、もと寺院の音樂に用ゐられたるものにして、自から嚴肅の調を帶ぶと雖も、舞踏歌に用ゐらるゝに至り、快活にして、輕き調子となれり。

三、シブルフ、リード及びライヒは、歌ふ歌に用ゐられたり、されど

第三編 中世獨逸時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 第八章 十字軍時代の中世獨逸詩歌の隆興、千百年より千三百年迄、武士的抒情詩の材料及び詩形。



此詩形は歌ふことを目的とするに非ず、暗誦的に朗讀せしものなり。されば樂器に合はすること能はざりき。

さて愛の歌(廣義に云ふ)は、シユブルフを除いては、皆朗讀するに非ずして、歌ひたるなり。侯伯の宮廷には、夥多の伶人ありて、管弦に伴うて、愛の歌を歌ひたり。而して其奏せし樂器は、パイオリンなりき。

此種の歌にて、優れたるものは、歌集となりて傳はれり。そが中にて著名なもの三あり。

一、「グローセ、ハイデルベルゲル、」十四世紀に出づ。此歌集には、武士の肖像及び武器の美しくしき挿圖あり。この歌集は、最古のものに非ずと雖も、中古獨逸抒情詩の記録としては、大に研究す可き價值あるものなり。

二、「フインガルトナル、」前歌集より稍古し。

三、「クライチ、ハイデルベルゲル、」文學上の價值に於ては、前二種に優ること數等なり。

近世に至り、以上の記録により、愛の歌集多く出版されたり。中にも、最も著名なるは、ハインリッヒ、フォン、デル、ハーゲンが、千八百三十八年に出版せしものなり。

### 第九章 著名なる武士的抒情詩人

抒情詩家の大半は、武士にして、民衆中には、情的文學を能くするもの極めて少數なりき。而して、此頃詩人の出でしこと、前後百六十人なり。當時は、王侯も詩歌を能くし、プレスタツ侯ハインリッヒ四世、ベーメン王エントツェル、ブランデンブルグ伯オットー四世、ホーヘンスタツフン家の末王コンラディン等は、著名なる詩人なり。左に時代を追うて著名なる詩人を擧げん。

- (1) ハインリッヒ、フォン、フェルデーケ、
- (2) ハインリッヒ、フォン、モールンゲン、
- (3) フリードリヒ、フォン、ハウゼン、
- (4) ラインマール、デル、アルテの四詩人は、此時代に於て著名なり。されど文學史上特に其名を擧ぐ可きは、フォーゲルワイデなり。

- 1. Heinrich von Veldeke.
- 2. Heinrich von Morungen.
- 3. Friedrich von Hausen.
- 4. Reinmar der Alte.



(5) ワルテル、フオン、デル、フオーゲルワイデ。生年月及び生地等詳ならずと雖も、千百六十五年より六十八年迄の間に、南方テ、ロールニ生れしと云ふ。幼時は塊太利に來り住し、此間に、詩歌の術をラインマールに授かりしと傳ふ。ワルテルは、フリドリヒ、デル、カトリッシの恩遇を受けたる武士なりしも、其死後は、諸國を流浪し、獨逸國中殆んど至らざる所なかりき。諸國巡遊中、彼は屢テ、ユーリッングン伯及び塊太利帝の宮に赴けりと云ふ。フリードリヒ二世皇帝は、ワルテルに、小采邑を賜ひたり、依つてワルテルは、晩年大に幸福なりき。千二百三十年、キルツブルグに死し、寺院門前の遊園中に葬むらる。

ワルテルは、抒情詩人中最も著名にして、又其學最も多方面なりき。抒情詩人の多數は、男女の戀愛を歌ふを事とせし時に當り、ワルテルは、戀愛文學のみを弄せず、愛國の歌、神の愛の歌をも作りたり。就中戀歌は著名なるもの多し。春花爛熳の美も美人の盛裝せるには遠く及ばずと云へる詩の如きは、婦人によつて、最も愛唱されたるものなり。愛國の歌に

ては、獨逸男子と共に、獨逸婦人を敬愛す可きを云ひ、又國民の自由と名譽とを熱心に叫び、世は虚偽と暴力との支配に歸し、平和と正義とは、遂に振はざるを慨歎せり。當時政治と宗教との衝突として、著名なりし法王と、皇帝との權力争を歌ふや、盛に法王の非行、羅馬教會の腐敗を攻撃し、語氣自から走つて、宗教改革の思想を人民に鼓吹せり。ワルテルは、又詩をフイリッヅ、フオン、シュローベン、オットー四世、フリードリヒ二世等に獻じて熱心に治國の道を説けり。其社會問題を歌ふや、自然界の森羅萬象は、悉く秩序あり、然るに獨逸國は、雜亂紛糾の狀態にありとて、大に國內の治平を渴望せり。宗教的の歌にては、神の敬愛すべきを述べ、克己して神の命に従ふ可しと説き、子弟薫育に就いても、父兄の心得可き道を擧げたり。彼が晩年烏兔勿々の感に堪へずして、述懐を歌ひたるものは、最後の作にして、詞調最も流麗と稱せらる。

ワルテルは、神の信仰を忘れず、温かき情を歌ふと雖も、決して軟弱ならず、健全なる思想を歌ひたり。されば當時同僚間にも大に畏敬された



り。ワルテルの名今日に噴々たるは、ルードカッヒ、ウーランドに負ふ所大なり。ウーランドは千八百二十二年『古代獨逸詩人ワルテル、フォン、デル、フォーゲルワイデ』と題する一書を著せり。

第十章 戀愛詩歌の衰頹

ワルテルの存命中、既に千二百二十年頃より、戀愛詩歌は、衰頹の兆候を呈せり。これ戀愛の意義漸く卑俗となり、當初に於ける純潔の意を失ひたるによる。ワルテルは大に慨歎して、衰運を挽回せんと努めしも、遂に時勢には抗する能はざりき。此衰頹の時期に出でし詩人は、左の數名なりとす。

(1) ナイイドハルト。 ナイイドハルトはバイエルンの武士なりしが、バイエルン侯の寵を失ひて後は、埃太利に移住せり、而して遂に維也納に死せり。ナイイドバルトは、下層人民の生活を歌ひ、詩中當時農民の愚鈍なること、色情の争をなすこと等を嘲りたり。かく農民を嘲弄せしかば、ナイドハルトは、農夫の敵と云ふ綽名を負へり。

1. Nothart.

- 2. Ulrich von Lichtenstein.
- 3. Heinrich von Meisson.

(2) ウルリッヒ、フォン、リヒテンシュタイン。 リヒテンシュタインは、武士なり。ウルリッヒの作は、其自傳中に悉く收めらる。詩中肉感的の情を抒ぶるを以て、徳義上よりの非難を免がれず。

(3) ハイインリヒ、フォン、マイセン。 ハイインリヒは、愛の詩歌廢たれ、頭領詩歌出て來りし過渡時代の詩人なり。千三百十八年、マインツに、詩歌學校を創立せり、之をマイステルゼンゲルシューレと云ふ。ハイインリヒは、内容よりは、詩形に重きを置き、語調の美を主とし、節の構成は、最も巧妙なりき。此時代には、詩歌の競技盛に行はれたり。千二百六、七兩年に於ける、ワルトブルグの歌合會の如きは、最も著名なるものなり。ハイインリヒ、フォン、オフトエルディングンと、ワルテル、フォン、デル、フォーゲルワイデとが、競技せし時、ハイインリヒは、埃太利侯レオポルドの賞賛を得、ワルテルは、ティューリンゲン伯ヘルマンの恩賞を受けたり。此時、ラルフラムと、ラインマールとが、歌の判者なりしと云ふ。其後、ソフイ伯夫人が、ハイインリヒの願を容れ、再び歌合會を催せり。此時の判者は、ラルフラムと、クリングス

第三編 中世獨逸語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄) 第十章 戀愛詩歌の衰頹



オールとなりき、歌合會にて勝ちしものは、賞を得之に反して負けしものは相當の罰を受けたりと云ふ。

中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頹、千三百年より千五百年迄。

第一章 詩歌の衰頹及び其原因。

十二世紀の中葉以來絢爛たる詩歌は、中南獨逸語の美花として、百五十餘年の間隆盛を極めしが、十四世紀の始めに至りて、大に衰へたり。其原因は、一にして足らざるなり。

かのホーヘンシュタウフェン家が、帝位に在りし間は、歴代の帝王文學を獎勵し、詩人を保護せしかば、詩歌の流行盛にして、著名なる詩人輩出せしと雖も、ホーヘンシュタウフェン家が、帝位を失ひて以來、獨逸國運の隆盛又昔日の如くならず、國內統治なく、上下混亂せり、されど衰運の兆は、既にホーヘンシュタウフェン家在位の時より萌せしなり。帝は、法王との連年の権力争にて國內を統御するの暇なかりしかば、其間に乘じ

第三編 中南獨逸語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄。) 中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頹。千三百年より千五百年迄。第一章 詩歌の衰頹及び其原因。



て、豪族は、其食邑を擴め、權力を逞うし、帝の命に従はざるものあるに至れり。ルードルフ、フォン、ハプスブルグ(千二百七十三年より千二百九十一年迄在位)帝位に上り、再び國內平和となりしも、此間侯伯は、互に相反目し、又諸王帝位を争ひしかば、國內紛擾し、文學の隆盛は、當底望む可からざりき。

皇帝は、自家王朝の利害を考へ、家權の擴張をのみ事とし、侯伯も、亦之に倣ひて、相争へり。されば、詩人は宮廷に保護を受くる能はざりき。武士は漸次墮落して、義侠心を失ひ、倨傲尊大の風を生じ、市民商人より、財物を徵收し、命に負く時は、強奪したり。武士は稼がず、馬上に飽食すとは、當時武士の心得なりき。宮廷の儀式禮法は、更に知らず、婦人を敬愛せず、却つて敗徳壞倫の所行に陥れり。

上皇帝を始めとし、貴族武士がかゝる状態なりしかば、僧侶も、追々修養を怠り、衆生濟度の任に當る能はず。寺院は空儀虚式を行ふ所となり、従つて諸所に自由信仰の風起れり。加ふるに天災、地變交々至り、穀物の

不作續いて飢饉、黒死病の流行ありしかば、國內大に亂れたり。

當時プラトク、ホーン、ハイデルベルグ、ケルン、ライプチヒ等各市に著名なる大學ありしも、大學は、學術の蘊奥を究むる所にして、人民の教化及び文學の發達に直接の影響を及ぼすことなかりき。

加ふるに、社會一般が、優美高尚の理想を棄て、實利實物を重んじ、物質的の方面に向ひたり。外界の事情此の如くなるに際して、詩人社會を一瞥せんか。當時は、詩人自身も、趣味低下し、舊時の如き國民的國家的の理想なく、詩的思想没却したるが如し。されば内容を後にして、詞調を重んじ、言語の如きも、中南獨逸の文章語廢たれて、一時排除されし方言再び勢力を得るに至れり。

かくの如く、全社會を擧つて没趣味にして、實利主義に傾き、徳義なく、信仰なき有様にて、國內動搖せる時に當つて、辛くも、國內の秩序と、徳義とを全く沈淪せしめざりしは、神秘家の功與つて、大なりと云ふ可し。さて此混亂時代にも、叙事詩、抒情詩出で、又不完全ながらも、劇詩、散文の濫

## 第三編

中南獨逸時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄)中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の概観。千三百

千五年より百年迄。第一章詩歌の概観及び其原因。第二章叙事詩。



解は此時代にありとす。

### 第二章 叙事詩

前章に述べたる如く、此時代の詩歌は、詞章、語辭共に隆盛時の詩歌に及ばざること遠く、千篇一律古詩の燒直又は摸倣に過ぎずして、更に特徴を有せず、其名を擧ぐる程のもの一もあるなし。動物叙事詩は、叙事詩、抒情詩に壓倒されて、一時中絶せしが、十五世紀に至り、再び出づるに至れり。ハインリヒ、フォン、アルクマールは、ハインリヒ、デル、グリヒゼーレの『ラインハルト、フックス』に改削を加へ、散文の註解を附せり。マッティアス、ブランデイスは、題號を『ラインケ、デ、フォス』と改め、此物語を北獨逸語に翻譯せり。動物物語は、諷刺的にして、當時の寺院及び君主の關係を、暗に嘲けりたるものなり。近世に至りゲーテ及びホルヘルム、ゾルタウは、古詩を摸範として、動物物語詩を書けり。ゲーテの『ライチャック、フックス』は就中有名なり。

### 第三章 抒情詩

1. Hugo von Montfort.
2. Oswald von Wolkenstein.

武士的抒情詩の時代は去り、抒情詩は、市民の手に歸せり。(1) フォー、フォン、モントフォルト、及び (2) オスワルド、フォン、ワルケンシュタイン等は、武士的詩歌の再興を計りしも、時既に遅かりき。情的文學は、燕閑宮廷を去り、交通頻繁なる都市に於て、自由に發展するに至れり。さて市民にて、詩歌を能くせしは、職人なりき。職人等は、詩社を興し、社中に左の五階級ありき。一、シューレル(詩歌の法則修業中のもの) 二、シュールフロインド(詩歌學、韻律學を修得せるもの) 三、ジンケル(マイステルの作りたる詩歌を正しく朗詠することを得るもの) 四、ディヒテル(他人の作の聲調に倣ひて、新作を出し得るもの) 五、マイステル(自家獨特の韻律を發見し、自由に作歌する事を得るもの) 此れなり。

南部及び中部獨逸の諸市殊にマインツ、アウグスブルグ、ニルンベルグ、コルマール等に於ては、マイステル等毎週其集會所若しくは役所寺院等に會合して、其作を出席者の前にて歌ひ、互に批評せり、而してマイステルの作韻は學校に保存され、固く世間一般に公示することを禁じ

第三編 中獨逸諸時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄) 中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頹。千三百



たり。マイステルは、作歌に於て、競うて聲調韻律を守り、又各自獨特の韻律を用ゐしかば、詩歌は、單に詩形の美に止まり、其内容は極めて平凡にして、詩歌としての眞價は、大に減じたり。

十五世紀頃に至りては、詩歌は多く宗教趣味を帯び、宗教改革によりて、耶蘇教の感化を受けしこと、一層大なりき。

マイセンが十四世紀の始めに、マインツに設立せし詩社を始めとし、十五世紀に至りては、シットラー、スブルグ、アルムス、ニールンベルグ等に、新詩社設立され、以後大都會には詩社の設なきものあらざりき。就中最も著名なるは、ニールンベルグの詩社にして、此社には、マイステルとして最も名を知られたるハンス、ザックスありき。

マイステルは、詩形、聲調を重んじ、詩歌は、大に衰頹せし時に當り、聲調は、巧妙ならずと雖も、よく人情を寫したる一種の詩あり。これ當時の俗謠(フォルクスリッド)なり。俗謠は、何れの國に於ても全じく、社會のあらゆる團體及び階級の人によつて歌はるゝものなり。獨逸に於ても、鐵夫の

歌、獵師の歌、學生の歌、兵士の歌、婢僕の歌、武士の歌及び職工の歌等は、各其團體の氣風を現はせり。其種類を云へば、聲調優美なる戀愛歌、悲壯なる送別の歌、快活なる酒宴の歌、勇壯なる戦争の歌等なりき。俗謠にて主として歌はれしは、愛なれど、當時の風俗及び歴史上の事實をも歌へり。歴史的の歌にて、『ヒルデブラントの歌』及び、『タンホイゼルの歌』等は、古代勇者物語より出でたるなり。俗謠の隆盛時代は、十五、十六世紀にして、ルテル及びハンス、ザックス等の如き人も、大に俗謠を好みたり。俗謠は、十六世紀の末に至り、一時廢れしも、三十年戦争の後、十七世紀の中頃には、再び盛になれり。學者には、俗謠を蔑視したるものありしも、ヘルデルの如きは、千七百八十八年『民の聲』(シテイムメン、デル、フェルケル)を著はして、大に俗謠の詩的價値を賞揚し、ゲーテの抒情詩は、俗謠に基けるもの多し。ゲーテに次いで、ビュルゲル、ウーランド、ハイネ等は、多く俗謠を作れり。クレメンス、ブレンターノ及びアヒム、フォン、アルニムは、『デス、クナーベン、ウンデルホルン』の名を付して俗謠を出版し、ツーランドも『古南及



び古北獨逸俗語集『アルトホホ、ヴンド、ニードルドイッチェ、リードル』を出版せり。

#### 第四章 教訓詩

教訓詩は、十四、十五世紀に於て、最も隆盛を極めたり。十四世紀の後半頃に、埃太利詩人ハインリヒ、タイヒナルの『道德談話』モラリツシ、モレィデン、次いでペーテル、ズッヘンハルトの之に類する作出で、十五世紀には、ヨハンテス、ラーテの『武士の鏡』リッテルシ、ビィゲル、『ラーテス、ツフト』及び『貞操に就いて』フンデル、コイシ、ハイト、出で、又ハンス、フィントレルの『徳義の花』ブルーム、デル、ツィゲンド、及び十五世紀前半頃の一詩人の作『悪魔の網』トイフェル、ステツツ、出づ、トイフェルとは、元來悪魔の意なり、此詩は、對話体を爲し、隠者と、悪魔との問答にして、社會のあらゆる階級の人によつて犯さるゝ罪惡、不徳を論難攻撃するなり。

此時代には又一種の諷刺的詩歌出でたり、ブリアーメルと云ふ、其句の短かくして滑稽然かも奇警よく、人の頤を解く所、頗る我が川柳に類せり、此詩は始めに、二三の前提を挙げ、終りに、前意を總括して、批評を下せる斷案を置くなり、而して巷談街説として、市中男女の話題に上る可き獨逸當時の日常生活を、巧に冷笑嘲罵せしものなり、之に類する教訓的警句は、既にシ、ヘル、フォーゲル及びフライダング等の作中に散見す、されど此種の詩歌最も流行せしは、十四、十五世紀なり、作者は、多く不明なれど、頭領詩人(マイステルゼンゲル)中の人たること疑なし、今日に傳はれるは、ニュルンベルグの頭領詩人 (1) ハンス、ローゼンブリュート及び (2) ハンス、フォルツなり、フォルツは、理髮師にして、ローゼンブリュートは、紋章職人なりき、此時代に出でし教訓詩にては、ヨハン、フオン、モルス、ハイムの『シ、ビィゲル、フオン、レギメンツ』も名あり、されど、教訓詩の大作として、最も著名なるは (3) セバステアーン、ブラントの傑作『恐人の船』(ナルレンシツプ)なり。

セバステアーンは、千四百五十八年シュトラスブルグに生まれ、十七歳にして、バーゼルの高等學校に入り、後大學に進み、哲學法律の兩學位を

1. Hans Rosenblüt.
2. Hans Folz.
3. Sebastian Brant.

#### 第三編

中南獨逸語時代の代文學(十六世紀の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄)中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の概観。千三百

#### 第四章 教訓詩



得、獨逸及び羅句語にて書ける著書多し、千五百廿一年に没す、時に年六十四、中世紀の末葉に於ける國家、宗教及び社會上の頹廢は引いて文學上に大影響を及ぼしたることは、既に述べたるが如し、社會當時の状態は、能く此の「ナルレンシツ」一篇中に反映せり、此詩の名は謝肉節の祭典に於ける道化の行列の名を取りしものにて、此祭の時は、我が國の花車の如く、馬鹿嚙をなす船を作り、街道を引き廻はせり、セバステイアンは當時の風俗を此船に乗れる道化に比して、社會の秩序の亂れたる状態を寫し、不信心者、不道德者をも冷罵せり。

此比喻詩は全篇百十四章に分かる、獨逸人民が愛讀せしのみならず、屢外國語に翻譯され、十六世紀頃迄、大に世に行はれたり、セバステイアンの友人にて、シトラー、スブルグの有名なる説教師(4) ガイレル、フォン、カイゼルスベルグは、此詩を種とし、百十の説教を案出せりと云ふ。

第五章 劇詩

獨逸劇詩の起源、獨逸劇詩の起源は、明白なるが如くにして、實は大

に然らざるなり、そは劇詩の起源が、往古所謂逸として致ふ可からざる時代にありと云ふに非ず、又肥録の散亂して傳はらざるが爲にも非ず、獨逸劇詩の意義一定せざるを以てなり、劇詩は時形より云ふ時は、對話體の詩なり、又獨逸と云ふ語は、廣義に云ふ時は、ゲルマン語の意に用ゐらる、かく劇詩を、漠然と對話體の詩とし、獨逸を廣くゲルマン語の意に用ゐる時は、獨逸最古の勇者譚詩にして、イスタランド唯一の文學として、有名なる「エダ」中の對話は、獨逸劇詩の起源と稱せざる可からず、古代の戀愛詩歌にある男女の談話も、亦對話なり、降つて中世紀に於けるワルトブルグの歌合は、對話體なりき、又異教的思想を有し羅句語にて書かれたる劇詩は、既に九世紀に出てたり、獨逸劇詩の意をかく解する時は、劇詩は叙事詩と全時に發展したりと云はざる可からず、されど茲に、獨逸劇詩と稱するは、獨逸を、狹義に南獨逸語とし、又叙事詩、抒情詩中に含まれたる對話數句を以て直に劇詩とせず、異教的思想を脱して、耶蘇教的思想を述べ、羅句語を交へずして、純粹なる獨逸語を以て書きたるも

第三編 中南獨逸語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頹、千三百年より千五百年迄、第五章 劇詩



のを云ふなり、羅句語の劇詩にては、九世紀より十一世紀の間に「三王劇」(ドライケリーニヒスシビール)出で、十三世紀には聖書の事實によりたる劇「耶蘇の遭難」(ライデン、クリステイ)出でたり。此時頃より晦澁なる羅句語を避けて、獨逸語を交ふるの傾向を生じたれども、劇詩が一般に純然たる獨逸語を用ゐるに至りしは、十四世紀なり。依つて獨逸劇詩の起源は十四世紀にありとす。

古代希臘劇の濫觴は、ディオニソス神の祭典なり。羅馬劇も、僧侶が寺院に於て演じたるを始めとす。其他英佛諸國の演劇は、其始めに於て、皆寺院と密接の關係を有せり。

獨逸劇詩の起源は、宗旨劇(ダスガイストリッヒシビール)なり。宗旨劇とは、僧侶が寺院に於て聖書の降誕、遭難及び復活等、凡て聖書の歴史を演じたるものなり。我が國にて猿樂、田樂は、芝居の起源と稱せらる。而して猿樂は相撲の後の餘興として、田樂は、田植の祝の遊戯として催され、滑稽的、茶番的にして觀者をして抱腹絶倒せしめ、殆んど無意義にして、宗

教的の思想は、更になかりき。これ演劇の起源に於て、彼我相全じからざる所なり。希臘劇は始めより喜劇、悲劇の二傾向を有せり。ディオニソス神は全く相反する二性質を有し、酒の神、五穀の神としては愉快の性、生々發育の性を有すと雖も、亦憂鬱の神として考へられたり。此神話に基ける希臘劇は、ディオニソス神の愉快の性質を現はす時に於て喜劇となり、沈鬱の性を現はす時に於て悲劇となれり。

獨逸宗旨劇は、寧ろ悲劇的にして、間々滑稽的の分子を含みたり。純然たる喜劇は、宗旨劇に後れ、十五世紀に出でたり。之を謝肉節劇(ファストナハツシビール)となす。

當時獨逸にては、劇詩をドラマと稱せずして、單にシビール(所作の意)と稱し、佛蘭西にては、ミステリア(神秘)と稱したり。ミステリアと名づけし所以は、僧侶が聖書の神秘なる事蹟を演じたるを以てなり。聖書の降誕を演じたるを降誕祭劇(ワイナハツシビール)と云ひ、耶蘇復活の事を演じたるを復活祭劇(オステルシビール)と云ひ、耶蘇遭難の事を演じた

第三編 中世獨逸時代(十世紀の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 中古より近代に至る過渡時代における詩歌の衰頹、千三百年より千五百年迄、第五卷 劇詩



るを遭難劇(パッシオンズシベール)と云ひたり。十四世紀以前には、宗旨劇は、主として、羅旬語を用ゐる。舞臺には、十字架、聖墓、燈火等を連ねて、莊嚴の意を示し、又錦繡を以て、華麗なる裝飾をなし、以て觀者をして、莊嚴の美に眩惑せしめんとせり。されば僧侶は、主として耳によらず、目によりて、民衆に宗教心を起さしめ、信仰の度を高めんと努めたるなり。十四世紀頃に至りては、觀者も解し難き羅旬語を以て満足せず。宗旨劇は、全く獨逸語を用ゐるに至れり。當時最も人民の嗜好に投ぜし劇は、遭難劇の「マリアの愁歎」(マリエンクラーゲ)なりき。千三百二十二年アイゼナハに於て「賢愚十人娘」を演じたることありしが、此劇中愚なる乙女等罪あり、聖母マリアは、之を憐み耶蘇に懇願して、其罪を赦さんとせり。されど耶蘇は、其願を容れず。觀者の中にフリードリヒ、デル、ライティゲ伯ありしが、之を見て痛く驚き、神を疑ふに至り、其後問もなく、病となりて死せしと云ふ。

宗旨劇を演ぜしは、始め僧侶のみなりしが、後には俗人も之に加はり、而して舞臺に現はるゝ人數も、多くなりしかば、寺院は狹隘にして、到底

數百の人を容るゝに足らず、遂に屋外に於て、演劇をなすに至れり。其場所は一定せざりしも、一般に市場を最良の舞臺となせり。そは周圍の家屋を以て、觀覽席に充つるの便ありしを以てなり。さて此市場に設けられし舞臺は、非常に簡單にして、桶椀の上に板を並列せしものに過ぎざりき。舞臺は、天地、地獄の三部に分かれしが、此頃は廻り舞臺の如き巧妙なる装置なきは、勿論の事なれど、裝飾によつて場の景況を變ゆることを知らざりしかば、場は上下に段を築き、且つ左右に相並んで設けられたり。讀者は、公衆の面前にて、一幕毎に場所を變へたり。桶一つにて地獄ともなり、山ともなり、小銃にて雷鳴を示し、紙牌を以て、靈魂を現はす如きは、頗る滑稽なりき。演劇は一日に終ることありしも、多くは數日を要したり。例へば初日に耶蘇の遭難より埋葬の場迄を演じ、二日目に復活及上天の場を演じたり。中古の終頃に至りては、耶蘇一代記を降誕の場より演じ、之に舊約聖書中の物語を交へしかば、一劇が少なくとも一週間を要したり。佛蘭西にては、一演劇が四十日間續きしことあり。千五百四十



七年にバレンシエンスに於て演ぜし遭難劇は、二十五日間續きしと云ふ。

當時の演劇にては、女の役をも若き男が演じたり。宗旨劇は始め僧侶が演じたるものなりしも、後に復活祭劇の如きは商人が假裝して演ずるに至りて、滑稽的になりたり。

十五世紀に至りて宗旨劇に對して、世間劇と稱す可きもの出てたり。之を謝肉節劇(ファストナハツシヒール)と云ふ。

舊教にては復活祭の前六週間は、肉を食ふ事を嚴禁し、其他一般に娛樂をなす事を慎めり。されば舊教徒は此謹慎す可き六週間の前一週間は出来る丈の快樂を盡し、滑稽を演じ、假裝をつけ、假面をかぶりて、道化隊を作り市街を巡行し、人民舉つて狂喜せるが如く、大馬鹿をなす。富貴貧賤の差別なく、高貴の人に雜談を試み、盛裝せる貴女に惡戯をなすも咎を受くることなかりき。此一週間は、盛に演劇をなし、肉を食ひ、酒を飲みたり。依つて謝肉節(ファストナハツ)の名起れり。蓋し謝肉節とは、肉に

別を告ぐるの意なり。

謝肉節劇にて、最も有名なるは、ニルンベルグ市なり。現今全市の博物館にある假面は、此劇に用ゐられたるものなり。木造にして、彩色をなし、青銅を以て飾れり。

謝肉節劇は、滑稽的なれど能く社會の状態を諷刺的に寫し出し、又道徳的教訓的なり。而して十五世紀の中頃迄隆盛を極めたり。宗旨劇が寺院に於て演ぜられたるに反して、謝肉節劇は、私人の家に於て演ぜられ、舞臺の準備等は更になく、俄仕立にて市中の若者が演じたるなり。

十六世紀に至りては、演劇者は階級の如何を問はず、僧侶、學校教師、生徒、大學生、職人、市民等相混じて演じたり。宗旨劇は、時として數百人が、一時に演じたることありき。當時英國はシェイクスピアの劇詩に狂喜せる時なりしが、千五百九十年頃には、英國より演劇者渡來せり。之を英國俳優(エングリツシニコメディアンテン)と云ふ。此等の俳優は、久しき間都邑を遍歴して、英國藝を獨逸風に改めて演じたり。其場所は侯伯の宮廷及び

第三編 中世國語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄。千百年より千五百年迄) 中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頹。千三百年より千五百年迄。 第五章 劇詩



市場なりき。

劇詩家として名を知られたる人は、十五世紀に於てハンス、フォルツ及びハンス、ローゼンブリットありしと雖も、劇詩は尙幼稚なりき。ハンス、ザックス出づるに及んで、劇詩の文藝上の價值大なるに至れり。

第六章 散文

散文にても、獨逸を廣義に用ゐる時は、ウルフ、ラの聖書翻譯を以て、散文の起源となさざる可からず。されど散文にても、劇詩に於けると等しく、獨逸を狹義に南獨逸語の意に用ふ可きなり。八世紀頃には、古南獨逸語の翻譯文出て、次いで十三世紀頃迄聖書及び讚美歌其他宗教に關する翻譯夥多出てたり。されど散文として、文學上の價值大なるもの出てしは十四世紀なり。依つて此書に於ては、十四世紀以後の散文を述べ、其以前の散文を略せんとす。

散文に四種あり、第一は神秘學者の作にして、其説く所は多く涅槃によりて、天國に行かんとの理想なりき。獨逸にては(1) エツカルトを神秘

- 1. Eckhart.
- 2. Johannea Tauler.
- 3. Heinrich Suso.

4. Geiler von Kaisersberg.

學者の鼻祖となす。エツカルトは、佛京巴里にて哲學の教師となりしが、時の法王は、其名聲を傳へ聞き、羅馬に呼び寄せ、神學博士の學位を與へたり。後シトラーニスブルグ及びケルン等に於て、多くの子弟を集めて教授したり。門下中の高弟(2) ヨハナス、タッレル及び(3) ハイインリヒ、ズーゾは著名なり。ハイインリヒの著書にて名高かきは、『聖主と賢者との對話』なり。十五世紀の終頃には、シトラーニスブルグに有名なる説教師(4) ガイレル、ファン、カイセルスベルグありき。第二は、歴史的の記録にして、フリードリヒ、クローゼテルの『シトラーニスブルグ記録』、ヤーコップ、トキンゲルの『エルザス記録』、ヨハンテスの『リムブルグ記録』及び瑞西記録類等は著名なり。第三は、古文學就中羅甸、佛蘭西等の小説の翻譯なり。聖書の翻譯も、ルテル以前既に千四百六十六年より千五百十八年の間に於て、十四版を重ねたり。第四は、テイル、オイレンシュビエーゲルの名を負へるフォルクスブーフ(俗書)の意にして、十五世紀の後半に出てしものなり。此書は、初版以來版を重ねること、數百回歐洲各國の語に翻譯されたり。

第三編 中世獨逸語時代の文學(十字軍の始より宗教改革迄、千百年より千五百年迄) 中古より近代に至る過渡時代に於ける詩歌の衰頹、千三百年より千五百年迄、第六章 散文。



第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)

ルテルよりオービッツ迄、千五百年より千六百二十四年迄。

1. Martin Luther.

第一章 (1) マルティン・ルテル

中古文學が衰頹の極に達したる反動として、近世文學は大に隆興せり。其原動力となりし者種々ある可しと雖も、最も著るしき者は、文藝復興及び宗教改革なり。スコラ哲學が形式を重んじて、宗教的感情を度外視し、理性を先にして實行を後にするの弊は、夙に獨逸神秘學者エツカルト、タウレル、ズーゾー等に因て看破されたり。其結果として、此等の神秘學者は、自己を滅して、天に近づかんとの説を唱ふるに至れり。此説は、後に至りて、ルテルが唱道せし宗教改革の意見と相合する所あるなり。伊太利に於ては、既に十四世紀の始め、古學復興の氣運漸く盛なりし



ル テ ル ○ ソ ン イ テ ル マ



第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革

より現代迄)

ルテルよりオービッツ迄、千五百年

より千六百二十四年迄。

1. Martin Luthor.

第一章 (1) マルティン・ルテル、

中古文學が衰頽の極に達したる反動として、近世文學は大に隆興せり。其原動力となりし者種々ある可しと雖も、最も著るしき者は、文藝復興及び宗教改革なり。スコラ哲學が形式を重んじて、宗教的感情を度外視し、理性を先にして實行を後にするの弊は、夙に獨逸神秘學者エツカルト、タウレル、ゾーゾー等に因て看破されたり。其結果として、此等の神秘學者は、自己を滅して、天に近づかんとの説を唱ふるに至れり。此説は後に至りて、ルテルが唱道せし宗教改革の意見と相合する所あるなり。伊太利に於ては、既に十四世紀の始め、古學復興の氣運漸く盛なりし



ル テ ル ・ ソ ー ザ ー



が千四百五十三年東羅馬帝國滅亡して、コンスタンティノールは、土耳其人によつて占領されたり、希臘の學者は、赤帽の兵士に屈服するを肯んぜず、先を争うて、伊太利に難を避けたり、依つて伊太利に於ける古學復興の氣運は、益勢を増加せり、而して文藝復興の思潮は、遂に北進して、獨逸に入れり、文藝復興の精神は、益中古教會の壓抑、拘束を離れて、古代希臘の自由思想により、博愛主義を唱道せんとするにあり。

中古の終に至り、磁石の發明あり、之を利用して東半球大陸の發見となり、南洋諸島の地理明かになれり、茲に於て、地理學上の智識、地球に對する各人の思考は、一時に濶大となれり、此時に當り、ヨハン、グーテンベルグは、活版術を發明せり、其結果として、從來多くの時間と費用とを要して、尙一部人士の需用を充たすに過ぎざりし書籍は、速かに廣く世人に普及するに至れり、かく政治上、社會上、學術上及び地理學上に於て、顯著なる變動ありしかば、世界文明史上茲に一新生面を開くに至り、新南獨逸文學に、大影響を及ぼしたり、されど中古の獨斷主義を打破し、固陋



なる中古教會を倒して新たに獨逸精神界に耶蘇教の眞理を導きし事に、與つて其力強大なりしものは、文藝復興の精神を發揚したるルテルの宗教改革なりとす。

ルテルは、中古近世兩思想の衝突時期に際して出て、極力中古の教會主義に反抗し、ローマ教會の腐敗を一掃して、眞の耶蘇教を人民に傳へんと企てたり。文藝復興は、學者と民衆との間に間隙を生ずるの傾向ありしと雖も、ルテルの宗教改革の意見は、其説く所文藝復興學者の研究せる如き古文學に非ず、又深遠の學理に非ずして、平易なる宗教的教訓なりしかば、よく民衆の思想に投合したり。

マルティン・ルテルは、千四百八十三年十一月十日アイスレーベンに生まる。マンズフェルト、マゲブルグ、アイゼナハ等の諸學校に入り、千五百五年アウグステイナルクローステル寺院に入れり。父は、ルテルを法律家となさんと欲せしも、ルテルは、嘗て重患に罹りて、死に瀕せんとし、又或時迅雷に遭ひ、親友は頓死し、深く世の無常を感じ、人權を主張せんより

は、寧ろ人道を保護せんとの志堅くして、遂に宗教家となれり。千五百八年、ワッテンベルグ大學の教授となり、宗教に對する新説を講ぜしかば、聽講者非常に多かりき。千五百十二年には、神學博士となれり。時の法王レオ十世は、サン・ピエトロ寺院を建立して、金を要し赦罪符を販賣したり。茲に於てルテルは、黙する能はず。千五百十七年十月三十一日、ワッテンベルグの寺院に九十五條の論題を掲ぐ。世論獄々獨逸貴族の之に賛同するもの少なからず。然るに法王は、ルテルを異端不信の徒なりと宣言し、ルテルは、法王の宣言書を公衆の面前にて焼き棄てたり。千五百二十一年には、カール五世帝が、ワルムスに開きたる國會に出席し、カールの命に背き、昂然として議場に立ち、帝王、諸侯、高僧の面前に於て、他迄自説を主張す可しと公言せり。ルテルは、免されて、ワルムスを去りしも、皇帝は、新教を禁じたり。當時カール五世は、領土廣く、権力強大なりしかば、法王は、佛王と謀り、其勢力を挫かんとせり。カールは、法王の歡心を得んが爲めに、かくは新教を禁じたるなり。ザクセン侯は、ルテルの説に賛成し、其